OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	英語音調論研究
Author(s)	成田, 義光
Citation	大阪大学文学部紀要. 1980, 20, p. 1-128
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10054
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

英語音調論研究

成田義光

目　　次

序 …… 1

第一部　序　　説 …… 3

第一章　言語能力 …… 5

1. 言語的要素 …… 5
2. 普遍的要素 …… 9
3. 音調の習得 …… 12
4. 伝達能力 …… 17

第二章　言語理論 …… 21

1. 音声言語の優位性 …… 21
2. レベルの分離 …… 25
3. レベル間の相互依存 …… 29
4. 統合理論 …… 34

第二部　英語音調論 …… 39

第三章　文強勢 …… 41

1. 音調と強勢 …… 41
2. 文強勢Ⅰ …… 46
3. リズムと強勢 …… 50
4. 文強勢Ⅱ …… 57
5. 意味の比重と強勢 …… 65
6. 強勢と弱化 …… 72

第四章　区切り …… 80

1. 言語的要素としての区切り …… 80
2. 音声的手掛かり …… 90
3. 句構造と区切り …… 97
4. 呼気群 …… 105

第五章　文音調 …… 109

1. 文と発話行為 …… 109
2. 文音調の基本形 …… 114
3. 話者中心的音調と聴者志向的音調 …… 117

参考文献 …… 121

序

言語的要素としての音調は，音声的には我々の音声の強弱，区切り，高低によって形成される型であると規定することが出来る。言語を音声と意味の相関として捉えて，Bloomfield (1933, p. 161) のいう音声的・意味的類似性 (phonetic-semantic resemblance) に基づいて種々の型を分析するというような研究がさかんであるが，英語音調の研究もその例外ではない。Schubiger (1958, p. 1) のように音調研究の立遅れを指摘する人もあるが，言語の音調面の分析記述が言語の他の面に比べてそれ程遅れているとは思えない。少なくとも英語に関する限り Armstrong-Ward (1931[2]) や Palmer (1933) などは，音調研究の先駆的な仕事であるばかりでなく，それは今日の言語学の水準から見てもすぐれた研究である。もし英語の音調論研究に立遅れがあったとすれば，それは音調を言語構造全体の中にどのように位置づけるかという問題であったと言えよう。

さまざまな音調現象の中から種々の型を抽出して，その一つ一つの意味・機能を考察するという研究が，音素論の発達によって著しく厳密なものになったことは周知のことであろう。そしてこの種の音調研究は，今後とも言語研究の新しい成果を採り入れつつ発展するものと思われるが，最近の音調研究の一つの特徴は，それが統語論や意味論，そして語用論の研究との関連においてなされることが多いということである。言語の音調面の研究は，母音や子音などの分節的 (segmental) 要素と異なり，もともと音韻論の枠を超えるものであろうから，この新しい研究の動向はごく当然のことと考えてよいであろう。超分節 (suprasegmental) 要素としての音調の研究は，統語論や意味論，語用論の研究と相俟ってなされるのが最も効果的である筈である。

音調は音声的には音声の強弱，区切り，高低によって形成される型であると見ることが出来るわけであるが，我々はそれを意味の音声化されたものと見るのではなく，我々の言語化の過程において音調がどのような役割りを果たしているかを考察しようとするものである。我々の言語化の過程というものは，意味を音声化する過程に外ならないのであるが，そのような過程に音調がどのように参与するかを考察するのが本稿の目的である。音調の意味・機能に関して Pike (1945, p. 21) は，

(0. 1) "In English, then, an *intonation meaning* modifies the lexical meaning of a sentence by adding to it the *speaker's attitude* toward the contents of that sentence (or an indication of the attitude with which the speaker expects the hearer to react)."

と述べているが，これは本稿における我々の音調論研究の出発点となっている。我々の言語

化の過程における文の意味は，文を構成している語の意味とその文法関係との連動によって形成されるものである。しかしそのような意味をもつ文は，常に同じ発話行為を遂行するものとして用いられるとは限らない。Pike の説明によれば，文の意味は話者の態度を表わす要素によって変容することになる。つまり我々の発話行為というものは，文の意味を表わす要素と話者の態度を表わす要素との連動によって遂行されると考えられるのであるが，そのような連動の機構の中で音調は話者の態度を表わす役割りを果たしていることになる。

我々は音調を文強勢，区切り，文音調という三つの要素に分けて考察するのであるが，具体的には文の句構造や意味の比重の置き方，対話構成の原理，発話行為の種類などとの関連において考察することになる。このような枠組みと手順は，言語の構造を排列的構造と見るのではなく過程的構造と見るという我々の立場を表わすものである。Armstrong-Ward (1931², p. 56) は強調を伴う昇調の文音調の用法について次のように述べているが，これは言語の過程的構造の形成に文強勢や文音調がどのように関与するかという問題に対してきわめて具体的な示唆を与えるものである。

(0. 2) "When a speaker uses Tune II with emphasis, he implies, very definitely, something he does not express in words. The implication may be, and very often is, some contrast in the mind of the speaker, some uncertainty, indecision, encouragement, warning, a wish to avoid appearing abrupt or dogmatic, a desire to continue the argument, a feeling of politeness : in all cases a lack of finality."

強調という要素は，我々の枠組みでは意味の比重のかけ方として捉えられているものであり，それは音声的には文強勢として実現される。また音調によって表現される「含み」の例として Armstrong-Ward が列挙しているものは，我々が文音調と発話行為の関係を考えていくに当たって参考にすることが出来るものである。

第　一　部

序　　説

第　一　章

言　語　能　力

1.　言語的要素

我々の言語による伝達活動は意思や意向を伝え合う活動にほかならない。高度に発達した言語能力によって我々はきわめて複雑な内容を伝え合うことができるようになっている。この伝達活動は具体的には，適切な語彙項目を選び，必要な語形変化を施し，関連する統語規則に従って文を組み立て，さらに一連の音韻規則によって発音のし方を決定し，最終的には語用論的要素を付加して発話するというように行なわれる。実際の発話に至る過程の詳細については不明な点も少なくなく，またそのような言語化の過程に含まれる要素の選択や規則の適用のほとんどは意識的ないし意志的になされるのではないであろうが，我々の言語能力が，ほとんどどのように複雑な心的内容でもきわめて正確に言語化することを可能にするようなものであることは疑いのないことである。

確かに言語化の過程における項目の選択や規則の適用は事実上自動的に行なわれる。日本語の，

(1.1)　a.　カエル≪蛙≫
　　b.　カエル≪変える≫
　　c.　カエル≪帰る≫

という三つの語は，このままの語形では，形態上きわめてよく似ている。(a) と (b) はアクセントの形まで同じである。しかしこの三つの語はそれぞれ異なる語彙範疇に属しているということは就学前の子供でも「知っている」はずである。(a) は名詞で活用形をもたないということ，(b), (c) はともに動詞で活用形をもつが活用の種類が異なるということを知っている。つまり，言うまでもなく，(b) は一段活用の動詞で，(c) は四段活用の動詞である。このような知識・能力によって子供は，

(1.2)　その蛙は向きを変えて帰って行った。

と言うような場合，(1.1 b) の動詞と (1.1 c) の動詞の活用形を間違えることはないはずで

ある。「向きを変えって帰て」というような間違いは四，五歳の子供でもしないであろう。「変えない」とか「帰らない」と言う場合の活用形を間違えるということもまずないと考えられる。活用形に伴なって変化するアクセントの形も話者それぞれのアクセント体系の中で自動的に決定される。名詞である「蛙」も（1.2）の中ではカエルと発音されるアクセント体系の場合でも，「蛙泳ぎ」はカエルオヨギと発音されるが，「殿様蛙」はトノサマガエルと発音される。

我々の言語能力はこのように高度に発達したもので，それによる項目の選択や規則の適用はきわめて複雑で精確なものであるが，本稿で取り上げている音調の問題になると事情はいささか違ってくる。本稿で音調というのは，序章で述べたように，音声の強弱，高低，区切りによって形成される型を指すのであるが，言語のこの音調的側面に関する限り，項目の選択や規則の適用がいつでも義務的に自動的に行なわれるわけではない。(1.2) の例について再び考えて見ると，この場合音の高低によって形成される型は，語のアクセントや語形変化に伴なうアクセントの形の変化はほぼ一定であろうと考えられるが，区切りによって形成される型の方は同じ程度に一定であるとは言えない。最もふつうには，

(1.3) a. （その蛙は）（向きを変えて）（帰って行った）
b. （その蛙は）（向きを変えて帰って行った）
c. （その蛙は向きを変えて）（帰って行った）

のように三通りの区切り方が考えられる。そしてこの (a), (b), (c) のどの区切り方で発音しても大きな意味の差異は感じられない。区切りごとの音調も，この場合文末では一定であるが，それ以外の切れ目では昇調，降調，平板のいずれでも発音され得る。従って (1.2) の文に随伴して用いられる音調にはいろいろな形があり得ることになり，一般に音調の型は，言語のほかの面に比べてやや安定を欠くものであると考えられることもある。

福村（1965）は英語における強さ，高さ，連接（juncture）などの超分節要素（supra-segmentals）を文法的要素として種々検討した後「この強勢型は，時には superfix と呼ばれるように，文法的には派生形態の中に位置を占め，しかも適用範囲も狭く，また時間的にも地域的にも個人的にも安定性を欠き動揺しているものである。語強勢が以上のようなものであれば，それよりも安定性の弱い文強勢・音調・連接等の文法的性質は更に弱いものと思われる」(p. 17) と述べている。福村は Bloomfield (1933) や Fries (1952) が超分節的要素を積極的に文法要素として認めていたのに対して，それは言語学の専門家たちでもその識別が困難であるほど不安定なものであり，またその社会的制約も弱いという点を考慮して，この超分節要素を非言語的要素に接近しているものと結論している。

確かに言語の音調面の型や意味・機能の分析には種々の困難が伴なうことも事実であるが，そのために音調を非言語的要素として言語研究の対象から外してしまうことはできな

い。音調を分析する能力は我々の言語能力の重要な部分を構成していると考えられるからである。実際の発話に際しても我々はふつうの場合，要素の選択と規則の適用によってその発話に適合する音調の型を形成し，意図する意味をできるだけ曖昧性なく伝えようとするはずである。音調の型を形成する能力と，それを分析する能力はもちろん一つのものであるが，そのような言語能力は決して安定性の弱いものではない。もし安定性の弱いものがあるとすれば，それは我々の言語能力そのものではなく，むしろその言語能力を解明するための研究方法であると言うべきであろう。言語能力の発達は系統発生的にも個体発生的にも驚くべきものであるが，それに比べれば我々の研究方法は漸く直立歩行を始めたばかりであると言っても大して言い過ぎではないだろう。

このように我々は音調を言語的要素として積極的に認める立場に立つものであるが，ここで少し英語の具体例について考えてみることにする。

(1.4) a. 'About Mrs. Pocock people may differ.'
b. 'Is that the daughter's name—"Pocock"?'
c. 'That's the daughter's name,' Strether sturdily confessed.
d. 'And people may differ, you mean, about *her* beauty?'
e. 'About everything.'
f. 'But *you* admire her?'
—H. James, *The Ambassadors*.

まず (a) は短い文であるが，その語順からして二つに区切って発話されると我々は解する。少なくともそういうように発話される可能性がきわめて高いと考えられる。理論的には，About Mrs. Pocock/people may differ. というように区切って発話することが可能である。(b) はダッシュの所で区切られ，しかもその部分で音調は昇調になり，"Pocock" は全体として高くしかもその末尾の音調は昇調になる。(c) では我々は Strether sturdily confessed という発話行為の種類を示す表現（Austin, 1962, p. 32）によってその発話の口調を知ることができる。(d) は句読法上のコンマによって示されているように三つに区切られ，you mean という質問をする発話行為を示す表現の末尾と文末の音調はともに昇調になり，*her* のイタリックは her beauty の部分が全体として高い音調になることを示していると我々は解釈する。この場合発話者の関心は Mrs. Pocock の「美貌」に向けられている。(e) については特に説明を要しないと思われる。(f) の *you* のイタリックは，(d) の *her* とは異なり，「ほかの人は別としてあなたは」という意味をあらわす文強勢ないし高い音調を示し，文末の音調は疑問符の示す通り昇調になると我々は読むはずである。

音調は，この (1.4) の例のように書かれたものであっても，それが会話ないし談話（discourse）として提示される限り，曖昧性なく解釈される。従って，

(1.5) "Many things that have vital importance in speech—stress, pitch, colour of

the voice, thus especially those elements which give expression to emotions rather than logical thinking—disappear in the comparatively rigid medium of writing, or imperfectly rendered by such means as underlining (italicizing) and punctuation."

という Jespersen (1933, p. 17) の言葉は，書き言葉に対する不信感ではなく，我々の言語能力に対する不信感を表わしていることになる。書き言葉には現われないという点では文法上の要素や関係も同じである。品詞を示す符号とか主語や述語や目的語を示す符号があるわけではない。その点では音声的要素，とりわけ音調は，綴り字と句読法でほぼ完全に表わすことができる。

このような意味で我々は音調を言語的要素として認めることになんら躊躇を感じないものであるが，Jespersen が (1.5) で言及している colour of the voice などを，発話に付随する言語的要素として扱うことができるかどうかは疑問である。確かに我々の音声の種々相を知覚し認識する能力は我々がふつう考えている以上にすぐれたものである。我々は驚くべき数の人の顔を見分けることができるように人の声を聞き分けることができる。単に声で人を識別することができるだけでなく，その人の心理状態も分るのがふつうである。Hockett (1958, p. 60) につぎのような指摘がある。

(1.6) "We can often tell who is speaking even if we cannot make out exact words. Speakers achieve some sort of effect through modulations of the quality of their voices, independently of their words and intonations : we speak loudly or softly, slowly or rapidly, in a high register or a low one, raspingly or hollowly, and so on. Without seeking exact precision, we can perhaps class all this as *voice-quality modulation*, constituting a sort of aura around the linguistically relevant core, and serving to identify speaker and, in some vague sense, the speaker's mood."

我々は自分の知っている人の声であれば多くの場合電話などでも識別できる。そして人の声にはさまざまな「表情」があって，それによって我々はその人の情調を知ることができる。そのようなまだあまり分析の進んでいない諸特徴を我々は，音調と区別して＜声調＞と呼ぶことができる。この声調は，語や音調によって構成されている言語的要素を囲むようにしてそれに随伴するという特徴をもつために，Hockett はこれを auditory aura と呼んでいるのであるが，これを言語的要素と認めるか，あるいは非言語的要素と見做すべきかを決定することは困難である。我々はこれを非言語的要素として排除するのではなく，〈超言語的要素〉(supralinguistic elements) と見做して，その伝達的効果をできるだけ考慮に入れることが望ましいと考える。語とか文というものは，実際に発話されるとさまざまな＜囲気＞ (aura) を帯びるものである。例えば，

(1.7) a. What an instrument is the human voice! How wonderfully responsive to every emotion of the human soul! In Hepzibah's tone, at that moment,there was a certain rich depth and moisture, as if the words, commonplace as they were, had been steeped in the warmth of her heart.

b. Fewer words than before, but with the same mysterious music in them! Mellow, melancholy, yet not mournful, the tone seemed to gush up out of the deep well of Hepzibah's heart, all steeped in its profoundest emotion. There was a tremor in it, too, that—as all strong feeling is electric —partly communicated itself to Phoebe.

—N. Hawthorne, *The House of the Seven Gables.*

というような場合は，発話の中に用いられた語の帯びている超言語的囲気のほうが，語のもつ言語的意味よりはるかに強く相手を印象づけている。このようなことは我々が日常的にもよく経験するところであるが，それを綴り字と句読法でもって書き表わすことはほとんど不可能であろうから，小説などでは（1.7）のような説明を要するものと思われる。

以上のように我々は，発話（行為）の種類を明確にし，話者の意図する意味を伝達ないし喚起するための言語化の過程に参与する音調を言語的要素と認め，話者の心理的「表情」としての声調ないし囲気を超言語的要素と認める立場に立つものである。

2. 普遍的要素

言語の音調的側面は言語のほかの面に比べて，人類言語に共通の要素を多くもっているであろうということは容易に想像できる。我々の発声器官は本来的には消化器官と呼吸器官であり，それは人類に共通であるばかりでなく，人間以外の多くの動物にも共通である。そしてこれらの器官がいわば二次的に発声器官として機能する場合でも，同じように人類にも多くの種類の動物にも共通である。我々は言語的要素としてだけでなく，さまざまな随意的ないし不随意的な非言語的要素としても声を発する。その際の声の強弱，高低，区切りを調節する機構がきわめて精巧なものであることも普遍的に認められる事実である。

従って，このような発声活動が我々の伝達活動における言語化の過程に参与する場合にも種々の普遍的な特性が見られるのはごく当然のことであると言えよう。Gardiner (1951², p. 160) は音調の形式と機能に関して，

(1.8) "Intonational form is the name given to those differences of tone, pitch, stress, & c., with which combinations of words having a certain syntactic over-meaning are habitually spoken. Statements, questions, commands, and so forth have all their specific intonational forms, and it is a strange fact ... that intonational form always functions congruently."

と述べているが，この中の Gardiner の音調形式の定義は我々の場合とほぼ同じであるから，特に問題はないと思われる。しかしこの中の，音調形式は常に congruently に機能するという指摘は重要である。この congruently という語は「自然的・合理的」という意味に解することのできるものであり，従って「非恣意的に」という意味に近いものであると考えられるからである。言語形式の意味・機能は，ソシュールのいう意味で恣意的つまり非自然的なものであると我々は考えているはずであるが，音調形式の場合はいささか事情を異にしていてその機能はきわめて自然的つまり非恣意的であると Gardiner は考えていたようである。その理由として彼は，

(1.9) "The reason doubtless is that intonation is much closer akin to natural reaction than is a spoken sentence. A speaker cannot disguise his tone of voice so easily as he can dissimulate with words." (p. 205)

というように，発話される文に伴なう音調は自然的反応に非常に近いものであることをあげている。彼は我々のいう声調も音調の中に含めて考えているので，音調を自然的な反応と見ることは彼にとってごく当然のことであっただろうと考えられる。

我々の心理状態は，感情が高ぶっているときとか意気消沈したとき，態度が明白である場合，態度があいまいである場合など，我々の発話にほとんど自然的に表われるものである。それが声調として表出されるか，音調として表出されるかという違いはあるにせよ，そういう言語的，超言語的要素の多くは民族を超えて普遍的性格をもつものであろうと思われる。Gardiner も (1.9) の中で言っているように，我々は言葉を濁したり，ごまかしたりすることはできても，口調を偽ったり繕ったりすることはそう簡単にはできないものである。それも我々の心理状態や感情の動きというものは，我々の発話のし方に自然的に忠実に表われるからであろう。

音調や声調による情意表出の高忠実度 (high fidelity) とでもいうべき特性について我々はふだん大して疑問や不安をもっているようには思われない。例えば，

(1.10) a. Her voice sang : 'It's romantic, isn't it, Tom?'
b. 'No, it's not exactly a police dog,' said the man with disappointment in his voice.
c. 'The last one was the one I met you at,' answered the girl, in an alert confident voice.
d. 'Not that day I carried you down from the Punch Bowl to keep your shoes dry?' There was a husky tenderness in his tone... 'Daisy?'
e. 'Please don't.' Her voice was cold, but the rancour was gone from it.
f. The voice begged again to go. '*Please*, Tom! I can't stand this any more.'
—F. Fitzgerald, *The Great Gatsby*.

などに見られる声調による情意の表出に我々はそれほど作為を感じない。(a) の口調は実際に発話された文の中に用いられている romantic という語と呼応するような調子であり，(b) はがっかりして気後れした口調で，反対に (c) は臆さない自信に満ちた話し方であろうというように我々は，そのことを意識するかどうかは別として，それぞれの声音（こわね）を想像しながら読んでいるはずである。そして (d) のやさしい口調，(e) のひややかではあるが憎しみは消えた声，(f) の哀願するような言い方なども同じようにそれぞれの聴覚像を描きながら読んでいると思われる。声音（こわね）は言葉以上に多くの事を語るものであることを我々は経験によって知っているのである。ただそれを厳密に分析する方法を持ち合わせていないだけである。また，

(1. 11) 'Sit down, Daisy,' Tom's voice groped unsuccessfully for the paternal note. 'What has been going on? I want to hear all about it.'
—*Ibid.*

というような言葉と口調が符合しない場合でも，それは Tom という人間が自分の妻に対してあたかも親が娘に問い質すような口のきき方をしなければならないという事態に陥ったためであると我々は解する。自然の状態では言葉と口調は一致するものである。一致するだけでなく，言葉は聞き取れなくても音調や声調だけで話者の意図とか心理状態がわかる場合が少なくない。そしてそのような言語的・超言語的要素は，言葉のほかの要素に比べて普遍的性質を多分にもっているということは前に述べた通りである。

ところでこの普遍的性質に関して有坂（1959, p. 128）は，

(1. 12) 「疑問文の場合に比して断言文の末尾が降ることの如きは，恐らく世界のあらゆる言語に共通な現象である。これは，W. Wundt などが説いているやうに，感情の自然的表出である。即ち，疑問文の場合には，解答を期待する感情の緊張が自然と文の末尾の調子を高くし，断言文の場合には之に反する。もっとも，これらの場合，感情の表出は，純生理的なものとは言へず，多少は意図的にも行はれることは事実であるが，それにしても，調子とそれによって表現される情意との関係は全く自然的なものである。従って，恣意的（"arbitraire"）な記号の体系たる言語（"langue"）とは，全く性質を異にしている。その現象の万人に共通であることは，人間としての生理的心理的本性が同一である事実に基くもので，何ら社会的な約束に基くものではない。それは，話手の情意の自発的発現であって，何ら社会から強制される形式ではない。それは断じて社会制度ではない。従って，社会制度の一たる音韻制度に属するものではあり得ない。」

と述べている。これは全体としてあまりにも断定的であるという点を除けば，一見，我々の立場に非常に近いようにも見えるが，実はいくつかの重要な点において根本的に異なる。ま

ず疑問文の末尾の音調が普遍的に昇調になるかどうか疑わしいと思われるが，仮にそうなるとしても，それが解答を期待する感情の自然的表出であると断定することはできない。また音調とそれによって表現される情意との間に常に一対一の対応関係があるわけではないから，その関係を全く自然的なものと見做すことはできない。少なくとも，我々は音調が，言語のほかの面に比べて普遍的要素を多分にもっているという理由で，それを我々の研究対象から外してしまうようなことはしないはずである。我々はまた音調を我々の言語能力の重要な部分を構成するものとして捉えるのであるから，音調は langue の問題ではなく parole の問題であるとしてそれを音韻論の研究対象から外すというような立場はとらない。我々はむしろ音調や声調をその普遍的特性も含めて出来るだけ厳密に分析し，そのような研究を積み重ねることによって言語能力の解明に近づくことを目標とするものである。

3. 音調の習得

言語習得の問題に関してはいくつかの異なる立場からの研究があると思われるが，言語習得の過程を＜習慣形成＞と見る立場と，＜心的能力の発達＞と見る立場とがその主なものであろう。言語は習慣の体系にほかならず，子供はその習慣を周囲で話されていることばを繰り返し模倣練習することによって形成するというのが第一の立場である。子供は模倣の天才であると言われたりする。生れたばかりの子供は声を出すことは出来るが，ことばを話すことは出来ない。新生児は言語習慣に関する限りいわば白紙（tabula rasa）の状態であるが，喃語期と呼ばれる期間の発声練習とそれに続く言語音の発音練習を経て，次第に，後には語彙項目としてその言語体系の一部を構成するようになる「単語」を習得し始めるようになる。

これに対して第二の立場は，人間には言語習得能力とか言語習得機構というものが生得的に備わっていて，その生得的な能力がそれぞれの育つ社会の言語との接触によって触発され発達すると見る。子供は模倣の天才であると言っても，それは決して子供たちが成人のことばを機械的に模倣するということを意味するものではない。子供たちは成人のことばをいわば資料として自らの「文法」を構築すると考えるのである。この見解によれば，言語は記憶再生的に習得されるのではなく，むしろ仮説検証的に習得される。子供たちは決しておうむ返しに成人のことばを繰り返しているのではないということは，例えば，

(1.13) Daddy bringed it.

というような成人のことばとしてはほとんど聞かれない誤用例が，子供のことばには特徴的に現われるということからも知ることが出来る。この (1.13) の bringed という語形は，子供の不注意による聞き違いとか記憶違いとかではなく，仮説的な形であるというように考え

るのである。

子供たちが，片言しか話せない段階を経て，発音文法ともに成人の言語に近づいていく過程を考えれば，それは子供たちの飽くことを知らない反復練習の賜物であろうと我々は納得するが，その反面我々は反復練習さえすればおうむでも人間のことばが話せるようになるとは考えない。人間の子供にはいわば植物の種子のような言語能力が生得的に備わっていて，ただその発芽と開花，結実を待つだけであるのに対して，人間以外の動物にはそのような能力は与えられていないのである。種子も適度の水分や熱がなければ発芽しないように，言語能力も充分な社会的訓練が伴なわなければ開花しない。従ってこれら二つの立場が，経験論（empiricism）と合理論（rationalism）の対立とか，メカニズム（mechanism）とメンタリズム（mentalism）の対立，現実主義（realism）と浪漫主義（romanticism）の対立というように，その相違点だけが強調される傾向があるのは不幸なことと言わざるを得ない。

言語研究に関連して生ずるこの種の対立に関しては，常にすぐれた「調停」をしてきたJakobson はこの言語習得論の争点をめぐってつぎのように述べている（1968, pp. 13-14)。

> (1. 14) "Romanticism stressed the creativity of the child, while the approach of scholars like Wundt or Meringer, considered realistic by its proponents, sought to explain the intellectual, and especially the linguistic, activity of the child as mere imitation. There is some truth in both points of view. On the one hand, the creativity of the child is obviously not pure creativity, or invention out of nothingness; on the other hand, however, neither is his imitation a mechanical and involuntary adoption. The child creates as he borrows."

これは折衷主義ではなく，一つの立場を貫くためには，肝心の言語習得論そのものを犠牲にしかねないような傾向を戒めたものであろう。子供が直接に利用し得る言語資料を絶えず再構成しながら「文法」を構築していく過程を重視するあまり記憶再生的な過程を軽視するような言語習得論は妥当なものとは言えないであろう。Jespersen (1924, p. 18) や Gardiner (1951², p. 45) のいう＜定型常用句＞(formulas) などはどちらかと言えば記憶再生的に習得される言語的要素と考えられる。子供は模倣しつつ創造する，という Jakobson の言葉は言語習得論の有効な道標であると言えよう。

一口に言語習得と言っても子供たちはいろいろな要素や規則を習得しなければならないわけであるが，そのような要素や規則の中には，文字通り「習得」しなければならないものもあるであろうし，習得というよりは「発達」させると言ったほうが適切なものもあるであろう。またその中には，子供のうちに習得されるものもあれば，その習得が成人するころまで続くのもあり，さらにその後も学習が続けられるものもあると考えられる。音調や声調などの言語的，超言語的要素はその性質上比較的早い時期に習得されるものである。これらの要素こそ習得されるというよりは，より自然的に発達すると言うべきであろう。母音や子音な

どの分節的要素は，Jakobson (1968, pp. 20-23) のまとめるところによれば，実にさまざまな種類の発声（練習）が行なわれるところの喃語期と，その後の言語音の発音（練習）が行なわれる時期との間に直接的な連続性は見られないというが，超分節要素の場合はそのような連続性を認めるという点で多くの観察報告は一致しているのが特徴である。

例えば Crystal (1975, pp. 146-149) は英語を母国語として習得する子供の音調の発達を五つの段階に分けて説明している。まず第一段階は前言語的 (prelingnistic) と呼ばれる段階で，最初は生物学的に決定された未分化の発声から，次第に生得的に決定され分化された発声に変る時期である。音声的にも未だ不安定で，その機能も情動的なものでしかない。第二段階は生後7か月から10か月までの期間であるが，この段階になると発声も更に分化したものになり，安定性も増し，例えば昇調で調音される [a] というような発音は 'ta' すなわち 'thank you' と言っているらしいとか，平調に調音される [ɔ:dɔ:] は 'all gone' の意味らしいというふうに解釈することが出来るようになる。この [a] とか [ɔ:dɔ:] などの初期的語彙項目は，分節的特徴と超分節的特徴の両方をもっているが，どちらかと言えば後者のほうが安定性もあり抽出もしやすい。そしてこのような項目は，言語の普遍的な要素ではなく，個別言語に属する要素が発生する最も初期の例であるという。

Crystal のいう第三段階は，初期的文が発生する生後12か月ころまでの期間で，この段階ではまず文の枠となるような音調単位の意識が発達する。この音調単位 (prosodic unit) は急速に拡充されて，間もなく強さや高さ，長さ，緊張度，リズムなどの諸特性による区別が見られるようになる。そしてやがて高さの変動の方向による区別が言語的機能をもつようになって，陳述と質問を区別するような降調と昇調の二種類の音調が発生する。そして第四段階は生後18か月前後で，初期的語類の区別が生じる時期であるが，この段階になると子供は言語使用の実際の場面から離れて，いわば遊びとしても音調を使うことができるようになる。最終の第五段階は，音調面の習得が完了すると Crystal が考える段階である。英語を母国語として習得する子供の場合は，2歳から2歳半までに到達するのがふつうであるこの段階では，文の構造が複雑になり，いわゆる二語文が発生する。そこで文のどの部分を強調するかを強勢で示すという重要な発達が見られるようになる。また文が長くなればいくつかの音調単位が連結されることになり，リズムや休止や速さによる区別も生じる。そして次第に文の種類も多くなり，それに応じて音調の機能負担 (functional load) も増大するために，例えば昇調の音調は質問を表わすだけでなく，文法的従属とか呼びかけなども表わすようになる。こうして音調の習得はこの段階までにほぼ完了すると Crystal は言う。

音調の習得は (1) 言語習得のきわめて早い段階でなされるものであり，(2) その初期的要素は生物学的ないし生得的に決定されていると考えられるもので，しかも (3) その初期的段階とその後の段階との間には直接的な連続性が見られる，という三つの点においては Lieberman (1967) や Lenneberg (1967) もほぼ同じ考え方をしている。Lieberman (1967, p. 41) は，

(1.15) "In the very first months of life, during the babbling stage, and indeed during the very first minutes of life children employ 'meaningful' intonational signals. The cries are at first meaningful only in that they have a physiological reference. We believe that these signals, which appear to be innately determined, provide the basis for the linguistic function of intonation in adult speech."

と述べているが，彼の音調論の最も重要な要素は呼気群（breath-group）であり，その原型は新生児の泣き声に既に認められ，それが後に音調としての言語的機能をもつようになるというのである。Lenneberg (1967, p. 279) も，

(1.16) "The first feature of natural language to be discernible in a child's babbling is contour of intonation. Short sound sequences are produced that may have neither any determinable meaning nor definable phoneme structure, but they can be proffered with recognizable intonation such as occurs in questions, exclamations, or affirmations. The linguistic development of utterances does not seem to begin by a composition of individual, independently movable items but as a whole tonal pattern."

というように音調は個々の分節音素に先立って習得されるもので，しかもそのような初期的音調は，質問とか感嘆，断言などの発話に伴なう音調と基本的に同じであると述べている。子供たちは初期の段階では個々の分節によりは型全体に強く反応するものであり，従って子供たちにとってより直接的な刺戟となるのは個々の音素ではなく，音調型のほうである。子供たちが言語習得の初期の段階では分節要素の調音がうまく出来ないのはそのためであるとLenneberg は言う。模倣の天才たちのことであるから，子音や母音などの発音も正しく真似ることが出来たとしても不思議ではない。子供の言語習得過程に見られる＜全体から個々の要素へ＞という順序は恐らく生物学的に決定されているものであろうと彼は考えている。

我々は先に音調は，音声的には，音声の強弱，高低，区切りによって形成される型であると言ったが，そのような意味での音調の型は，Crystal が言うように，二歳半ころまでに習得されると一応考えられる。しかし我々の音調に関する知識・能力の発達はなお，(1) 統語論的意味論的構造の拡充とか，(2) 対話ないし会話の原理および構成の把握，(3) 社会意識の深化と社会的構造の認識などが伴なわなければ充分なものとは言えない。従って音調や声調の習得は，少なくとも部分的には，いわゆる言語形成期を過ぎても続けられると考えるべきであろう。例えば，

(1.17) a. I did not go, because it was hot.
b. I did not go because it was hot, but....

というような場合は，この発話の統語論的意味論的構造の分析と，音調による区切りすなわ

ち句切りが平行的に行なわれ，その句切りごとに昇調（あるいは平調）や降調の文音調が適切に配置されて，ふつうの場合曖昧性なく (a) か (b) かが発話される。また，

(1.18) a. What is your name?
b. Where do you come from?

などの疑問文は，降調で発音されると「事務的」な質問になり，昇調で発音されれば「親しみのある」質問になると言われるが，そういう場合の音調は，言語の使用される場面としての社会的構造を話者がどのように把握するかによって決定されることになる。つぎの (1.19) は，音調の決定がもう少し微妙な場合があることを示している

(1.19) a. 'Can I take you to your hotel?'
b. 'No, thank you. I am going to stay here a while.'
c. 'I cannot take you to your hotel?'
d. 'No, thank you.'
e. 'I would like to take you to your hotel.'
f. 'No, thank you.'
—E. Hemingway, *A Farewell to Arms*.

これはこの小説の最後の場面で，Catherine が手術後の出血で息を引き取った後，Henry が担当の医師との間で交わす会話であるが，Henry をホテルまで送りたいという医師の申し出の部分だけを抜き出したものである。また (a) は統語論的にも疑問文であるから，ごくふつうの昇調の音調を伴なうものと考えられる。この (a) が質問ではなく申し出を表わす発話であることは Henry の答え方によっても示されている。(c) は統語語論的には平叙文であるが，音調は昇調になる。そういうような構文と音調の組み合わせによって，再度の申し出による「執拗さ」が多少とも緩和されるだろうと考えられる。そして (e) は三度目の申し出であるから，しつこい申し出にならないようにという話者の配慮は文の構成に表われている。この場合の文末の音調は降調になるはずであるが，断定的な印象を与えないように調整されなければならないであろう。こういう場合は音調よりも声調のほうが重要な働きをすると言うべきであるかも知れない。つぎの (1.20) は声調の働きがもっと微妙に作用する場合があることを示唆している例である。

(1.20) a. 'Oh shut up.'
b. 'Say it again.'
c. 'Shut up.'
d. 'You say it so cautiously,' I said. 'As though you didn't want to offend anyone.'
—*Ibid.*

これは Catherine と Henry の間で交わされる会話であるが，(a) で Catherine が使っている shut up は，"reduce to silence by rebuke or refutation" [COD] というような意味で使われる口語的表現であるため，彼女は Henry の気に障らないように注意して言ったものと思われる。この場合 oh という感嘆詞も shut up という表現に伴なう「どぎつさ」を緩和する働きをしていると考えられる。このような場合の声調を記述することは難しいものであるが，我々は経験によってほぼ正確にその聴覚像を頭に描くことができる。

この (1.17)—(1.20) におけるような音調や声調に関する我々の知識・能力は，我々の社会意識の発達，つまり西尾 (1961, pp. 147-158) のいう相手に対する主体の態度の深まりと相俟って発達するのであろうから，2歳とか3歳の子供の言語能力というものは，音調面に関してもまだその発達の緒についたばかりであると考えるべきであろう。

4. 伝達能力

言語は我々にとって最も重要な伝達体系 (a system of communication) である。我々の社会は言語による伝達を基盤として成立しているようなものである。意思の疎通を全く欠いた人間社会というようなものは考えられない。その意思の疎通を我々はほとんど言語に負っているのである。言語以外にも伝達の手段ないし媒体はいろいろあるわけであるが，それは我我の日常的な伝達活動の中では補助的なものか派生的なものでしかない。言語は我々の伝達活動にとって最も精確で能率的な体系である。我々の意思の疎通は以心伝心的に行なわれる場合もあるが，それはどちらかと言えば例外的であって，ふつうは「以言伝心」的に行なわれるものである。ただ言語による通じ合いも，それが成立するためには，何らかの以心伝心的基盤がなければならないということも考慮に入れておくべきであろう。言語の働きは意味を「伝える」というよりは意味を「喚起する」ことであると考えたほうがよい場合もあるからである。

言語をこのように伝達体系と見るということは，我々は言語能力を伝達能力と見做すということに外ならない。我々はそのような意味において，子供が5歳か6歳までに獲得するという言語能力とか2歳か3歳までには習得するという音調に関する知識・能力などは，まだ幼稚なものであると考えるのである。また言語を伝達体系と見るということは，我々は言語を伝達の手段 (a means of communicction) とは考えないということを意味するものである。Bloomfield (1933, pp. 26-27) などは言語を，

(1.21)　S⟶r……s⟶R

という刺戟＝反応の図式における r……s と規定して，

(1.22) "As students of language, we are concerned precisely with the speech event (r·····s), worthless in itself, but a means to great ends. We distinguish between language, the subject of our study, and *real* or *pracitcal* events, stimuli and reactions. When anything apparently unimportant turns out to be closely connected with more important things, we say that it has, after all, a 'meaning'; namely it 'means' these more important things. Accordingly, we say that speech-utterance, trivial and unimportant in itself, is important because it has a *meaning* : the meaning consists of the important things with which the speech-utterance is connected, namely the practical events."

というように言語はそれ自体としては価値のないものであるが，大きな目的のための手段としては重要なものであると考えていたようである。言語の価値とか重要性をそのように局限して考えることは妥当でない。言語の機能は言語外の事象を言語的手段によって叙述することに限定されるものではない。我々の言語行為には挨拶とか陳述，質問，依頼，命令などさまざまな種類があるわけであるが，それは何れも言語外の事象を叙述するというよりは，つぎの (1.23) の諸例に見られるように，発話すること自体がそれぞれの行為を行なうことになる場合である。

(1.23) a. 'May I introduce,' said Paul. 'James Tayper Pace. And this is Toby Gashe. I've got your name right, I hope? My wife.'
b. 'So very glad to meet you!' said James Tayper Pace.
c. 'Hello,' said Dora.
—I. Murdoch, *The Bell.*
d. 'And I declare it's too bad, that it is!'
—L. Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland.*
e. 'And I ask you, what king of France has done better, or been a better fellow in his little way?'
—B. Shaw, *Saint Joan.*
f. 'I warn you I shant be able to keep it up ; but I'll risk it.'
—*Ibid.*
g. 'I bid you remember that I am a saint, and that saints can work miracles.'
—*Ibid.*

これらの例で (b) と (c) の挨拶の言葉は，それを言うこと自体がその行為を行なうことになる典型的な例である。同じように (d) の I declare とか (e) の I ask you, (f) の I warn you, (g) の I bid you などもそれを言うこと自体が，それぞれの行為を行なうことになるという意味で遂行文 (performative sentence) と呼ばれることもある表現である。

このように我々は言語を伝達の手段と見るより，伝達の体系と見たいのであるが，それだ

からといって我々は，言語体系と伝達体系を積極的に同一視しようとしているのではない。我々はただ言語の機能を，伝達の手段というように局限されたものとは考えないということを明確にしておきたいのである。同じように，言語能力を伝達能力と見做すという場合も，我々は何も，

(1.24)　言語能力＝伝達能力

というような等式が成り立つということを特に問題にしようとしているのではない。もしそうであれば，我々は (1.24) の等式が成立するためのいろいろな条件を検討しなければならないであろう。我々がここで問題にしたいことは，言語能力は獲得していても，言語による伝達活動を行なうことが出来るとは限らない，つまり言語能力と伝達能力とは相互に独立的なものであるというような議論は果して有効であるかということである。例えば，

(1.25)　a.　持って帰れ。
　　b.　持って帰りなさい。
　　c.　持って帰って下さい。
　　d.　お持ち帰り下さい。

というような何種類もの「文」を作ることは出来るが，言語使用の段階でその中のどれがどのような場面に適合するかを判断することは出来ないというような場合を仮に想定して見る。そういう場合，文を作る能力は言語能力の主要な部分を構成するものであるが，文の場面適合性を判断する能力のほうは伝達能力に属するものであり，従って言語学の研究対象とはなり得ないというような議論は有効であるだろうか。

ところで Chomsky (1965) が言語能力と言語運用とを明確に区別したのはこのような関連においてであったと考えられる。彼の導入した区別は，

(1.26)　"We thus make a fundamental distinction between *competence* (the speaker-hearer's knowledge of his language) and *performance* (the actual use of language in concrete situations." (p. 4)

というきわめて明快なものであるが，このような区別に立って彼は彼のいう生成文法を言語能力の理論 (generative grammars as theories of linguistic competence) として性格づけていたのである。つまり具体的な場面で実際に言語を使用する「能力」としての運用 (performance) の問題は生成文法の研究対象からは外されていたことになる。そしてまさにこの点が，アーペル・ヴンダーリヒ・ハーバマス (1976) などが実用論 (Pragmatik) の立場から批判するところとなったのである。アーペルらは，Chomsky のいう言語能力はあまりにも局限された能力概念で，それは実用論的要素ぬきに考えられたいわば独白能力のようなも

のであり，従ってそれはコミュニケーション能力（kommunikative Kompetenz）という概念によって補完されなければならないだろうと主張している。

ところが一方 Chomsky（1966）は言語使用の創造的面（creative aspect of language use）に関して，デカルトを始めとする合理主義思想家の言語論を掘り起こしながら，主としてつぎの三つの点を強調している。すなわち，人間の言語は動物の「言語」が刺戟拘束的であるのに対して，(1) 刺戟の拘束から自由であること（stimulus-free），(2) 直接的には聞いたことのない新しい文を作って新しい思想を表現することができ，しかもそのような文を (3) 場面に適合するように使用することが出来るという三点である。このように彼は言語使用の創造的側面の一つとして場面適合性ということをあげていたのであるから，彼の能力概念はアーペルらが言うほど局限されたものではなかったと考えることが出来る。

そして Chomsky（1975）では明らかに，以前の文を生成する機能に限定されていた文法ないし言語能力の理論としての文法は拡大された理論として構想されている。彼はまず，

> (1.27) "Stimulated by appropriate and continuing experience, the language faculty creates a grammar that generates sentences with formal and semantic properties. We say that a person knows the language generated by this grammar. Employing other related faculties of mind and the structures they produce, he can then proceed to use the language that he now knows." (p. 36)

というように言語能力とその他の心的能力との相互作用ということを考慮に入れることによって，理論の拡大を図ろうとしているように思われる。彼が敢て心的器官（mental organ）と呼ぶところの言語能力は単独で発達するものではなく，言語能力もその一つであるいくつかの心的能力の相互作用（interaction of several mental faculties）によって発達するものと考えられていて，そのような新しい意味での言語能力の理論としての文法が構想されていると考えられるのである。Chomsky は，恐らく言語の働きを伝達的機能に限定して考えることを拒否するためであろうと思われるが，伝達能力という概念は導入していない。しかし彼の能力概念が拡大されたことは確かである。

我々もこのような拡大された新しい意味での言語能力を伝達能力と呼んだのである。つまり，我々が獲得するに至った言語能力というものはこのような新しい意味での言語能力なのである。従って我々は，上の（1.25）の例について言えば，目上の人に対しては (a) とか (b) を用いることは適切でなく，(c) か (d) の形を用いるほうがより適切であるというふうに判断することができるのである。そして一般的には，我々は我々の社会に関する知識や信念とか，自然界に関する知識などと，狭義の言語能力との協業によって，文法的に適格な文を場面に適合するように用いて円滑な伝達活動を行なっていると考えられる。そして我々の当面の問題である音調や声調も，上の（1.18）や（1.20）の場合のように，場面適合性の問題に直接的に関与する場合があると考えられるのである。

第　二　章

言　語　理　論

1.　音声言語の優位性

言語はもともと話されるものであるから，言語の音声面の研究が重要であることは言うまでもない。我々は人類の言語の起源についてあまり多くは知らないが，言語の歴史が人類の歴史とともに古いのに比べて，文字の歴史ははるかに浅いことは確かである。そして今日でも地球上には，文字をもたない言語や方言が多数存在することも疑いのない事実である。我我の日常の言語生活も話すことが中心である。言語は第一義的には話されるものであるということは，活字文化が隆盛をきわめている今日でも首肯できる。言語は Jespersen (1933, p. 17) が言うように，基本的には話者と聴者の間の対話ないし会話である。

(2. 1)　"What is called the life of language consists in oral intercourse with its continual give-and-take between speaker and hearer."

筆者と読者の間の媒介となっている書き言葉に対して，話者と聴者の間のやり取り (give-and-take) としての話し言葉のほうが優位に立つものであると言えよう。

しかし日本語や英語のような言語の場合は，文字のもつ役割りも過少評価されてはならないだろう。我々は過去の厖大な文献資料によっていろいろな分野の研究を行なっている。言語学の分野でも特に歴史的な研究はその音声的な面の考察までがほとんど文献資料に負っているのである。話し言葉は物理的には単なる音波 (sound wave) に過ぎないのであるから，音波そのものはその場その場で消えていくものであるが，書き言葉のほうは比較的に永続性もあり安定性も高いわけである。日常生活の中でも我々は音声よりは文字のほうを信頼しているという場合が少なくない。さまざまな証文から法律の条文に至るまで，我々はそれを信頼しているというよりはむしろそれに規制されていると言うべきかも知れない。また今日の我々は自分の言語知識の中の，少なくとも内容語 (conten word) の場合は，ほとんどすべての語に対して視覚像とでもいうべきものを持っている。例えば我々は，

(2. 2)　a.　東京　　とうきょう　　Tokyo
　　b.　ふるさと　　古里　　故郷

c. ミカミ・アキラ　三上章

などのような場合，固有名詞にしても普通名詞にしても，その表記の違いによって多少とも違う印象を受ける。特に日本語の場合は，聴覚像とは全くかけ離れた (ortho)graphic image が生じることも多いはずである。英語でも，

(2.3) a. E. E. Cummings
b. e. e. cummings

などのように大文字使用法 (capitalization) の違いによって我々はかなり違う印象を受ける。この (2.3) の場合，(a) の表記法によって固定的な視覚像を持つようになっている人は (b) の表記法からは奇異な印象を受けるはずである。カナダの国名を好んで Kanada と綴る詩人がいたりするが，そのような場合もやはり Canada という慣用的な綴りによって形成された視覚像を変えるという効果を狙ったものであろう。

このような性質をもつ文字も，字体とか個人個人の「筆跡」まで考慮に入れると，第一章の (1.6) の中で Hockett が指摘していた aura のようなものを帯びることがわかる。これは Hockett のいう auditory aura に対して visual aura であるが，我々は人の声を聞きわけることができるように筆跡によってそれを書いた人を識別できる場合が多い。筆跡によって書いた人の心理状態が分る場合もある。英詩の脚韻にはふつうの ear rime のほかに spelling rime とか eye rime とかと呼ばれるものがあること，また英語には綴り字発音 (spelling pronunciation) という現象が見られることや，綴り字改革がその運動の歴史が長い割には普及していないことなど，我々に文字の果たす役割りの再考を促している問題は決して少なくない。

発音と綴り字の問題に関しても，表音文字としての英語の綴り字は一部の音声学者が考える程不規則なものではない。例えば，

(2.4) a. resign 〔rizáin〕
b. resignation 〔rèzignéiʃən〕
(2.5) a. critical 〔krítik(ə)l〕
b. criticize 〔krítisaiz〕

などのような場合，(a) と (b) の音形 (phonetic shape) 上の関係については，発音表記よりは綴り字のほうがより規則的に表わしている。つまり，我々は (a) と (b) の間の発音上の関係を語の「読み方」の問題として捉えていると考えるのである。英語の綴り字はその読み方に関する規則がたてられない程不規則なものではないであろう。特に我が国では発音表記が非常に広く用いられているが，それは個々の語の音形を綴り字とは独立的に示すものとして用いられているように思われる。(2.4) の綴り字の中の g は (a) では黙字 (silent letter) で

あるが，(b) では [g] という音価をもつというようなことさえ機械的な発音表記では表わすことができないのであるから，音形を明示するためには綴り字と発音の有機的な関係を考慮する必要がある。(2.5) では語頭の c の音価はいずれの場合も [k] であるが，二つ目の c は (a) では [k]，(b) では [s] と読まれるというふうに音形が決定されるわけである。

従来の音声学では綴り字の読み方という問題にあまり注意が向けられなかったように思われるが，それは文字とか綴り字のもつ役割りが正当に評価されなかったためではないだろうか。我々は表音文字としての英語の正書法（orthography）は，当然のことながら，英語の発音を表わす文字体系として高度に発達したもので，上の（2.4）とか（2.5）の例について述べたような意味においては，それはおそらく現在用いられているどの発音表記よりも精確な表音文字の体系であると考えるものである。そのような正書法に内在する法則性の解明に音声学者はもう少し力を注ぐべきであろう。確かに子供たちはその母国語習得の過程で，表面的には正書法とは全く独立的に音韻体系を構築するように思われる。正書法の習得はそのほんどが学校教育の中でなされるのがふつうである。しかし一方正書法は，音韻体系を表記するための文字体系として発達してきたものである。ただ表音文字の体系とは言っても，英語の正書法は音韻構造だけを英語の構造全体から切り離して表記するものとして発達したのではないが，そのような正書法と音韻構造とのいわば交点に音声学はもう少し注意を向けるべきであると我々は考えているのである。

つぎの（2.6）に例示されているように英語にはいろいろな種類の縮約形（contracted form）があるが，これは上の（2.4）や（2.5）の場合と違って，実際の談話の中での発音のし方に従って綴り字も調整される例である。

(2.6) 'But if I hadn't met Chester, he'd of got me sure.'
—F. Fitzgerald, *The Great Gatsby*.

この中の of は have の弱形と発音が同じになるために代用されたものである。これは発音のし方を慣用的な綴り字よりは忠実に表記しているのであるから，意味解釈の上で曖昧性はないと思われるが，文法的には逸脱した形であり solecism の例である。発音のし方はいわゆる標準語の場合でも，多様に変異するものであるから，正書法もある程度は調整される場合もあるわけである。

このように我々は，文字の役割りを単に周辺的なものとか派生的なものと考えるのではなく，むしろ積極的にそれを言語的要素と見做す立場にたつものであるが，このことは音声言語の優位性を認める立場と矛盾するものではない。言語は確かに音声言語として発達してきたと考えてよいものである。そして表音文字の体系としての英語の正書法はそのような音声言語を表記する方法として発達したものである。従って音声だけでなく文字も同じように言語的要素と認めるということは我々にとってむしろ当然のことなのである。ただ我々が音声

言語の優位性を認めるという場合それは決して Jespersen (1933, p. 22) がつぎのように言う場合と同じではない。

(2. 7) "All language is primarily spoken and thus consists of sounds. It is therefore necessary at the very outset to get a clear idea of the sounds that make up the language, and to understand how they are produced by means of the organs of speeh, viz., the lips, the tongue, the soft palate, the vocal chords, and the lungs."

言語は第一義的には話されるものであると Jespersen が言うとき，それは言語化ということは音声化されるか，文字化されるかのいずれかによって実現されるものであるが，音声によるほうがより基本的であるということを意味するはずである。言語化ということは語彙項目とか形態論的要素，統語論的要素，音韻論的要素などによって構造化するということに外ならないのであるから，音声は言語を構成する諸要素の中の一つに過ぎないことになる。もちろん音声は言語の構造化にとって不可欠の要素であり，その音声を調音音声学の立場から研究することは言語学の重要な一部門である。その点において我々も Jespersen と全く同意見であるが，ただ彼が言語研究の手始めに (at the very outset) 音声に関する理解が必要であると言っていることには注意を要するように思われる。音声言語の優位性を認めるということは取りも直さず音声学とか音韻論の優位性を認めることになり，しかもそれは文字に関する研究 (graphemics とか graphonomy) に対しての優位性を意味するというよりは，言語研究の他のすべての部門に優先すると考える立場に Jespersen の立場は非常に近いことになるからである。Jespersen より以前に Sweet (1891, xii) は，

(2. 8) "An essential feature of this grammar is that it is on a phonetic basis. It is now generally recognized, except in hopelessly obscurantist circles, that phonology is the indispensable foundation of all linguistic study, whether practical or scientific—above all, of historical grammar."

というように音声学ないし音韻論を言語研究の不可欠の基礎と考える立場を明らかにしている。つまり，Sweet は音声に関する研究を文法研究などの先要要件と見做していたわけである。確かに英語の正書法で用いられているアルファベット26文字に基づいて英語には 5 個の母音と21個の子音があると考えるような「音声」に関する知識では，文法の研究は望めないであろうから，Sweet や Jespersen が音声研究の優先性を強調するのは当然のことである。そしてこのような立場を最も強力に押し進めたのは Palmer の *A Grammar of Spoken English* であろう。この Palmer の文法書は On a Strictly Phonetic Basis という副題に示されている原理で貫かれているのであるが，それは彼自身の説明によれば，

(2. 9) "All words and examples are given in phonetic spelling, the only possible

procedure to follow when dealing with the spoken form of a living language whose orthographic and phonetic systems are mutually at variance. Moreover, since intonation is an integral part of the grammar of Spoken English, a liberal use has been made of tonetic signs." (1939², xxxiii-iv)

という実に徹底したものである。

以上のように，音声言語の優位性を認め，音声研究を文法研究の先要要件と考える立場は，一見きわめて当然のことのように思えるのであるが，ここで我々は文法研究を音声研究の先要要件と考える反対の立場もあり得ることを考慮に入れなければならない。言うまでもなく言語はきわめて入り組んだ構造をもつことを特色とする。言語化するということはいろいろな種類の要素を選択しながら種々の規則を適用して構造化することに他ならない。そのような言語化の過程の中でどの部門がどの部門を前提要件としているかということを明らかにすることは容易でない。しかし，そのように入り組んだ過程的構造から音声だけを切り取って考察することは出来ないということは明らかであろう。我々は言語の音声の音響音声学的研究を軽視するものではないが，そのような場合でも音声を物理的な音として分析するのではなく言語の過程的構造の一部を構成する要素として分析するのである。なお我々のこの「過程的構造」という考え方は，時枝（1941）の創見による言語過程説や Pike (1945, p. 171) によって提示された Layers of Structure さらに Hockett (1954) によって詳しく論じられた IP モデル (Item and Process model) を発展させたものである。

2. レベルの分離

我々は先に音声言語は物理的には音波であると言ったが，言語は決して物理的現象ではないのであるから，音声を音波と見做すことはできない。第一章の (1. 21) にあげた刺戟＝反応の図式における r……s に関連して Bloomfield (1933, p. 26) は，

(2. 10) "The gap between the bodies of the speaker and the hearer—the discontinuity of the two nervous systems—is bridged by the sound-waves."

と説明しているから，彼はこの r……s を音波と見做していたことになる。この点に関する限りソシュールも基本的には同じである。彼のよく知られた言の循環 (le circuit de la parole) において，個人 A の口から個人 B の耳に伝播するのは音波 (ondes sonores) と見做されている。しかし Bloomfield の図式では，この r……s そのものが彼のいう speech-occurrence または speech-event であるから，彼がそれを純粋に物理的な現象として把えていたかどうかは疑問である。Fries (1952, p. 34) も Bloomfield と同じく，ある刺戟場面に

おいて個人Aが音声を発し，それを個人Bが聞いて反応を示す場合の音声をやはり音波と見做しているが，その音波としての音声そのものが彼のいう speech act である。従ってそのような speech-event ないし speech act として発せられるところの音声を純粋に物理的な音波と見るということは我々には奇異に感じられる。発話行為を実現するものとして発せられる音声は意志的（voluntary）なものであり，有意的（meaningful）なものである。従ってそれは物理的な音波ではない筈である。

言語の音声をこのように執拗なまでに物理的に捉えようとしたことの背景には，彼らの言語理論上の要請があったと考えられる。彼らは言語を飽くまで物理的に（physically）機械主義的に（mechanistically）研究しようとしたのである。彼らにとって「科学的」であるということは「物理的」であるということに外ならなかったと考えられるのである。彼らは Sapir (1925, p. 37) が，

> (2. 11) "Perhaps the best way to pose the problem of the psychology of speech is to compare an actual speech sound with an identical or similar one not used in a linguistic context.... A good example of superficially similar sounds is the *wh* of such a word as *when*, as generally pronounced in America... and the sound made in blowing out a candle, with which it has often been compared."

というように言語音の心理的面を重視するような音声研究の必要を説いていたことには同調せず，音声の物理的生理的面の研究を建て前とすることによって，彼らの言語研究を科学的なものにしようとしたと考えることが出来るように思われる。言語を話されたものとして物理的に捉え，それを出来るだけ客観的に分析しようとしたのである。つまり Sapir のいう音声の心理の問題に立ち入ることを極力避けようとしたわけである。

このような言語理論上の要請のもとで Bloomfield 以後の構造言語学者たちは，音韻論ないし音素論を自律的（autonomous）な部門と見做し，音韻分析のレベルを形態論や統語論のレベルから分離すべきであると考えたのである。このレベルの分離（separation of levels）ということは彼らの言語理論が，

> (2. 12) "It has been correctly pointed out that if morphemes are defined in terms of phonemes, and, simultaneously, morphological considerations are considered relevant to phonemic analysis, then linguistic theory may be nullified by a real circularity."

と Chomsky (1957, pp. 56-57) が言うような循環論に陥らないために必要であったと考えられる。確かに，一方では音素によって形態素を定義し，他の一方では形態論との関連において音素を分析するのは循環論であろう。しかも構造言語学においては音素論は形態論や統語論の前提要件となっていたのであるから，このような循環論に陥らないようにするために

は音素論の自律性を確立する必要があったのである。これは Sweet が上の (2.8) で音韻論を言語研究全体の土台と考えていることと軌を一にするものである。構造言語学者たちの見解が直接的に Sweet や Jespersen の理論を継承発展させたものではなかったとしても彼らは少なくとも,

(2.13) a. 音声言語の優位性を認めた
b. 科学的言語研究を標榜した

という二つの点で見解が一致していたことになる。そして構造言語学においては更に進んでその方法論を厳密なものにするために,

(2.14) a. メンタリズムを排除する
b. 循環論を避ける

ということなどが要請されたのである。この (a) の要請のために彼らは Sapir のいう音声の心理に立ち入ることを避けようとしたのであり, Chomsky (1955) が取り上げている non-semantic pair test などもこの要請に応えるためのものであったと考えることができる。そして既に見たように, レベルの分離という考え方は (b) の要請に応えるために必要であったのである。このことを例えば Hockett (1942, p. 21) は,

(2.15) "There must be no circularity ; phonological analysis is assumed for grammatical analysis, and so must not assume any part of the latter. The line of demarcation between the two must be sharp."

というように説明している。音韻分析が分節的要素から超分節的要素まですべて完了した資料に基づいて文法的分析を行なうということは能率的であるかも知れない。そして実際に話されたものとして収集された資料の範囲で分析を行なう限りそれは可能でもあるだろうと思われる。

しかし我々の言語分析の仕事をそのような資料の範囲内に限定することは出来ないであろう。そのような音声的資料に, 音韻構造を構成しているすべての成分が含まれている保証はない。また収集された生の資料に基づいて音韻分析を行なう場合, 文法構造との関係を全く考慮せずに行なうことが出来るかどうか疑問である。生の資料はそれが精密に音声表記されたものであっても録音されたものであっても, それが言語的資料である限りそれに内在する構造全体から音韻構造の部分だけを切り離すことは出来ない。音韻分析は言語構造全体との有機的な関連においてなされるべきものである。母音の弱化 (vowel reduction) という問題は語強勢とか文強勢と関連がある筈であり, 強勢の問題は語強勢の場合は語の形態論的構造と関連があり, 文強勢の場合は文の句構造と関連がある。連接 (juncture) の問題も文の構

造や種類との関連を考慮することなしには解決できないであろう。また我々は第一章の（1.27）で言うような意味での心的能力としての言語の構造が，収集された音声資料によってすべて表示されていると考えることはできない。我々の言語研究はそのような資料の範囲をはるかに超えるものである。このような意味において言語学者の仕事は子供の言語習得の過程と類似している。言語学者も子供も自らの「文法」を構築するために，入手できる限りの資料を利用するのである。文法を構築するということは資料を観察し分類することではない。従って我々は言語学をかつて Hockett（1942, p. 3）が，

(2. 16) "Linguistics is a classificatory science."

と言っていたような意味で分類科学と考えるものではない。言語学を分類科学と見るか説明科学と見るかという問題に関しては，佐伯（1950）と服部（1951）の論争などもあるが，それより以前には Sweet（1891, pp. 1-4）によっても関連する問題が論じられている。最近では生成音韻論（generative phonology）の立場から，批判的に，構造言語学の音素論は分類学的音素論（taxonomic phonemics）とか自律的音素論（autonomous phonemics）などと呼ばれることがある。

以上で我々はこのレベルの分離という問題に関する我々の立場をほぼ明確にすることが出来たと考える。繰り返すまでもなく我々は，この構造言語学における方法論上の要請に関してそれは必要でもなく有用でもないと考えるものである。音韻分析が完了しなければ文法分析の作業を始めることができないと考える必要はないわけである。ところでこのような場合，音韻構造は文法分析が完了した構造に基づいて決定されると考えることはどうであろうか。Katz-Postal（1964）や Chomsky（1965）において提示された変形文法の理論の枠組みでは，統語部門によって生成された表層構造に基づいて音声形式（phonetic form）が決定されるという仕組みになっていた。これは今日では変形文法の標準理論（standard theory）と呼ばれるものであるが，我々は言語構造のどの部分でも全体との関連を考慮することなしに分析することは出来ないと考えるのであるから，このような理論の枠組みに対しても否定的な見解をもつものである。しかし音声言語の優位性を認め，音声面の研究を他のすべての面の研究に優先させるという Sweet 以来の立場に対して，統語部門によって生成される抽象的な構造に基づいて音声形式を決定するという立場のほうがより妥当であると考えられる。言語の研究は，Bloomfield（1933, p. 27）が，

(2. 17) "...in human speech, different sounds have different meanings. To study this co-ordination of certain sounds with certain meanings is to study language."

と言っているように，音声と意味の有機的関係を考究することを目的とするものであると約言できる。言語化されるものとしての「意味」と，言語化するものとしての「音声」とをど

のように関係づけるかということに関しては種々の立場があり得るわけであるが，もし言語化ということが音声化ということと同義であるとすればそれは，

(2.18)　意味⟶音声

というような単純な関係として示すことができる。しかし言語化の過程は要素の選択や規則の適用や自動調整などを含むようなきわめて複雑なものである。いま仮にこのような音声に至るまでの過程を簡略化して「文法」と呼ぶとすれば，音声と意味の関係の捉え方としてはつぎのような場合があると考えられる。

(2.19)　a.　音声⟶文法⟶意味
　　b.　音声⟵文法⟶意味
　　c.　意味⟶文法⟶音声

言語化の過程と，方法論上の部門間の関係とを混同しないように注意する必要があると思われるが，概略 (a) は音声の研究を文法研究の先要要件と考える立場を表わし，(b) は文法構造に基づいて音声形式を決定する立場を表わしていると言えよう。この場合 (a), (b) いずれもレベルの分離を前提としているが，(c) は，実は我々が考えている立場を表わすもので，直接的には言語化の過程を示すものであり，方法論上レベルの分離を要請しない立場である。

3.　レベル間の相互依存

構造言語学においては，言語は音素の配列であると同時に形態素の配列でもあると考えられていた。例えば Hockett (1958, p. 574) はこの言語構造の二重性 (duality) についてつぎのように説明している。

(2.20)　"Any utterance in a language consists of an arrangement of the phonemes of that language; at the same time, any utterance in a language consists of an arrangement of the morphemes of that language, each morpheme being variously represented by some small arrangement of phonemes. This is what we mean by 'duality' : a language has a phonological system and also a grammatical system."

このように言語は音韻と文法の二重構造をもつものと考えられているのであるが，この場合の言語構造は相互に独立的な二つの層を形成しているのではなく，文法構造は形態素によって構成され，その形態素は音素によって構成されている。つまり文法構造は音韻構造に対していわば上位の構造として捉えられていることになる。このような言語構造の把握のし方に

基づいて構造言語学では分析のレベルを明確に分離することが要請され，しかも音韻分析は文法分析に先行しなければならない，従って音韻分析は文法構造に依存してはならないということが強調されたのである。また構造言語学においては，多くの場合，音韻構造を文法構造との関連において分析するということは意味を考慮することになると考えられたのであるが，それは（2.14 a）のメンタリズムを排除するという原則に悖ることになる。例えば Pike (1952, p. 109) にはつぎのような言及が見られる。

(2.21) "Wells objected to my use of grammatical analysis to find the beginning-points of intonation contours : 'Contour beginning-points [in Pike's analysis] are not determined by phonemics alone... but by meanings—by grammatical analysis. It follows that if we desire a clear-cut separation of phonemics from grammar, Pike's system must be accordingly modified.'"

これは，Pike (1945) の音調研究において意味ないし文法構造によって音調曲線が分析されているということに対する Wells (1947) の批判に言及しているのであるが，このように意味や文法構造との関係が最も密接であると考えられる音調論の分野においても，意味や文法構造に依存した分析は厳しい批判の対象となったのである。Pike (1945, p. 27) は，彼のいう主要曲線 (primary contour) の始点 (beginning-point) は文中の強勢のある音節と一致するものであるが，その場合の強勢 (stress) は語とか句 (phrase) との関連において決定されるというように分析している。それが Wells の批判の対象となったのである。

Pike (1947, 1952) は，音韻構造と文法構造とは分析のレベルとしても言語構造の層 (layer) としても相互依存 (mutually dependent) ないし相互浸透 (interpenetration) の関係にあると考える立場から，レベルの分離を標榜する立場を批判している。

(2.22) a. "When phonological and grammatical facts are mutually dependent, the treatment of phonology without reference to grammar is a concealment of part of a most important set of structural facts pertinent to phonology." —Pike (1947, p. 155).

b. "I suggest that this rejection [of the existence of a specific limited number of phonemic units] may be related to a rejection, on inadequate grounds, of a methodology which early shows *structural interpenetration of structural levels* of analysis. I see no theoretical reason why the interpenetration of layers cannot be as much a part of stucture as the layers themselves."—Pike (1952, p. 108).

つまり Pike はこの (a) では，言語の構造全体を把握するためには音韻分析においても文法構造との関連を積極的に考慮すべきであると主張することによって，彼の研究に向けられた批判に答えている。また (b) においては，連接などの要素が文法から切り離された自律的な

音素論において正当な扱いを受けることが出来ないのは，レベル間の相互浸透を認めるような方法論を導入しないためであると批判しているのである。しかも言語理論の問題としても構造を形成している各層の間に見られる相互浸透性そのものを，それぞれの層と同じように，構造を形成する成分と見做すことの出来ない理由は見つからないと言っているのである。

構造言語学において連接（juncture）というのは Hill（1958, p. 21）などによれば境界（boundary）を合図するものである。例えば，

(2. 23) a. He will act, roughly in the same manner.
b. He will act roughly, in the same manner.

という場合この二つの文は連接の位置によって区別される。つまりこの（2. 23）ではコンマによって示された位置に単一線連接（single-bar juncture）と呼ばれる連接が置かれれば，(a) は「彼はほぼ同じように行動するだろう」という意味になり，(b) は「彼は同じように荒々しく行動するだろう」という意味になる。このような場合，レベルの分離を建て前とする分析者は音声的な特徴だけで連接の位置を決定しなければならないわけである。Hill は(2. 23)の二つの文を連接だけで意味が区別される例として挙げていて，連接を「発見」する手掛かりとなる音声的な特徴については，発音が中断されることがなくても聞き取ることができると言っているだけである。音声的な特徴として考えられるのは母音や子音の発音のし方の違いなどである。(2. 23) の場合 (a) では act と roughly の間に連接があるわけであるから，その連接の前と後の子音つまり t と r は (b) の場合より明瞭に発音されるだろうと考えられる。Hockett（1958, pp. 54-55）の用語によれば，(a) の場合の t から r への発音の移行（transition）は，(b) の場合に比べてより sharp であるということになる。このような発音のし方に関する考察は英語の音声学にとって重要なことであるが，こういう音声的特徴が連接を「聞き取る」ための手掛かりとなっているかどうかは不明である。

この連接に関して Chomsky-Halle-Lukoff（1956, p. 67）は，

(2. 24) "Junctures should be distributed in a manner that is significant on higher levels. Specifically, junctures should appear only at morpheme boundaries, and different junctures should correspond, by and large, to different morphological and syntactic processes."

という条件（condition）をたてている。彼らはきわめて明確な形でこの連接という音素論的要素を，形態論や統語論などの上位のレベルとの関連において分析しようとしているのである。言うまでもなく彼らはレベル間の相互依存性（interdependence of levels）を認める立場にたっているのであるが，彼らが連接の位置を決定するためにたてた（2. 24）の条件に関してつぎのように述べていることは，我々がここで取り上げている分析のレベルの問題との

関連において示唆的である。

(2.25) "Though it is not crucial to avoid such a formulation, it is nevertheless natural to inquire into the possibility of stating a condition for the placement of junctures which does not go beyond purely phonemic considerations." (p. 68)

つまり彼らにとってレベル間の相互依存性を認めるということは決して彼らの方法論の厳正さを損なうものではなかったのであるが，それにも拘わらず，彼らは連接の位置を決定するための純粋に音素論的な条件をたてる可能性に言及しているのである。構造言語学におけるレベルの分離という原則はそれ程強い拘束力をもつものであったと考えられる。

レベルの分離とか相互依存性の問題に関連して我々は，それが発見の手掛かりの問題として論じられているのか，あるいは理論の枠組みの問題として論じられているのかを区別して考える必要があるように思われる。McCawley (1968, p. 21 fn.) の言葉によれば「発見の手順」の問題と文法の形式の問題との区別ということになる。構造言語学においては発見の手順の問題として論じられることが多かったと思われるが，変形文法においては理論の枠組みを構成している部門間の関係の問題として，また表示のレベル (levels of representation) の問題として論じられてきているように思われる。部門間の関係としては，変形文法の標準理論では統語部門で生成された表層構造に基づいて音声形式が決定されるということは既に見た通りであるが，Pope (1971) はこのような理論の枠組みにおいても統語部門と音韻部門との間に相互浸透性が認められる場合があることを指摘している。例えば，

(2.26) Are they married?

(2.27) a. Yes, happily.

b. Yes, happily.

(2.26) のような疑問文に対して (2.27) のように短く答える場合，二種類の音調が起り得る。この (a), (b) 二つの応答文に対応するより完全な文はそれぞれ，

(2.28) a. Yes, they are happily married.

b. Yes, they are married, happily.

のようなものであって，その深層構造においては [they are married] の部分と，[happily] の部分の文法的関係が異なるものとして表示される筈である。そのような深層構造に削除変形が適用されて (2.27) の短い応答文が生成されるわけである。しかし削除変形が適用された後では深層構造で規定されていた文法的関係の違いは表示されなくなっているため，音韻部門では (2.27) の音調の指定は不可能である。従ってこのような場合の音調の指定は統語

部門における削除変形に先行して行なわれなければならないことになる。Pope は,

(2.29) Do they treat him well?

(2.30) a. No, strangely.

b. No, strangely.

などの多くの平行的な例を示している。この (2.30) はそれぞれ,

(2.31) a. No, they do not treat him well, they treat him strangely.

b. No, strangely, they do not treat him well.

と書き換えられるような応答文である。この場合も統語部門の出力 (output) であるところの表層構造によっては音調の型は決定できないというのである。このような考察によって Pope は, Chomsky の標準理論における統語部門と音韻部門は, 一方の出力が他方の入力となるという関係にあるのではなく, この二つの部門の間には相互浸透的な関係が見られると結論する。

Chomsky の標準理論は今日では彼自身によっても修正もされ拡大もされているのであるから, その標準理論についてこれ以上議論をする必要はないかも知れない。それにしても Pope の議論は我々には奇異に感じられる。もし (2.27) と (2.30) の文がそれぞれ (2.28) と (2.31) の文と同義であるならば, (2.27) においても (2.30) においても, (a) の場合の副詞は動詞の修飾語であり, (b) の副詞は文修飾副詞であるということが何らかの形で表示されていると考えられるからである。我々にとってもっと奇異に感じられることは, Chomsky は Pope の論文の原稿の段階でつぎのような解決方法を示したということである。

(2.32) "Chomsky has suggested a way of getting around this conclusion. He has suggested that the deletion rules may still precede the intonation assignment rules if, as they operate, they assign some sort of intonation markers to what remains."—Pope (1971, p. 81)

Pope が批判しているように, これでは何の解決にもならない。音調付与規則によって残った部分に何らかの音調標識が付与されるのであれば削除規則は音調規則に先行してもよいということは, 結局, 部門間の相互浸透性を認めたことにしかならない。しかし我々にとってもっと不思議に思われることは, 明らかに異なる深層構造に由来する二つの文が表層構造においては区別されないという点は Chomsky も認めているとしか考えられないということである。

要するに我々は, (2.27) や (2.30) のような文が言語化の過程のどの段階かでその文法

関係とか意味の区別が失なわれて，そのためにそれに伴なう音調の型を決定することが出来なくなるような理論の枠組みに興味をもつことは出来ない。変形文法の標準理論が我々の頭の中で実際に起る言語化の過程からは抽象された理論ではあっても，それは Pope が指摘しているような欠点をもつものであってはならないだろう。そして我々はレベル間の相互依存性や部門間の相互浸透性を認める立場に立つものではあるが，そのためにレベル間の関係や部門間の関係を曖昧なものと考えているのではない。我々は音調とか強勢とかといった音声的要素は基本的には文の統語論的意味論的構造に基づいて決定されると考えるのであって，音声形式が予め分かっていなければ統語構造が曖昧になったりするというようには考えない。上に挙げた（2.23）の二つの文も，それぞれの異なった統語構造に基づいて発音上の句切りが決定されるというように考えるのである。

4. 統合理論

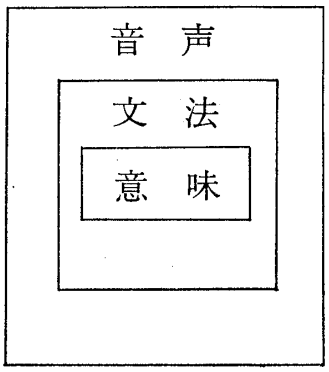
我々は序章で述べたように，音調の研究は統語論や意味論，語用論の研究と相俟ってなされるのが最も効果的であろうと考えるものである。音調論の研究は音声学ないし音韻論の枠内に限定することは出来ないからである。言語構造全体から音調だけを切り離して考察するのではなく，当然のことながら絶えず構造全体との有機的な関連を考慮しながら考察しようとしているのである。言語の構造といってもいろいろな把え方があると思われるが，我々はそれを排列的構造と見るのではなく過程的構造と見る枠組みを考えているのである。我々の伝達活動において，言語化されるものとしての＜意味＞から，言語化するものとしての＜音声＞に至るまでの過程には，形態論や統語論などのいろいろな部門が関与すると考えられるが，それらの部門が有機的な連関をもって一つの構造を形成していると見るのである。既に述べたように，そのような構造を最も簡略化した形で示せば，

（2.33） 意味⟶文法⟶音声 （=2.19 c）

というようになる。この（2.33）のような言語化の過程が音声として実現された段階でその過程的構造を断面図のような形で図示すればつぎの（2.34）のようになるであろうと我々は考えているのである。

つまり言語化の過程が音声として実現された段階における＜言語＞は，単なる音声ではなく文法構造と意味をもったものである筈である。少なくとも我々の理解活動のためには（2.34）のような構造を再構成する必要があるだろうと思われる。Jones（1960[10], p. 245 fn.）は強勢の知覚の問題に関連して，つぎの（2.35）のように述べている。

(2.34)



(2.35) "A hearer familiar with the language would not perceive the stress objectively from the sound apart from the gestures, but he perceives it in a subjective way ; the sounds he hears call up to his mind (through the context) the manner of making them, and by means of immediate 'inner speech' he knows where the stress is."

彼によれば聴者としての我々は音声を客観的に知覚するのではなく，むしろ聞いた音声の調音過程を文脈の助けによって想起しながら主観的に知覚する。これは今日の我々がいう＜合成による分析＞（analysis by synthesis）の過程による知覚と基本的に一致する見解であるが（Lieberman, 1967, p. 179 参照），我々の理解の過程もこの知覚の過程に類似したものであると考えられる。つまり我々は（2.33）のような言語化の過程を（2.34）のような構造として再構成することによって意味を理解するのであろうと考えられる。もとより図示のし方そのものに重点があるのではなく，言語の構造を過程的構造として把えようとしている我々の基本的な立場を明らかにしておきたいのである。

我々のこの過程的構造という理論の枠組みは言語研究の「統合理論」と呼ぶには余りに未熟ではあるが，ここで上の（2.33）と（2.34）の構造を敢て拡大してみることにする。

(2.36) ① 意味⟶ ② 語彙部門⟶ ③ 語形部門⟶ ④ 意味部門⟶ ⑤ 統語部門⟶ ⑥ 語用論的部門⟶ ⑦ 音韻部門⟶ ⑧ 音声

この（2.36）が（2.33）を拡大したものであるが，これは意味から音声に至る過程を示すものであるから，すべて右向きの矢印で結ぶことにしたものである。① から ⑧ までの順序は実際に我々の頭の中で起る順序を示すものではない。実際の言語化の過程はその多くの部分が自動的（automatic）なものであり，しかも合成による分析の過程を含むところの相互依存性ないし相互浸透性を特徴とするものであろうから，（2.36）に示した順序は主として枠組み構成のためのものである。また相互依存性という特徴は隣接する二つの部門間にだけ見られるのではないということにも注意しておく必要がある。そして ② から ⑦ までの各部門は

要素の選択や規則の適用などの必要な操作を施す部門であるが，言語学の研究分野としてはそれぞれ語彙論（vocabulary ; lexicology），語形論または形態論（morphology），意味論（semantics），統語論（syntax），語用論（pragmatics），音韻論（phonology）と対応するものである。これらの名称の中で特に語彙論とか意味論，音韻論などはその意味が必ずしも明確であるとは限らないから，必要に応じて説明をしなければならないであろう。この（2.36）は言語化の過程が音声によって実現される場合の枠組みを示したものであるから，それが文字によって実現される場合は⑧の「音声」の位置に「文字」が入ることになる。これも＜文字＞を音声に対して二次的なものとか派生的なものと見做す立場からすれば問題があるであろうし，また英語と日本語とでは⑦の音韻部門によって決定される音声形式と文字との関係が非常に違うものであろうということも容易に予想することができる。

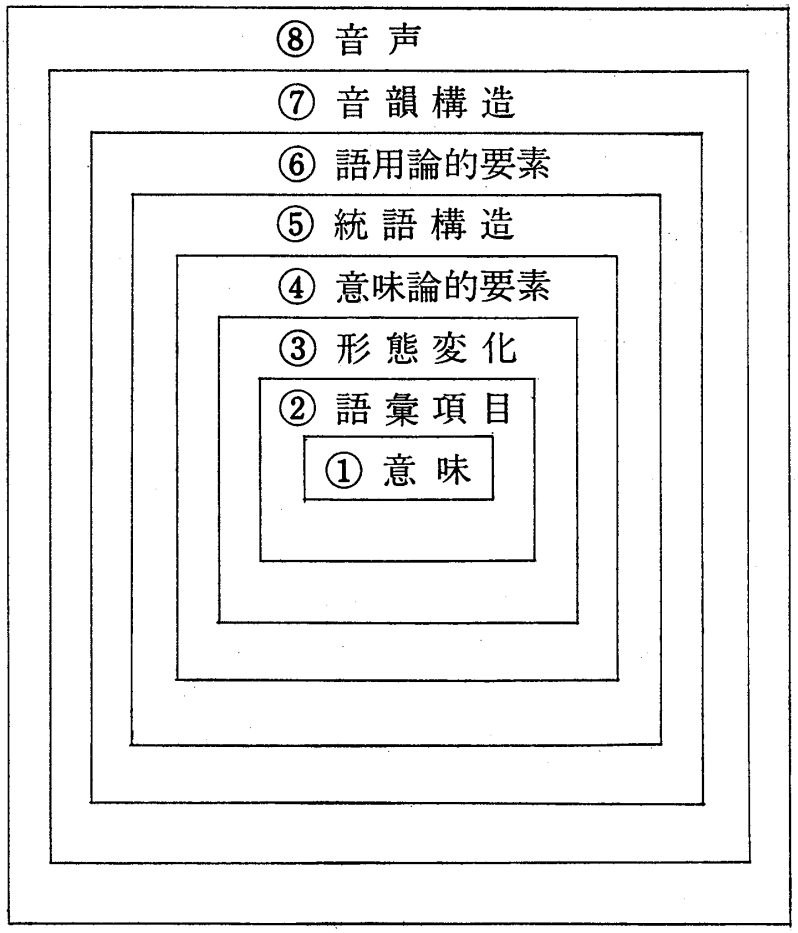
そこで（2.34）の「断面図」のほうも（2.36）に従って拡大しなければならないのであるが，ここでは我々が考えている言語化の過程が音声によって実現された段階における＜言語＞の構造を示すことになるのであるから，（2.36）の各部門によって施される操作を考慮しなければならない。そのような操作は主に要素の選択や規則の適用などであることは上に述べた通りであるが，それによって決定される要素や構造を簡略化して例解的に示せば，（2.36）による言語化の過程は，

（2.37） ① 意味⟶ ② 語彙項目⟶ ③ 語形変化⟶ ④ 意味論的要素⟶ ⑤ 統語構造⟶ ⑥ 語用論的要素⟶ ⑦ 音韻構造⟶ ⑧ 音声

というようになるであろう。これによって（2.34）の図を拡大すれば（2.38）のようになる。

我々の言語活動における言語化されるものとしての意味は，何か思うことであったり考えていることであったりするが，その意味を何か物でも手渡すように直接的に相手に伝えることは出来ないから，何らかの方法でそれを表現しなければならない。表情や身振りや発声による表現は最も身近かなものであり，言語が未だ充分に発達していない幼児の表現活動の中心をなすものである。成人にとってもこのような表現方法は決して無用のものではないが，成人としての我々の表現活動の中心をなすものは，何といっても，言語による表現である。我々は身体の一部分である手を自由に使うことが出来るようになる頃までには，心身の一器官とでも言うべき言語を駆使することができるようになっている。それで我々は身体の一部分を動かすときと殆んど同じように自然に言語を使っている。言語を奪われている人の障害は我々が想像する以上に大きなものであろうと思われる。言語使用の能力がふつうに発揮される場合の我々の言語化の過程は，（2.37）と（2.38）に概略示したようなものであろうと我々は考えているのである。言語化されるものとしての ① 意味を表現するためには適当な ② 語彙項目が選ばれなければならない。それは意味に適合するものであると同時に場面に適合するものでなければならない。その語彙項目に ⑤ 統語構造が与えられるためには，必

(2.38)



要な ③ 語形変化が施され ④ 意味論的要素が組み込まれなければならない。その統語構造は ⑥ 語用論的要素によって発話として調整され，音声化されるべきすべての要素に基づいて ⑦ 音韻構造が決定される。そして我々の言語化の過程は ⑧ 音声や文字によって実現される。

そしてこのような言語化の過程にはさまざまな相互依存性が認められる。例えば，ある語彙項目が特定の場面に適合するものであるためには，統語構造との関連だけでなく語用論的要素との関連も考慮する必要がある。語彙項目の中でも特に機能語は統語論や意味論との関係において選ばれる。接続詞などは接続される文ないし節の意味論的な内容に適合するものでなければならない。音韻構造の一部である強勢の型などは語形や句構造に基づいて決定されるのである。音調も統語構造や語用論的要素などとの関連において決定されるわけである。特に文音調は発話行為の種類を合図するという機能をもつものであるから，それは統語構造に依存するというよりはむしろそれを発話として調整する働きをもつと考えるべきであ

ろう。例えば，平叙文と疑問文は統語構造が違うわけであるが，発話行為としては平叙文を質問をする発話として用いることもあれば，疑問文を陳述をする発話として用いることもある。このような場合音調は統語論的平叙文を質問をする発話に「変える」という働きをすることになる。従って統語構造は音調に優先権（priority）を譲ることになるのである。少なくとも意味を理解する立場からすれば，統語論的に平叙文であるか疑問文であるかという区別よりは，語用論的に陳述であるのか質問であるのかという区別のほうが優先すると考えられる。我々は言語化の過程を単なる表現過程として考えているのではなく，過程的構造として捉えようとしているのであるから，絶えず理解過程という観点も取り入れながら考察をする必要がある。つまり我々の理解活動は（2.37）のような過程を逆に辿ることによって行なわれるのではなく，（2.38）のような構造を把握することによって行なわれると考えるのである。

我々は上で言語化されるものとしての意味は，我々が心の中で思っていることとか，考えていることであると言ったが，我々の発話行為の動機とか契機というものはもっと多様であると考えなければならないだろう。我々の日常の言語使用の場においては，談話構造とか対話構成の原理に従ってほとんど自動的に言葉のやり取りが行なわれる場合もあるからである。挨拶を交わす場合のやり取りなどは習慣的に機械的になされる部分が多いと考えられる。一般に定型常用句（formula）と呼ばれる表現はかなり自動的に発話されるものであろう。しかし，そのような場合も語用論的要因が働いているという点などに関しては他の場合と全く変わりはない。

第　二　部

英語音調論

第　三　章

文　強　勢

1.　音調と強勢

我々は音声的要素としての音調を音声の強弱，高低，区切りによって形成される型と規定した。その場合，音声の強弱によって形成される型が強勢（stress）であり，音声の高低によって形成される型が音調（tone；tune）である。我々は「音調」という用語を二通りの意味で使用していることになる。広義の「音調」と狭義の「音調」とを用語の上でも区別することは可能であるが，このほうが都合がよい面もあるので，このままで考察を進めていくことにする。区切りによって形成される型はそのまま「区切り」と呼ぶこともあるが，句構造との関連を表わすことにもなるという点を考慮して「句切り」という用語も使うことにしたい。本章では主として強勢の問題を扱い，区切りの問題は次章で取り上げ，音調に関する諸問題は第五章で取り上げることにする。

英語の音調（intonation）は，強勢と音調と区切りという三種類の音声的要素によって構成されるのであるから，これらの要素間の関係が緊密であることは言うまでもない。強勢と音調の関係は特に緊密である。我々の音声は強く発音される部分が高くなるという傾向を示すものであるから，強勢と音調との間には自然的な関係も見られることになる。前述のようにPike（1945）の音調研究においては，彼のいう主要曲線の始点は強勢のある音節と一致するというように分析される。例えば，

(3. 1) The ˈboy in the ˈhouse is ˈeating ˈpeanuts ˈrapidly.
3- ○2-3 3- ○2-3 3- ○2--3 ○2- -3 ○2- -4

というような場合，強勢のある音節はいずれも［°］という符号で示されている主要曲線の始点と一致している。Pike の分析では音声の高低は実線か数字でもって表わされるが，この（3. 1）のように数字が用いられる場合は，数字が大きいほど低い音調を表わす。我々の音声の強弱と高低がこのようにいつでも一致するのであれば，音調の型の分析においてはそのどちらか一方だけを考慮すればよいということになるかも知れない。しかし一致しない場合もある。

(3.2) a. Really!
b. Really?

この (3.2) の場合 (a) と (b) は，強弱関係においては同じ形をしていて，高低関係における違いによって区別されていると考えられる。つまりこの (a) と (b) は「強弱」と「弱強」というような対立ではなく「強弱・高低」と「強弱・低高（または高高)」という対立を示していると考えられる。少なくとも really という語の強勢の型は変わらない筈である。ここでこれ以上詳しく述べるまでもなく，音調の型の分析のためには，音声の高低によって形成される型だけでなく強弱によって形成される型も考慮しなければならない。

ところでこの強弱によって形成される型としての強勢については，語強勢と文強勢の二種類を区別するのがふつうである。例えば，

(3.3) a. diplómacy
b. díplomàt
c. dìplomátic
(3.4) a. from time to time
b. to téll the trúth
c. fáce to fáce

というような場合，(3.3) に見られる強勢の型は語強勢であり，(3.4) に見られる型は文強勢である。このような場合これら二種類の強勢を区別しているものは何であろうか。語強勢は個々の語に固有のものであるが，文強勢は特定の文とか句に固有のものではないという区別はこの場合当てはまらない。(3.3) に見られる強勢の型は，

(3.5) democracy, autocracy, autography, photography

などにも見られる。それでもこの (3.5) と同型の語はそう多くはない。Lehnert (1971) の逆引辞典 (Reverse Dictionary) で調べて見ても精々数十語である。しかし，

(3.6) ìntonátion

などにおける語尾から二番目の音節 (penult) に第一強勢が置かれるというような語強勢の型は驚くほど多数の語に見られる。少なくとも2000語は越えるものと思われる。従って (3.3) とか (3.6) に見られる強勢の型は特定の語彙項目に固有のものと考えることはできない。さらに，

(3.7) a. pronóunce

b. Chicágo
c. guàrantée
d. cónversátion

(3.8) a. for góod
b. in wínter
c. if it ráins
d. ìn the mórning

などに見られるように，語に用いられる強勢の型はすべて句とか文にも用いられる。これらの例では (a) から (d) までの強勢の型は全く平行的である。また英語にはつぎの (3.9) のように構成要素も強勢の型も同じである二つの形式が，一方は語を形成し他の一方は句を形成するという例も見られる。

(3.9) a. nèvertheléss
b. néver the léss

従って英語においては，語強勢と文強勢ないし句強勢は，音声の型としては変わりがないことになる。ただ語強勢は語の形態論的構造や音節構造に基づいて決定され，文強勢は文の構造に基づいて決定されるという点が違うのである。そして我々のいう過程的構造の形成という点から見れば，語強勢が決定された構造に対して文強勢が付与されることになる。そしてそのような場合語強勢と文強勢は一致するのがふつうである。

(3.10) from mórning till évening

というような場合，語強勢のある音節に文強勢がいわば重ねて置かれるわけである。このように語強勢と文強勢の関係は相互依存的というよりはむしろ階層的 (hierarchical) であると考えられる。

さてこの強勢と，音声の高低関係によって形成される音調との関係はどういうものであろうか。まず，

(3.11) a dancing girl

という例について考えてみることにする。この (3.11) は「踊り子」という意味と「踊っている少女」という意味の二通りに解される句である。別の見方をすれば，dancing という語形が動名詞であるのか，現在分詞であるのかが決定できない句であることになる。この意味上そして文法上の違いは，音調によって区別されるというように Fries (1952, p. 221 fn.) などは説明している。すなわち，

(3.12)a. a dan cing girl　　b. a dancing gir_l

というように (a) が「踊り子」という意味で (b) のほうが「踊っている少女」という意味になる。そして文法上の区別も曖昧性なく決定されることになる。この場合 Fries のいう〈音調〉はピッチの変動 (pitch changes) によって形成される対立 (contrast) を意味するものであるから，彼は (3.12) におけるような対立を音声の高低関係によるものと解釈していたことになる。しかし (3.12) の (a) と (b) とは，つぎの (3.13) に示されているような強勢の型によって区別されるものと我々は考える。

(3.13) a. a dáncing gìrl
　　b. a dàncing gírl

この二つの強勢の型はよく知られた，

(3.14) a. Énglish tèachers
　　b. Ènglish téachers

という区別すなわち「英語教師」と「英国人教師」という意味を区別する二つの型と同じであり，Chomsky-Halle (1968, p. 17) や Halle-Keyser (1971, pp. 22-23) などのいう Compound Rule と Nuclear Stress Rule にそれぞれ対応するもので，適用範囲がきわめて広いものである。例えばこの二つの型はつぎのように用いられる。

(3.15) a. gréenhòuse [名]
　　b. fróstbìte [動]
　　c. wéather-bèaten [形]

(3.16) a. a grèen hóuse [名詞句]
　　b. vèry difficult [形容詞句]
　　c. rèad bóoks [動詞句]
　　d. Jèsus wépt [文]

この (3.15) では／＼という強勢の型が複合名詞や複合動詞，複合形容詞に用いられている。そして (3.16) では＼／という型が修飾語＋主要語，動詞＋目的語，主語＋述語などの構造をもつ句や文に用いられているのである。

このような意味で我々は上の (3.11) のような句は，強勢の違いによってその二通りの意味と構造が区別されると考えるのである。我々のいう過程的構造に即して言えば，意図された意味を言語化するために然るべき句構造が決定され，その句構造に基づいて強勢が配置さ

れるということになる。我々は語強勢と文強勢の関係を階層的なものと考えたのであるが，この強勢の型と句構造の関係も同じように階層的なものと見做すことが出来る。(3.11) のような文字化された談話の断片は，それだけではそのような階層的関係を一義的に決定することは出来ないために意味が曖昧になるのである。強勢の型を句構造を把握するための手掛かり（cue）と考えること自体は誤りではないであろうが，意味解釈というものは，言語化の過程構造全体を復元ないし再構成することによってのみ可能となるのである。従って言語化の過程において，例えば，〈省略〉というような変形操作によって復元可能性 (recoverability) が損なわれたとすれば，意味解釈は不可能となるわけである。第二章の3節で見た Pope と Chomsky の議論もこの復元可能性をめぐっての議論であったと考えることが出来る。そして今日 Chomsky (1975) などが，表層構造に基づいて意味解釈をするという新しい理論に組み込むことを検討している痕跡理論 (trace theory) も，この復元可能性の問題との関連において理解すべきものであろう。痕跡理論というのは，統語構造の表示において〈移動〉という変形操作が施される場合，移動する要素の元あった位置に「痕跡」(trace) を表わす記号 t を挿入しておくというものである。

我々は音調や強勢に関して〈型〉という用語を使っているが，これは「鋳型」とか「型紙」とかの連想による用語ではない。むしろ型が形成されるという場合の規則性に重点を置いた用語である。普通名詞としての型 (pattern(s)) ではなく抽象名詞としての「型性」という意味である。我々は型そのものを習得するのではなく，型の形成に参与する規則を習得するのである。ところで我々がここで取り上げた二種類の強勢の型は，既に見たように，非常に適用範囲が広いものであるが，しかし Compound Rule によって形成されるほうの型は，Stockwell (1960, p. 363) が idiom stress と呼んでいるように，やや適用範囲は限定されるかも知れない。Stockwell は，

(3.17) White Hòuse

のような例を示しているのであるが，しかしこのような場合，White House という名称そのものと同じように強勢のほうも慣用性が高いと考えるのは誤りであろう。

以上のように，語強勢は語構造に基づいて決定され，文強勢は文構造との関連において付与される。そのような過程的構造において音調は，文強勢の付与された構造に基づいてその型が決定されることになる。(3.11) のような句は，基本的には (3.13) におけるように強勢によって区別されるものであるが，それに伴なう音調は (3.12) に示されているようなものであろうと考えられる。

2. 文強勢 I

英語は日本語と比べて抑揚のはっきりした言語であるとよく言われる。確かに英語の強弱・高低の変動による波のうねりは大きいように我々日本人には感じられる。単に起伏が激しいというだけではなく，一つ一つのうねりがきわめて規則的に繰り返されるという特徴をもっているように思われる。前節で見た（3.4）とか（3.10）などの諸例はこの特徴を典型的に示していると言えよう。このような英語の「抑揚」は〈リズム〉と呼ばれるのがふつうである。この英語のリズムは Jones (1932[3], §§907-8) によれば日本語との違いが顕著であるだけでなく，フランス語などとの差異も大きいようである。Jones はこのリズムを母音の長さとか強勢，語と語の文法的関係といったような要素によって形成されるものと考えているが，我々はこのリズムを基本的には音声の強弱関係によって形成されるものと考える。つまり英語のリズムの基本的な型は語強勢と文強勢とによって形成されると考えるのである。本節では主として文強勢の型について考察するのであるが，そのためには語強勢との関連を考慮する必要があることは言うまでもない。

まず英語の文強勢の最も基本的な型を示していると考えられる例として，つぎの（3.18）を取り上げてみることにする。

(3.18)

I saw you toss the kites on high
And blow the birds about the sky:
And all around I heard you pass
Like ladies' skirts across the grass—
O wind, a-blowing all day long,
O wind, that sings so loud a song!

—R. Stevenson, "The Wind."

これは典型的な弱強調（iambic）の詩の一連であるから，どの行も第二，第四，第六，第八の偶数の位置に強勢が置かれる。五行目だけは第七の奇数の位置にも強勢が置かれる筈であり例外的であるが，それによって全体としてすべての内容語（content word）に強勢が置かれていることになる。このことは Fries (1945, pp. 62-71) が設定しているつぎのような音調記述のための手順の一つと一致することになる。

(3.19) "Place a stress mark before the accented syllable of each content word of two or more syllables, and before each content word of only one syllable."

内容語の中でも ladies' と (a-) blowing は語強勢の置かれる音節がそれぞれの行の偶数の位置にきている。機能語(function word) は通常文強勢を受けないわけであるが，この (3.18)

では about と across は二音節語であるから，それぞれの語強勢の置かれる音節が韻律の型に従って強勢のある偶数の位置にきている。そしてこの（3.18）は全体として英語のごくふつうの文強勢の型が弱強格の韻律の型ときわめて自然的に重なり合っているというように感じられる。第五行の all day long という部分も「終日」という意味を表わす句の強勢の型としては áll day lóng という形よりは áll dáy lóng の方がむしろ適切な形であると言えるかも知れない。全体としてもこの（3.18）は，一人の子どもが風に向って語りかけているという詩であるから，文強勢の型と韻律の型が一致するところにこの詩の特徴があるのかも知れない。

ただこのような場合，文強勢の型のほうは弱と強という二つの要素だけで構成されるのではない。強には第一強勢（primary stress）と第二強勢（secondary stress）の二つの種類があって，音調の一区切りの中の最後の強勢が第一強勢となり，それ以外の強勢は第二強勢となるのが最もふつうの文強勢の型である。この場合「ふつうの」という表現はややあいまいであるが，我々としては「強調を含まない」(non-emphatic ; normal)とか「中立的な」(neutral) とか「無標の」(unmarked) という意味で使っているのである。そして弱強調のリズムを構成する弱のほうは無強勢（unstressed）となる。Fries の強勢配置の手順に従えば，機能語はすべて無強勢として指定されることになる。そこで（3.18）の第一行を音調の一区切りと見做すとすれば，その文強勢は，

(3.20) I sàw you tòss the kìtes on hígh

というような形になる。この場合の音調は，上の（3.1）で見た Pike の分析に従えば，主要曲線が四つあることになるかも知れないが，我々は第一強勢のある部分だけを主要音調と考える。この（3.20）は詩の一部分であるが，

(3.21) I sàw you bèat your wífe.
(3.22) I hèard her sìng in cláss.

などはもっと日常的な例である。このような弱強調は英詩のリズムとして親しまれているというよりは，英語のリズムとして最も基本的なものであると考えたほうがよさそうである。英詩の韻律の型としての弱強格について Drew (1959, p. 276) がつぎのように述べていることは今の我々の問題との関連において興味深く思われる。

(3.23) "Although it is not difficult to find illustrations of all these types of feet, by far the most popular and all-pervasive movement in English verse is the iambic. It suits the nature of the language better than any other, and probably nine-tenths of English poetry uses this foot as its basic metrical

unit."

これは音調の問題に対しても示唆を与える指摘であるが，ただ Drew はこの中で弱強格だけに限ってその優位性を強調しているのに対して，我々の音調論の問題としては「強弱」とか「弱弱強」などの型も含めてやや厳密でない意味で「弱強調」と言っているのである。

ところで Chomsky-Halle (1968, p. 78) によれば，

(3.24) húrricàne, insínuàte. résolùte

などの3音節ないし4音節の名詞，動詞，形容詞は，その最後の音節（ultima）が強結合（strong cluster）であるから，主強勢規則によってその音節に第一強勢が置かれる。その後で彼らのいう交互強勢規則（Alternating Stress Rule）が適用されて，最後から三番目の音節（antepenult）に第一強勢が置かれ，その結果最終音節の強勢が一段階弱められる。そしてそれは強勢調整規則によってさらに一段階弱められて (3.24) のような形になる。そのような場合の交互強勢規則に関連して彼らはつぎのように述べている。

(3.25) "Rule (39) [Alternating Stress Rule] produces alternations of stressed and unstressed vowels. It is thus one of the factors contributing to the frequently observed predominance of iambic rhythms in English."

つまり彼らの交互強勢規則は，英語のリズムの基本的な型であるところの「弱強調」の形成に寄与していることになるのである。このことは上の (3.3), (3.6), (3.7) などの語強勢の型によっても示されている。弱強調のリズムの形成には文強勢だけでなく語強勢も関与しているのである。この点をつぎの例に即して更に考えてみよう。

(3.26) a. commúnicàte
b. commùnicátion
c. commùnicátion théory
d. commùnicàtion theorétic módel
e. commùnicàtion theorètic mòdel of lánguage

この (3.26) の (a) の強勢は (3.24) の場合と同じく弱音節と強音節が規則的に交替する型を形成する。(b) では語形変化によって強勢の型は変化するが，「弱強調」のリズムそのものは変わらない。(c) では theory という語と結合してより大きな構造を構成するが，この場合の強勢は複合語の場合と同じであるから第一強勢は変わらない。それが (d) のように拡大されると句の最後の強勢のある音節に第一強勢が置かれることになり，さらに (e) のように拡大されると，その拡大された部分の強勢のある音節に第一強勢が付与され，それによって(d)

における第一強勢は第二強勢に弱められるわけである。実はこの（3.26）の(e)は Chomsky (1957, p. 6) によって実際に使用された文の一部分であって，(a) から (d) まではその句構造と強勢の型を排列的構造としてではなく，過程的構造として把握するために仮に設けたものである。この仮設的な形成過程の当否は別として，我々はこの（3.26 e）におけるような強勢の型を決定するためには，

(3.27) a.　語構造と語強勢との関係
　　b.　語構造と句構造との関係
　　c.　句構造と文強勢との関係
　　d.　語強勢と文強勢との関係

といったような関係を把握する必要があることは疑いないであろう。韻律の型とかリズムの型も音声的要素だけで構成されるのではないのである。ところで Kenyon（1950[10], § 128）は我々とは違う観点から強勢と韻律とリズムの関係を把えている。

(3.28) "The sense-stresses of speech determine the movements and contrasts of speech—the movements and contrasts of the thought and feeling. The poet selects and arranges those thoughts and feelings whose stress movements and contrasts make up the particular pattern of verse he has chosen. Thus the rhythm and the thought and feeling are one."

Kenyon の用語では語強勢は accent と呼ばれ，文強勢はこの（3.28）におけるようにsense-stress と呼ばれる。文強勢を意味強勢と規定するところに彼の立場の特色がよくあらわれていると思われるが，彼は意味とか心理的要素に基づいた原理によって文強勢の型を決定しようとする。文を構成する語の中で明確な表象とか観念を有するものには比較的強い意味強勢が置かれ，観念が不明確であるとか単に関係だけを表わすというような語には弱い意味強勢が置かれると彼は説明している。これは内容語と機能語の区別に基づいて文強勢を付与する Fries などとは観点を異にしていると考えられるが，Kenyon はこのような意味的心理的観点から文強勢を見るのであるから，彼にとって文強勢によって形成される音声の変動や対立は思考や感情の変動と対立に外ならないことになる。従ってリズムと思考や感情は一体であることになるのである。強勢の型は語類とか語形，句構造などに基づいて形成されるものと我々は考えているのであるが，それは我々の思考や情緒の流れによって形成される波動のようなものであると見ることができる。思考や情緒の流れに弾みをつけるものであると言うべきかも知れない。寿岳（1966）は日本語における〈七五調〉について「私たちの情緒や思考の流れにおいて，一種の進行係をつとめている」と述べ，さらにそれは「日本語そのものの持つ基本的性格に由来するところが多い」と言っているが，これは英語のリズムに関する

Drew や Kenyon の見解と類同である。彼らによって指摘されたことを要約すれば,

(3.29)

a. 英語や日本語のリズムはそれぞれの言語そのものの性格と相互関係をもつ
b. 〈弱強調〉と〈七五調〉をそれぞれの言語の代表的なリズムの型と見る
c. リズムは音声的要素によって形成される型であると同時に意味的心理的要素によって形成される型でもある
d. 詩歌のリズムは言語そのもののリズムと相互関係を有する

というようになるであろう。英語の弱強調のリズムに関して我々はそれを文字通りの意味に解するのではないと言ったのであるが, 日本語の七五調も二音と三音とか三音と四音とかの音数律も含むものとして理解すべきであろうと考えられる。なおリズムを構成する要素としては休止とか句切りなども考慮に入れなければならないことは言うまでもない。

以上のような中立的ないし無標の文強勢に対する我々の考え方はつぎのように要約することができる。

(3.30)

a. 文強勢は強勢のある音節と強勢のない音節との弱強調的配列によって形成され,
b. それは語類とか語強勢, 文構造などとの階層的な関係において決定されるものであり,
c. 一句切りの中の最後の強勢が第一強勢となり, それ以外の強勢は第二強勢となり,
d. 文強勢はリズムの型の基盤を成す。

3. リズムと強勢

日本語のリズムは「音数律」に基づいて形成されると考えられるのに対して, 英語のリズムは「弱強調」の強勢の型を基盤として形成されるということは前節で見た通りである。この英語の弱強調のリズムはつぎのような日本語の発音のされ方に端的に示されているように思われる。

(3.31) a. júdo, kéndo
b. júdoka
c. tatámi, kimóno, jujítsu
d. Búshidò, Nágoyà
e. Hìrohíto, Hìroshíge, Òkináwa

f. súkiyáki, Híroshíma, hára-kíri
g. jinríkisha (jinrícksha, rícksha)

これは何れもきわめて英語的な強勢の型であり，別の見方をすればそれだけ「非日本語的」であることになる。英語では強勢のある母音は強勢のない母音より長く発音されるという傾向が見られるから，この点においても日本語とは大きく異なる。日本語の音節は「モーラ」(mora)とか「拍」とかと呼ばれるように，その一つ一つが等時的であるという特徴をもつものであるが，その等時性も英語では保たれなくなる。それに英語では強勢のない音節の母音が弱化ないし消失するという傾向が見られるから，日本語のリズムの違いは程度の差ではなく質的な違いである。(3.31 c) の kimono は Kenyon-Knott (1949) の『発音辞典』によれば [kəmóunə] というように表記されていて，強勢のない音節の母音は二つとも schwa となっている。従って母音の長短（quantity）という点でも短・長・短という形になるわけである。(3.31 g) の jinrikisha は jinricksha という綴りのほうがむしろふつうであるように，強勢のある音節の直後の母音が消失する。子音や母音の消失（syncopation）という現象そのものは日本語にも見られるが，英語ではそれが強勢配置との関連において起こるという特徴を示すのである。言うまでもなく英語におけるこの種の語音の弱化および消失という現象は，数の少ない日本語からの借用語とか日本の地名などの発音だけに見られるのではない。これは英語に非常に広く見られる特徴であり，母国語話者たちにとっても綴り字の誤りの原因であったり，外国語としての英語の学習においても種々の困難性の原因となっていることもあるわけである。

ところで日本語には，夥しい数の英語からの借用語があることは改めて述べるまでもないことであろうが，それらの語はほとんどの場合そのリズムの特徴を自動的に失うことになる。例えば，

(3.32) a. サーカス　círcus
b. パーセンテージ　percéntage
c. ロマンティシズム　románticìsm
d. サマースクール　súmmer schòol
e. ニューイングランド　Nèw Éngland

などの場合について見ると，まず (a) は日英語のリズムがかなり似ている例である。特にアクセントの形がサーカスとなって，スの母音が無声化するような場合は，英語の強弱の配置が日本語では高低の配置に代わるだけであることになる。これに対して (b) の場合は日英語のリズムの型の違いが端的にあらわれている例である。英語の弱・強・弱という形が日本語では2拍・2拍・3拍という形に代わるのである。これをパセンティジとでも発音すれば

(a)の場合とほぼ同じ程度英語のリズムに近いものになると考えられる。(c) の場合も英語のほうは弱強調の典型的な例であるから，日本語ではそれは「水平化」されることになる。(d) と (e) はそれぞれ複合語と句の強勢の型が，同じような平板の等時的拍の配列に対応している場合である。英語の弱強調のリズムは，それが（3.32 a）の場合のように日本語の高低アクセントと一致する場合は，ある程度その特徴が認められるが，それ以外の場合はほとんどその原形を留めない程に違うものとなっていると考えられる。恐らくその違いは，母音や子音などの分節的要素の違いよりはるかに大きいものであろう。

(3.33) "The rhythm of spoken English is a source of considerable difficulty to some foreigners.... The greatest difficulty of all is experienced by the Japanese."

という Jones (1960[10], §§ 907-908) の指摘はこのような関連において重要な意味をもつものである。英語国民にとって日本語のリズムを習得することは同様に困難であることは言うまでもない。

この英語と日本語のリズムの違いを Martin (1956, p. 4) はつぎのように説明している。

(3.34) a. "English is spoken in a syncopated fashion—we bounce along, rushing syllables in between heavy stresses, keeping an irregular rhythm and tempo based on our stress system."

b. "Japanese, on the other hand, speak in a metronomic fashion—as if there were a musician's metronome evenly beating out each syllable. Instead of putting a heavy stress on some syllables, and various weaker stresses on the others, the Japanese gives each syllable a moderate, even stress."

この Martin の説明は外国語としての日本語の学習者を対象としたものであるが，我々にとっても参考になるものである。ただ彼はいわゆる強弱アクセントと高低アクセントとを特に区別していないので，その点は注意を要する。彼は英語のリズムを飛んだり跳ねたりする歩調のように不規則なものと考えているが，我々はそれを基本的には強と弱とが交互する規則的なものと考える。

この弱強調を基調とする英語のリズムは非常に強固なもので，それは語や句の強勢の型に優先することがある。例えば，

(3.35) a. New Yórk
b. Néw Yòrk City
(3.36) a. Jàpanése
b. Jápanèse péople

(3.37) a. unsúre
　　b. únsùre hópes
(3.38) a. hít-and-rún
　　b. hít-and-rùn dríver
(3.39) a. úp-to-dáte
　　b. úp-to-dàte néws
(3.40) a. wéll-knówn
　　b. wéll-knòwn fáct
(3.41) a. wéll-nígh
　　d. wéll-nìgh déad
(3.42) a. fóurtéen, fourtéen
　　b. fóurtèen mén

などにおける (a) の強勢の型は (b) のように調整される。(3.35) の場合 (a) の New Yórk が(b) においては Néw Yòrk というように強勢の配置が変わるのはリズムの原理によるものであると考えられる。この現象は,

(3.43) a. invíte
　　b. ìnvitátion

などの語強勢の型にも平行的に見られるものであるから, このリズムの原理 (the principle of rhythm) は, ふつうに考えられている以上に広い範囲に適用されるものであることが分かる。前節の (3.24) の強勢の型を決定する Chomsky-Halle の交互強勢規則は, (3.35) ～ (3.42) のような強勢の型の形成にも関与していると考えることも出来るわけである。英語のリズムは, 強音節と弱音節とが交互する (alternate) のを原則とするのであるから, このことはリズム構成の要素としての強音節が二つ以上連続するのを避けるということに外ならない。従って (3.40 a) などのいわゆる二重強勢 (even stress) の語はリズムの原則によって (3.40 b) のように調整されるわけである。Jones (1963) の説明によれば, well-known というような二重強勢の語は制限的 (attributive) に用いられるときは強・弱という形になる。ただそのような場合, 二重強勢の語が叙述的 (predicative) に用いられるときは強・弱という形になるのではなく,

(3.44) The fàct is wèll-knówn.

というようになる。Jones (1932, § 932) によれば, fourteen のような二重強勢の語は単独で発音される場合とか,

(3.45) a. How many people were there?
　　b. Fourteen.

などの発話においては／＼という強勢の型になるというが，我々はそのような場合もリズムの原理によって＼／という形になると考える。つまり（3.42 b）のような Jones のいう制限的用法に対して，この（3.45 b）は叙述的用法と考えるのである。Kenyon-Knott (1949)も，

(3.46) He's fourteen.

というような場合に fourteen は二重強勢を受けると考えているが，この場合は文強勢の規則によって最後の強勢が第一強勢となり，それ以外の強勢は第二強勢となるのであるから，二重強勢は起こらない。従って我々はこの英語の弱強調のリズムに反する二重強勢は第一強勢が連続するという形で実現されることはないと考える。

このようにリズムというものは語や句の強勢を基盤として形成されている筈であるが，言語の通常のレベル間の相互作用によって，そのリズムが語や句の強勢に優先することがあるわけである。ところでこのリズムの優先性は統語構造との関連においても見られる。英詩においてしばしば韻律の型が統語構造に優先するということは，詩的破格（poetic licence）の一種として知られている通りである。

(3.47) She found me roots of relish sweet,
And honey wild, and manna-dew ;
And sure in language strange she said—
'I love thee true!'
—J. Keats, "La Belle Dame Sans Merci."

における relish sweet や honey wild, language strange という語順は，この詩の弱強調のリズムに適合するように調整されたものと考えられる。これを修飾語＋主要語というふつうの語順に変えると著しく違う形のリズムとなる。

(3.48) They try to tell us we are too young
Too young to really be in love

というよく知られた歌の中の to really be という分離不定詞 (split infinitive) も，この歌詞の弱強調のリズムを規則的なものに保つためには避けることの出来ないものである。この場合 really という副詞を不定詞の前か後の何れの位置に置いてもリズムは損われる。

(3.49) a. Too yóung réally to bé in lóve
b. Too yóung to bé réally in lóve

つまりこの（3.49）は (a), (b) 何れの場合も強音節が二つ重なることになり，弱強調のリズムに反するわけである。

日常言語においても語順の決定にリズムが関与していると考えられる場合がある。我々の伝達活動における言語化の過程には，意味を音声化するための必要最小限の要素だけが参与するのではなく，そこには〈口調〉とか〈口拍子〉を整えるための要因も働いている筈である。これは〈快音調性〉(euphony) の問題としても重要であろうと思われるが，英語では〈頭韻〉(alliteration) とか〈脚韻〉(rime)，そして我々がここで問題として取り上げているリズム (rhythm) などがそのような要因として考えることの出来るものである。

(3.50) a. Checks and balances
b. Stars and Stripes
c. sound and fury
d. Pride and Prejudice
e. rain or shine
f. nature and nurture
g. Jack and Betty

などの発音には何らかの快音調性が伴うと思われるが，それは今あげた押韻やリズムの作用によるものと考えられるのである。このような場合の語順の決定には意味論的要因が働いていることは言うまでもないが，この (3.50) の (a), (d), (g) の語順などは英語のリズムの型により規則的に適合するものであると言えよう。つまり，例えば checks and balances という語順のほうが balances and checks よりは英語のリズムに適うものであると考えられるのである。従って他の条件が同じであれば，リズムに適った語順のほうが選ばれるであろうということは容易に想像することができる。

Jespersen (1938[9], §245) はこのリズムと語順の問題に関して，

(3.51) "Rhythm undoubtedly plays a great part in ordinary language, apart from poetry and artistic (or artificial) prose. It may not always be easy to demonstrate this ; but in combinations of a monosyllable and a disyllable by means of *and* the short word is in many set phrases placed first in order to make the rhythm into the regular ′aa′aa instead of ′aaa′a (′ before the *a* denotes the strongly stressed syllable)."

と述べているが，彼は英語の成句 (set phrase) などの語順の形成過程において弱強調のリズムの果たす役割りを重視している。彼のあげている例は，

(3.52) a. bread and butter
b. bread and water
c. milk and water
d. cup and saucer

e. wind and weather
f. rough and ready
g. free and easy

などであるが，これらの例では一音節語と二音節語が and によって接続されているのであるから，一音節語のほうを接続詞の前に置くことによって規則的なリズムの型が形成されるのである。この種の成句の数はかなり多い筈であり，接続する語も and に限られているわけではない。Jespersen も，

(3.53) from top to bottom

という例もあげている。そしてこの種の成句における語順はリズムだけによって決定されるのではないということは既に述べた通りである。

英語のリズムが統語構造の決定に関与すると考えられるのは語順の問題だけではない。市河 (1954, ch. XXX) は，

(3.54) a. He has not *dáred to dó* it.
b. How *dáre* you *dó* it?
c. Money makes the mare *to* go.

などのような場合 (a) では to+infinitive が用いられているのに対して (b) では simple infinitive が用いられているのはリズムの関係であると説明している。(a) では to があることによって，そして (b) ではそれがないことによって規則的なリズムが形成されるわけであるが，このことは Hornby-Gatenby-Wakefield (1951, s. v. "dare") のあげているつぎのような例文とも一致している。

(3.55) a. How dare you say such a thing!
b. Don't dare to do that again!
c. I have never dared (to) ask him.

(3.54 c) は諺であるが，この場合 make の後に to+infinitive が用いられているのはそのほうがリズムに適っているからであると説明される。このように文法現象の中には，文法論の範囲内では説明の出来ない問題でリズムの型との関連を考慮すれば説明のつくものがあることを Jespersen や市河は指摘していたのであるが，この問題は今後もう少し集中的に研究する必要があるように思われる。そしてこのことは詩人や作曲家の創作過程におけるリズムの優先性や，子供の言語発達の過程におけるリズムの先行性などを指摘したつぎの (3.56) のような Frye (1957, pp. 275-276) の見解によっても支持されるものであると考えられる。

(3.56) "We can see from the revisions poets make that the rhythm is usually prior, either in inspiration or in importance or both, to the selection of words to fill it up. This phenomenon is not confined to poetry : in Beethoven's notebooks, too, we often see how he knows that he wants a cadence at a certain bar before he has worked out any melodic sequence to reach it. One can see a similar evolution in children, who start with rhythmical babble and fill in the appropriate words as they go along."

4. 文強勢 II

我々はこれまで英語の文強勢に関して主にその中立的ないし無標の場合について考察してきた。英語の中立的な文強勢の型はまず文を構成しているすべての内容語に強勢が置かれることによって形成される。そして文中の最後の強勢が第一強勢となりそれ以外は第二強勢となる。つまり The teacher gave the student a flogging. という文は (3.57) のような形になる筈である。

(3.57) The tèacher gàve the stùdent a flógging.

これが我々のいう中立的な文強勢の形であるが，この (3.57) は (3.58) のような疑問文に対する応答文としても用いることの出来るものである。

(3.58) What did the teacher give the student?

しかしこのような場合 (3.57) の文はこの疑問文との関係において強勢の形が調整される筈である。つまり応答文としての (3.57) の文はその疑問の対象になっている部分が強く発音される筈である。ただこの場合は疑問の対象になっている部分が文の最後の強勢のある語と一致しているために，(3.57) の強勢の形は (3.58) のような特殊疑問文の答えとしても自然なものとなるのである。つぎの (3.59) や (3.60) においてはそれぞれ疑問に答える部分に第一強勢が置かれるわけで，(3.57) の強勢配置とは異なるものになる。

(3.59) a. Who gave the student a flogging?
　　b. The téacher gàve the stùdent a flògging.
(3.60) a. Whom did the teacher give a flogging?
　　b. The tèacher gàve the stúdent a flògging.

このような場合の (3.59 b) や (3.60 b) の強勢の型は，(3.57) が中立的な無標の強勢の型

であるのに対して，中立的でない有標の（nonneutral, marked）の文強勢の型であると我々は考える。この有標の強勢の型は我々の言語化の過程において，対話（dialogue）ないし会話（conversation）を構成する原理とか談話（discourse）を構成する原理などによって決定されるものと考えられる。意味を音声化するという我々の言語化の過程において，話者の意図する意味によって文中の特定の語に有標の文強勢が置かれるのである。

この有標の強勢の型は日常的にもきわめて効果的に用いられる。例えば，

(3.61) a. How áre you?
b. (Fine, thank you.) How are yóu?
(3.62) a. Thánk you.
b. Thank yóu.
(3.63) a. Excúse me.
b. Excuse mé.

などにおける (a) の文の強勢はいずれの場合も無標であるが，これに対して (b) の文はそれぞれの有標の強勢によって (a) に対する適切な応答（response）となるのである。その有標の強勢によって（3.61 b）では「あなたは……」というような意味が表わされ，（3.62 b）では「あなたこそ……」，そして（3.63 b）では「わたしこそ……」というような意味が表わされる。このような強勢は小説などではイタリック体で示されることが多い。

(3.64) a. I wonder if I shall fall right *through* the earth.
b. Down, down, down. Would the fall *never* come to an end?
c. 'How *can* I have done that?' she thought. 'I must be growing small again.'
d. 'That *was* a narrow escape!' said Alice, a good deal frightened at the sudden change, but very glad to find herself still in existence.
e. Would *you* like cats if you were me?
——L. Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland.*

などの場合はそのイタリック体の部分によってそれぞれ「（地球の裏側へ）突き抜けてしまう」(a) とか「もう二度と（止ら）ない」(b),「(一体どうして）出来たのか」(c),「まさに（間一髪）だった」(d),「あなただったら」(e) といったような意味が強調的に表現される。強意強調（intensity-emphasis）と対比強調（contrast-emphasis）とを区別する観点からすれば，この（3.64）の (a)〜(d) に見られる強調は強意強調であり，(e) の場合はどちらかと言えば対比強調である。そしてこのような場合われわれは，発話や談話の中のほとんどどの要素も強調的に表現することができる。

(3.65) a. I take what you said to me at noon as a declaration that *you've* never

known him to be bad.
b. They said you'd like it better. *Do* you like it better?
c. You *will* be carried away by the little gentleman!
d. They *know*—it's too monstrous : they know, they know!
e. See him, Miss, first. *Then* believe it!
f. The child of eight, *that* child!
g. Oh it was quite settled that she *must* share!
——H. James, *The Turn of the Screw*.

などの例においても種々の意味論的・文法的要素が強調的に表現されている。この (3.65) の (a) では，対話者を表わす you と 現在完了のhave（の縮約形）がイタリック体になっていて「あなたは今までに一度も」という意味が強調的に表現されている。その次の(b)では助動詞を強調することによって「本当にそのほうがいいんですか」という強意の一般疑問文が形成され，(c) では未来を表わす助動詞に有標の強勢が置かれることによって「きっと（とりこに）なりますよ」というような自信に満ちた発話となっている。(d) においては中立的な文強勢の置かれる語に強意強勢が置かれていて驚愕を表わす発話となっているのであるが，このような場合，強意の *know* はふつうの第一強勢より強い強勢で発音されるものと考えられる。(e) では文を連結する語 *then* が強調されているが，それは前の文の first を承けて「その後で」という意味を強意的に表わしている。(f) の *that* は「あんな（年端も行かない）」というような意味を表わし，(g) の *must* は「義務がある」ことを強調している。

このように英語の強意表現において強勢の果たす役割は重要であるが，(3.64) の (a), (b) などにおいては right とか down というような副詞も強意表現の形成に参与していると思われる。同様に (3.65 d) においては they know という表現が繰り返えされることによってその前の強意表現がいわば補強されている。また正書法 (orthography) の問題としてはイタリック体の使用だけでなく，文末に用いられている感嘆符も重要な役割を果たしている。しかし英語の正書法としては有標の強勢が常にイタリック体で示されるとは限らない。

(3.66) a. 'May God forgive me!' said she. Doubtless, God did forgive her.
——N. Hawthorne, *The House of the Seven Gables*.
b. Oh, dear Dunois, how I wish it were the bridge at Orleans again! We lived at that bridge.
c. I am king, not you.
——B. Shaw, *Saint Joan*.

などにおいては，正書法や句読法の上では強勢は示されていないのであるが，この (3.66) の (a) では God did forgive her. のdid に第一強勢が置かれることは明らかである。このような場合は特に強勢を示す必要がない程意味論的・統語論的に自明であると言えるかも知れ

ない。この種の *do*-form は stress-carrier と呼ばれることもある。この場合も強意表現としては doubtless という文副詞もその形成に関与していると考えられる。(b) では We lived at that bridge. の lived は「生き生きしていた」という意味で，それに第一強勢が置かれる。オルレアンの橋の戦いでは大いに「意気があがっていた」という意味を表わす lived の部分が最も強く発音されることになるのである。(c) では，言うまでもなく，I と you に第一強勢が置かれるわけであるが，これは対比強調の典型的な場合であると言えよう。

上の (3.66 a) に用いられているような *do*-form の強勢は，意味論的・統語論的に自動的に決定されると考えられるのであるが，次の (3.67) のような強調構文が用いられる場合も文強勢としての第一強勢は自動的に決定されると考えられる。

(3.67) a. It is you who are responsible for it.
b. It is the price that frightened us.
c. It was toward evening when I got home.

この場合強調される要素は you, the price, toward evening であるから，その部分に第一強勢が落ちるわけである。(c) のtoward evening の場合は evening の語強勢と文強勢が重なることになる。また次の (3.68) の例に示されているように，有標の文強勢がいわば社会・文化的 (socio-cultural) な要因によって決定されると考えられる場合もある。

(3.68)

a. And I come from God to tell thee to kneel in the cathedral and solemnly give thy kingdom to Him for ever and ever, and become the greatest king in the world as His steward and His bailiff, His soldier and His servant. ——B. Shaw, *Saint Joan*.
b. With a good conscience our only sure reward, with history the final judge of our deeds, let us go forth to lead the land we love, asking His blessing and His help, but knowing that here on earth God's work must truly be our own. ——J. Kennedy, "Inaugural Address."

これら二つの例では，同じ文脈の中の God を指すものとして用いられている Him と His に強勢があることは明らかである。このことは正書法の上でも大文字使用 (capitalization) によって示されるのがふつうである。

以上の外に英語の文強勢は，文法上そして意味上のやや細かい区別を音声的に実現するものとして用いられることが指摘されている。Jespersen (1924, p. 221) は，

(3.69) a. Shelley is the very reverse of all this. Where Wordsworth is strong, he is weak ; where Wordsworth is weak, he is strong.

b. Children love to listen to stories about their elders, when *they* were children.

というような場合強勢によって三人称の代名詞の照応が曖昧になることを避けることができると述べている。(a) では代名詞 he に強勢を置くことによって，それが Wordsworth を指すのではなく，Shelley を指すものであることを正しく示すことが出来る。(b) ではイタリック体の使用によって示されているように *they* に強勢が置かれることによって，それが their elders を指すということが明確に示されて，自然な発話となると説明している。Jackendoff (1972, p. 120) は，

(3.70) a. John hit Bill and then Máx hit him.
b. John hit Bill and then Max hit hím.

という例をあげて強勢の置き方によって全く異なる照応関係が表わされる場合があることを指摘している。この (3.70) における him は (a) では Bill と同一指示関係にあるのに対し，(b) では John と同一指示関係にあることになるのである。序ながら Jackendoff (1972, p. 110) には，

(3.71) a. I wanted Charlie to help me, but the bastard wouldn't do it.
b. Although the bum tried to hit me, I can't really get too mad at Harry.

などにおける the bastard や the bum などの pronominal epithet と呼ばれる名詞句は，その強勢が弱められることによって三人称の代名詞と同じような機能をもつことが出来るという指摘がある。

Bolinger (1958 a, p. 34) によれば，They don't admit any student. という文は音調曲線の違いによって The students are picked carefully. という意味に解される場合と No students at all are admitted. と解される場合があるという。Bolinger のいう音調曲線による区別というのは，文強勢による区別であると考えることが出来るものであるから，これは，

(3.72) a. They don't admit ány students. (=The students are picked carefully.)
b. They don't admit any stúdents. (=No students at all are admitted.)

というように示すことが出来る。Bolinger はさらに次の (3.73) のような例もあげている (p. 36)。彼によれば，

(3.73) The general had conferred upon him a signal honor.

という文は，音調の働きによって助動詞 had に焦点が置かれる場合は The general received a signal honor himself. という意味になる。つまりその場合 had は possess に近い意味をもつのに対して，had に焦点が置かれない場合は，それは単に機能語としての働きしかもたないことになり，文全体の意味は The general had conferred a signal honor on somebody else. となるという。このような場合の had はふつうの助動詞として用いられるときは強勢を受けることはないが，それが内容語的に用いられる場合は比較的に強い強勢を受けることになり，反対に (3.71) における bastard や bum などの語は，ふつうに名詞として用いられるときは強勢を受けるが，それらの語が代名詞的に用いられる場合は比較的に弱い強勢を伴うものであると考えられる。

Akmajian-Jackendoff (1970, p. 124) は次の (3.74) のように同一指示性 (coreferentiality) に関する解釈が強勢と密接な関係を有する場合があることを指摘している。

(3.74) a. After he woke up, John went to town.
b. After hé woke up, John went to town.
c. After he woke up, Jóhn went to town.

この (3.74) の (a) では he と John は同一指示的であると解釈されるが，(b) と (c) ではそのような同一指示性は成立し得ない。同様の理由によって，

(3.75) a. That George would be Tom's thesis advisor never occurred to him.
b. That Géorge would be Tom's thesis advisor never occurred to him.
c. That George would be Tóm's thesis advisor never occurred to him.

というような場合は，(a) では him と同一指示関係を有する名詞は George でも Tom でもあり得るわけで曖昧であるが，(b) と (c) では，それが一義的に決定される。つまり (b) では him と Tom が同一指示的で，(c) においては him と George が同一指示的であることになる。このことは上の (3.69) に関する Jespersen の判断と一致することが分かる。(3.69 a) においては he に有標の強勢を置くことによってそれが Wordsworth と同一指示関係をもつという無意味な解釈を排除することが出来る。そして (3.69 b) で they に強勢を置くということはそれが Children と同一指示的になるという意図されていない解釈を阻止するためであると考えられるのである。Akmajian-Jackendoff のまとめるところによれば，

(3.76) "Contrastive stress on either a pronoun or noun will prohibit coreference."

ということになる。Akmajian-Jackendoff のあげているもう一つの例も，文強勢が文法上そ

して意味上の違いを音声的に実現する手立てとして重要であることを示している。

(3.77) a. John washed the car. I was afraid someone élse would do it.
b. John washed the car. I was afráid someone else would do it.

これは発話の前提になっている事柄の違いが強勢の置き方によって区別されている例である。(a) で前提になっていることは I was hoping John would be the one to wash the car. ということであり，話者の期待通りにジョンが車を洗ってくれたのである。一方 (b) においては I was hoping to wash the car myself. ということが前提であるが，話者が期待していたようには事は実現せず，むしろ話者が懸念していたことの方が実現したのである。同様な例としてはよく次の (3.78) におけるような強勢による区別の仕方が取り上げられる（例えば安倍 (1972, pp. 64-65))。

(3.78) a. I thought you would cóme.
b. I thóught you would come.

この場合 (a) は話者の期待に反して来なかった人に対する発話であり，(b) は期待通りに来てくれた人に対して言う発話である。

次の例は Newman (1946, pp. 179-180) によって指摘されて以来しばしば引き合いに出される。

(3.79) a. I have instrúctions to leave. (=I am to leave instructions.)
b. I have instructions to léave. (=I have been instructed to leave.)

この (3.79) の二つの文は少なくとも表面的にはよく似た構造をもつものである。従ってこの場合は，文の表面の構造に基づいて文強勢の置き方を説明することは出来ない。事実 Chomsky-Halle (1968, p. 24) はこのような場合の音調の違いは，どのような統語構造上の特徴に起因するのか全く不明であると述べている。ところで Newman は (a) の文においては instructions to leave=to leave instructions という関係が成立するという事実によって，(a) における instructions は to leave の論理的目的語 (logical object) であると考えている。それはつまり bread to eat とか a favor to ask などと同じ文法関係を有することになる。(b) の文における instructions to leave は a desire to eat (=a desire, namely to eat) とか the will to live などと同じ文法関係を有するものである。従って (3.79) における文強勢の置き方の違いは，そういう文法関係の違いに起因するものであると Newman は考えている。

Bresnan (1971, pp. 258-260) は，

(3.80) Helen left diréctions for George to follow.

というような (3.79 a) と構造上類似した文の強勢付与の問題を取り上げている。この (3.80) の文のように directions に第一強勢が付与されるような強勢の型は, Chomsky-Halle の Nuclear Stress Rule を (3.80) のような表層構造に適用することによって決定することは出来ない。それで Bresnan はこのような場合の強勢付与の操作を, 削除 (deletion) などの変形が適用される以前の構造から始めることを提案している。Bresnan が提案している操作の細部はここでは省略するが, 文強勢の型を飽くまでも統語構造に基づいて決定しようとすることがその特徴である。これに対して Bolinger (1972) は, (3.79) や (3.80) におけるような文強勢は統語構造に基づいて決定することは出来ないと主張する。例えば,

(3.81)

a. The end of the chapter is reserved for various próblems to solve.
b. The end of the chapter is reserved for various problems to compúterize.

における (a) の problems to solve と (b) の problems to computerize とは統語論的には全く同じ構造をもつものである。つまり上述の Newman の説明に従えば, problems は to solve, to computerize の論理的目的語である。従ってこの (3.81) の (a), (b) の強勢の違いを統語構造に基づいて説明することは出来ないわけである。このような場合の強勢の違いは, 語彙項目の意味の重要性によるものであると Bolinger は言う。話者にとってより重要な意味をもつ語により強い強勢が置かれると言うのである。(3.81 a) における solve という動詞は, その前の problems という語によってある程度まで予想ないし予測できる語彙項目であるために, 比較的に弱い強勢を受ける。少なくとも problems よりは弱く発音される。これに対して (3.81 b) の computerize という動詞はそのような予測性 (predictability) が低いために, problems より強く発音される。同じような例としては,

(3.82)

a. I can't finish in an hour—there are simply too many tópics to cover.
b. I can't finish in an hour—there are simply too many topics to elúcidate.

などがあげられる。そして,

(3.83) We must leave. I have a dúty to perform.

というような場合は to perform を省略しても発話全体の意味は殆ど変わらない。従ってこのような場合の予測性は極めて高く, 冗長 (redundancy) に近いものになっていると Bolinger は言う。情報の伝達を目的とする我々の言語化の過程において, 予測性の高い要素ほど弱く

発音されるということは当然のことと考えられる。

5. 意味の比重と強勢

我々の言語化の過程においては，文強勢によって意味の重点の置き方を変えることが出来るということは，今まで見てきたところからも明らかであろうと思われる。ある発話を構成する要素は意味ないし情報を伝達するという点で等同の比重を占めるわけではない。

(3.84)

a. The wise traveller travels only in imagination.
b. It was I who blew the candle.
c. I was the one who blew the candle.
d. I blew the candle.
e. Where on earth do you see anything?
f. Nothing in the world would please me more.
g. He does not begin to speak English.
h. Haunted and blinded by some shadow of his own little Me.
i. Boy, did I get in that house fast.
j. Never before had she looked so charming.
k. I can't think wherever she must have picked up——.
l. I'm p-paralysed with happiness.

などの用例によって示されているように，英語には話者の意図する意味の比重の違いを表わす方法としては，構文によるものや成句とか語彙項目とか強勢によるものなどいろいろあることが分かる。この (3.84) の (a) は Maugham の "Honolulu" という短篇の書き出しの文であるが，これは全体として意味の比重が大きい文である。冒頭の文であるから内容的には聴者（読者）にとって新しい情報だけで構成されていると考えられるものである。一般に一つの文が主語＋述語という統語構造をもち，対話ないし談話構成という点では話題＋評言という構造をもつとき，その話題（topic）は所与（given）の情報であり，評言（comment）の部分は新規（new）の情報である。そして意味の比重のかけ方が中立的である限り，その文の強勢は新規の情報を表わす部分の最後の語強勢と一致する。しかし，この (a) の文は述語の部分だけでなく，主語の部分も新しい情報を表わすものと考えるのであるから，情報構造という点では二つの単位を構成することになる。二焦点（bifocal）構造をもつ文であると考えることも出来るわけである。二つ以上の情報単位を構成するかも知れないという点に関してはここでは立ち入らないことにする。(a) の文は，その情報構造に基づいて主語の部分にも述語の部分にも文強勢が置かれることになる。

つぎの (b)〜(d) の文は「ろうそくを消したのは僕です」とか「僕がろうそくを消したんです」という意味を表わすものとしてあげたのであるが，何れも I に意味の重点が置かれている文である。(b) と (c) では構文そのものがいわゆる強調構文が用いられており，文強勢はいわば自動的に I に置かれる筈である。(d) の文でも I に重点が置かれている情報構造に基づいて正しく文強勢が付与される。この場合，もし candle に文強勢が置かれたとすれば，それは「僕はろうそくを消しました」という意味になることは言うまでもない。つまり (d) の文が例えば Who blew the candle? という疑問文の答えとして適格な文であるのに対して，この文は what did you do? という疑問文の答えとして適格であることになる。(d) の文においては I に意味の重点が置かれているということを，特殊な構文などを併用することもなく，文強勢だけでもって表現するのであるから，このような場合の文強勢の働きは，その言語化の過程への関与のし方の典型的なものであると言えよう。

そのつぎの (e) と (f) の文は，on earth とか in the world というような慣用的表現でもって疑問や否定の意味を強調する例である。この種の文においては疑問詞や否定語に置かれる強勢は，ふつうの中立的な文の場合より強い筈である。(g) は begin という語によって「少しも（まるで）〜でない（しない）」というような意味を表わす例である。このような強意表現として用いられた begin は He will soon begin to speak. などの場合に比べて強く発音される。James の *The Turn of the Screw* に次のような用例が見られる。

(3.85) He spoke with a gaiety through which I could still catch the finest little quiver of resentful passion ; but I can't begin to express the effect upon me of an implication of surrender even so faint.

この中の I can't begin to express の部分がある邦訳では「いまはまだ書けない」と訳されているが，これは (3.84 g) と同じ用法であるから，「とても言葉で言い尽くすことは出来ない」という意味である。あるアメリカ人は I can't begin to express の部分を I can't find words to express と言い換えて説明していた。この用例からも分かるように，この begin という言葉の意味の比重は，ふつうの「始める」という意味で用いられる場合と (3.84 g) におけるように強意表現として用いられる場合とでは大きく違っていて，その違いによって強勢の強さも違ってくると考えられるのである。

(3.84) の (h) は大塚 (1974, p. 245) によって取り上げられている例であるが，この文では人称代名詞の me がふつうの名詞のような使われ方をしている。代名詞 me はこの文では grammatical word とは言えず，'individuality' という意味の純然たる名詞すなわち notional word に変わっていると大塚は言う。このような用いられ方をする me という語は *OED* では 'personality' とか 'individuality' という意味の quaai-substantive として扱われ，ここに (3.84 h) としてあげた Carlyle からの用例のほかに，

(3.86) A *not me* as opposed to the *me* of passive sensibility and thought. [Bain]

という例があげられている。この二つの例における me の意味の比重が，ふつうの 代名詞として用いられる場合より大きいことは明らかである。このように実詞的に用いられた me は前節で見た (3.71) における代名詞的に用いられた the bastard とか the bum などの逆の場合であると考えることが出来る。つまり bastard や bum などの名詞は，それぞれの文の中で強勢が弱められることによって代名詞と同じ機能をもつことが出来ると言うのであるが，(3.84 h) および (3.86) における me の場合は，ふつうの名詞と同じ機能をもつのであるから，音声化されるに当たってはふつうの名詞と同じように強く発音される。文字化される場合も大文字や斜字体を用いてそれを示すわけである。

(3.84) の (i) と (j) の文は，boy という感嘆詞を用いたり語順を転倒したりすることによって「駆け込んだ」とか「以前には全く〜なかった」というような意味を強調的に表わそうとしたものである。これらの文においてはある特定の語に意味の重点が置かれるのではないが，(i) の fast や (j) の never などは中立的な文における場合より強く発音されるであろうということは容易に予想できる。(k) は強意の疑問詞が使われている文であるから「一体全体どこで」という話者の意図する強い疑問は容易に対話者に了解されるであろうと思われる。ただこの発話全体としては「皆目わからない」という話者の困惑の表現となっている。強意形の疑問詞がふつうの疑問詞より強い強勢を受けるであろうということも容易に予想できることである。(3.84) の最後の (l) は話者の意味の重点の置き方が，語を構成している単音の発音のし方に示されていると考えられる例である。ここに用いられた paralysed という語の最初の子音を誇張して発音することによって，嬉しさを誇張的に表現しようとしている文であると考えられるのである。この文は実は Fitzgerald の *The Great Gatsby* の中でディジーが「ぼく」との再会の喜びを表現する言葉である。デイジーがこう言ったときの場面を「ぼく」は次の (3.87) のように説明しているから，(l) の文を誇張的な表現と解釈するのは誤りではないであろう。

(3.87) She laughed again, as if she said something very witty, and held my hand for a moment, looking up into my face, promising that there was no one in the world she so much wanted to see.

このように我々の言語化の過程における意味の比重のかけ方を表わす方法としては，構文や文強勢だけでなく，成句や単語，形態素，単音などによる場合もあることがわかる。同じ統語構造と語彙項目が用いられても，文強勢の置き方によって意味の比重を変えることが出来るということも明らかであるが，次にあげる Dryden の詩行はこの関連において示唆に富んでいる。

(3.88) None but the brave,
None but the brave,
None but the brave,
Deserves the fair.

この有名な四行は，斉藤 (1958, pp. 178-179) によれば，同じことを三度くり返して言ったのではなく，その第一行は美人をかち得る者は特殊の人に限るということ，第二行はその他にはないこと，第三行はただ勇士だけであることを意味すると言う。斉藤によるこの四行の強勢の配置と訳は次のようなものである。

(3.89) Nóne but the brave,
None bút the brave,
None but the bráve,
Deserves the fair.
勇士のほかは何者も，
勇士のほかは何者も，
勇士のほかは何者も，
美人を得るに値せず。

これは英語における意味の比重のかけ方と強勢の関係を実によく表わしている例であると言えよう。

以上のように見てくれば文強勢の働きは，話者の意図する意味が音声化される過程において，過大にでもなく過少にでもなく正当に評価されて，過程的構造の中で正しく位置づけられなければならないことが分かる。この強勢と意味の比重との関係については，最近は前提と焦点とか，所与の情報と新規の情報などとの関連において論じられることが多い。Chafe (1970, ch. 15) などがその代表的なものと思われるが，Jespersen (1924, ch. XI) には次のような言及が見られる。

(3.90) "The subject is sometimes said to be the relatively familiar element, to which the predicate is added as somthing new. 'The utterer throws into his subject all that he knows the receiver is already willing to grant him, and to this he adds in the predicate what constitutes the new information to be conveyed by the sentence....' (Baldwin's Dict. of Philosophy and Psychol. 1902, vol. 2. 364)."

これは主語＋述語という構造と，既知情報＋新情報という構造が一致する場合について述べたものである。Jespersen はこの後で，これら二つの構造が一致しない場合があることを指摘している。例えば who said that? という質問に対して Peter said it. と答えたとすれば，その場合 Peter は新情報を表わす要素ではあるが，文の主語である。従って新情報は文の述語に含まれているのでなくむしろ彼のいうネクサスに含まれていると言う。そして音調ない

し強勢との関係について,

(3.91) "In his former work he [Paul] says that the psychological predicate is the most important element, that which it is the aim of the sentence to communicate and which therefore carries the strongest tone."

というように述べているところから我々は, Jespersen が意味の比重と強勢との関係を, 形態というよりは動態として把えようとしていたことを知ることができると同時に, この方面における Hermann Paul の先駆的考察を見逃がしてはならないことを知らされる。Paul (1920[5], §197) は文法的には主語として用いられている語句でもその意味の重要性によって心理的述語を形成し, 従って最も強い強勢がそこに置かれる場合があることを指摘していたのである。

例えば,

(3.92)
a. Wer reist morgen nach Berlin?
b. Karl fährt morgen nach Berlin.

というような対話もしくは場面においては, (b) の文法的主語 Karl がこの文の最終目的 (Endzweck) であるから, それが心理的述語を形成することになり, 強勢もそこに置かれるわけである。ところでこの心理的述語と呼ばれる要素は Gardiner (1951[2], §§. 45, 54, 69) のいう論理的述語に相当するものである。Gardiner によれば,

(3.93) I prefer the boy king.

という文を, もし I と boy に強勢を置いて発話したとすれば, それは,

(3.94) The king whom I prefer is the boy king.

と言い換えることの出来る意味になり, その強勢を伴って発音された boy が論理的述語である。その場合 boy は king の修飾語という性質を失うわけではないが, 論理的述語として機能するために, その統語的機能が弱くなると考えられている。つまり強勢によって与えられるところの論理的述語という機能のほうが優位に立つということになるのである。それはちょうど boy という語が (3.93) におけるように修飾語として用いられる場合は, その統語論的機能が優位に立つために, その語のもつ名詞としての性質が弱くなることと平行的である。そのような見地から Gardiner は次のように結論する。

(3.95) "For interpretational purposes intcnation, syntax, and word-form thus seem to exert influence in this hierarchical order." (p. 161)

Gardiner がこの (3.95) でいう intonation という用語は強勢 (stress) とか音調 (tone) などの総称であるが，我々は文強勢を中立的な無標の強勢と，強意的な有標の強勢の二つに分けて考えているのであるから，その両者の間の階層性ないし優位性についても考えておく必要があるであろう。有標の強勢のほうが優位に立つことは言うまでもない。無標の強勢は統語構造と語彙項目に基づいていわば自動的に決定されると我々は考えているのであるから，それの意味解釈に及ぼす影響は有標の強勢に比べて少ない筈である。少なくとも Gardiner のいう意味での影響 (influence) は少ないであろう。そしてこの階層性 (hierarchy) とか優位性 (priority) という問題は，我々のいう言語の過程的構造との関連において常に考慮しなければならないことである。言語の構成要素の一つ一つは，有機的な連関をもって一つの構造を形成するものであり，しかもその形成過程への寄与のし方も一様ではないからである。

一方 Jan Firbas や Petr Sgall は，この意味の比重と強勢との相関を communicative dynamism (CD) という「尺度」でもって規定しようとしている。この CD というのは，Firbas (1961, p. 97) によれば，文を構成する各要素の情報伝達の進展に寄与する度合を意味するものである。新しい情報を担っている要素すなわち文の rheme と呼ばれる要素が，伝達の進展 (the development of the communication) に最も大きく寄与する。そして既に知っている情報とか，文脈ないし場面などから推測することのできる情報を担う要素すなわち文の theme の部分が，伝達の進展に寄与する度合は最も小さいというように説明される。もちろんその何れでもない中間的な要素もあるわけで，これは transition と呼ばれる。Sgall (1972, p. 286) の説明によれば，

(3.96) John writes poetry.

というような文は，それが無標の音調で発音される限り，poetry の部分の CD が最も高く，John の部分の CD が最も低い。そしてこの文の transition と見做される writes の CD は中間的で，John よりは高く poetry よりは低いことになり，これらの部分に伴う強勢はこの CD に比例してその強さが決定されると考えられているのである。文のこのような CDの度合によって我々は情報伝達の進展について明確な展望 (perspective) が与えられると Firbas は言う。Chafe (1970, p. 213) にも次のような指摘がある。

(3.97) "In addition, those surface structure items which reflect *new* information are (with some exceptions) spoken with a higher pitch (and greater amplitude) than those which reflect old information, as might, in fact, be expected from the fact that it is primarily the new information the

speaker wants to convey. Higher pitch and amplitude quite evidently are related to an increase in the effectiveness of communication."

このように新情報を表わす項目は強く発音され，旧情報を表わす項目は弱く発音されるということは，言語による伝達を効果的に行なうための知恵であったと言えよう。

しかもこの知恵は単なる生活の知恵ではなく，高度に発達した言語能力によるものであるということがその特徴である。意味の比重を強勢によって表わすという場合の言語化の過程は，厳密な言語規則に従わなければならないということを見落としてはならないであろう。強意表現については既にある程度詳しく考察したわけであるが，ここでは強意語としての even とそれによって強調される要素との関係について考えることにする。

(3.98)　Even Homer sometimes nods.

という文は「ホーマーでさえ時には居眠りをする（誤ることもある）」という意味で用いられるのであるから，even によって強調される語は Homer であり従って当然強勢もこの語に置かれる筈である。Jackendoff (1972, p. 248) によれば，

(3.99)

a. Even John gave his daughter a new bicycle.
b. John gave even his daughter a new bicycle.
c. John gave his daughter even a new bicycle.
d. John even gave his daughter a new bicycle.

というような場合 (a)～(c) においてはそれぞれ「ジョンでさえ」「自分の娘にさえ」「新しい自転車さえ」という意味が曖昧性なく表現されるが，最後の (d) ではどの部分が even によって強調されるのかが一義的にに示されないために意味が曖昧になると言う。しかしこのような文の曖昧性も強勢によって解消することが出来る。つまり，

(3.100)

a. Jóhn even gave his daughter a new bicycle.
b. John even gave his dáughter a new bicycle.
c. John even gave his daughter a new bícycle.

などのように even によって強調される要素は強勢のある要素であることになる。従って (3.100) の (a)～(c) はそれぞれ (3.99) の (a)～(c) と同じ意味になる。そして (3.99 a) の文は John に強勢が置かれる場合だけが文法的となる。

(3.101)

a. Even Jóhn gave his daughter a new bicycle.
b. * Even John gave his dáughter a new bicycle.
c. * Even John gave his daughter a new bícycle.

同様に (3.99 b) は，his か daughter に強勢が置かれる場合だけが文法的となり，(3.99 c) は new か bicycle に強勢が置かれる場合のみ文法的となる。

以上は Jackendoff の英語の母国語話者 (native speaker) としての判断によるものであるが，これらの事実から我々は意味の比重と強勢とを関係づけるためには，even の文中の位置といったような事柄も考慮に入れなければならないことが分かる。

6. 強勢と弱化

発話主体としての我々が，伝達しようとする意味ないし情報を音声化するに当たって (1) どういう語彙項目を選び，(2) どのように統語構造を構成し，(3) どういう情報構造を形成するかということなどによって文の強勢の型が決定されるわけであるが，その場合強勢のある部分とない部分とでは，分節的要素の音声化のされ方にも違いが生じる。強勢のある部分の分節的要素は明瞭に発音され，強勢のない部分においては分節的要素の弱化や消失が見られるのがふつうである。英語における弱化や消失がすべて無強勢 (atonic) によって生じるとは限らないが，この現象は通時的にも共時的にもきわめて広く見られるものである。無強勢によって生じた形式を我々は通常「弱形」(weak form) とか「縮約形」(contracted form) とかと呼んでいるわけである。文中で弱形となる語は，前か後の強形の語の一部分であるかのように発音されるのがふつうで，その場合前の語に付くものを前接語 (enclitic)，後の語に付くものを後接語 (proclitic) と呼んでその発音上の特徴を言い表わすこともある。

母音や子音の弱化・消失という発音現象は，語強勢との関連においても起こることは言うまでもない。例えば，

(3.102)

a. apply [əplái]
b. applicable [æplikəbl, əplíkəbl]
c. application [æplikéiʃ(ə)n]

における語頭の母音は，強勢があるかないかによって [ə] と発音されたり [æ] と発音されたりする。(c) の最後の音節では母音が消失し最後の子音が音節主音 (syllabic) となることもある。また，

(3.103)　gentleman, policeman, spokesman

などの語においては -man の部分が弱形になるため，これらの語は発音上単複同形となることになる。英語には次の (3.104) のように語強勢でもって品詞を転換することの出来る語が多いが，このような場合も強勢に伴って母音の変化が見られる。

(3.104)

a. conduct (n.) 〔kɔ́ndəkt〕
   conduct (v.) 〔kəndʌ́kt〕
b. frequent (adj.) 〔frí:kwənt〕
   frequent (v.) 〔frikwént〕
c. compliment (n.) 〔kɔ́mplimənt〕
   compliment (v.) 〔kɔ́mplimènt〕

最後の (c) の第二音節の母音はむしろ [ə] と発音されるのがより一般的であるかも知れないが，何れにしてもこの compliment という語は，一部の英語発音学の教科書の発音表記に見られるように名詞形と動詞形が同じ強勢の型になるのではなく，動詞として用いられる場合は最後の音節に第二強勢を置いて発音され，従って母音も [e] となると考えられる。Jones (1963) の発音辞典にはこの語の動詞形としては [kɔ́mplimént] という強勢の型も採録されている。英語を外国語として学んでいる我々は，このような弱化の現象に見られる規則性を強勢の型との相関において習得することを余儀なくされているわけであるが，この弱化の問題はネイティヴ・スピーカーにとっても次の (3.105) に例示されているような語の綴りを覚えるに際しての困難性の原因となることがあるようである。

(3.105)

a. prominent 〔prɔ́minənt〕
b. predominant 〔pridɔ́minənt〕

つまりこれらの語の -nent, -nant などのように無強勢のために同音異綴になる部分の綴りが混同され易いというのである。第二章で見た，

(3.106)　But if I hadn't met Chester, he'd of got me sure. (=2.6)

という例における非文法的な of も，その弱形が have の弱形と同じになるために代用されたものに外ならない。なおこの文には n't, 'd (=would) という縮約形が用いられている。

本章第三節で英語のリズムとの関連で見た bread and butter などの諸例 (3.52) において接続詞が弱形となることは改めて述べるまでもないが，

(3.107) I hope it will be nice and fine.

というような場合の接続詞 and は，弱形として前接的に用いられているというよりは，nice and [náis(ə)n] は 'satisfactorily' といったような意味をもつ一種の副詞で「二詞一意」(hendiadys) の例と見做される (Fowler (1965²), s.v., "nice"). 同種の例としては，

(3.108) a. I'm good and ready.
b. He's rare and hungry.

などにおける good and (='thoroughly') や rare and (='very') があげられる。

口語体の英語ではさまざまな縮約形が用いられるわけであるが，それは常識的に言えば意味を伝達する上で重要な要素は明瞭に発音し，重要でない部分はぞんざいに発音するということであろう。Bernard Shaw は "Spoken English and Broken English" という「談話」の中で次のように述べている。

(3.109) "Suppose I forget to wind my watch, and it stops, I have to ask somebody to tell me the time. If I ask a stranger, I say 'What o'clock is it?' The stranger hears every syllable distinctly. But if I ask my wife, all she hears is 'cloxst.' That is good enough for her ; but it would not be good enough for you. So I am speaking to you now much more carefully than I speak to her ; but please don't tell her!"
——Tauber (1965, pp. 61-62).

Shaw がここであげている cloxst という発音はいささか極端な例かも知れないが，我々は時と場合に応じて丁寧な言い方と，ぞんざいな言い方とを使い分けている筈である。それもあまり意識もせずに適宜に使い分けていると考えられる。我々の言語能力というものは，場面に適合するように伝達活動を遂行することが出来るという能力に外ならないのであるから，それは当然丁寧体とぞんざい体とを区別する能力を含むものでなければならない。そして分節音素の弱化・消失によって生ずる縮約形が多用されるのはぞんざい体においてである。

Roberts (1956, pp. 3-4) は，文字と音声との関係について述べたところで次のような例をあげている。

(3.110) "Suppose I write 'Cha doon.' You probably won't understand it. But if I were to say 'Cha doon' in the right situation with the proper tone of voice, you would understand immediately. And if you were asked to write down what had been said, you would write 'What are you doing?' Actually nobody pronounces all the letters contained in 'What are you doing?' Each of us pronounces the sentence in his own way, and in different ways on different occasions, but we all write it in the general way."

Roberts によれば，what are you doing? という文もそれが音声的に実現されるときには Cha doon というように縮約されることがある。しかもそのような縮約形もそれが場面適合的に発話される限り，即座に理解されるというのである。これに似た例としてはしばしば Chet? という縮約形が引き合いに出される。これは Did you eat yet? の縮まった形として容易に理解されるというものであるが，要するに，我々の意味を音声化し，その音声化されたものによって意味を理解するメカニズムは，当意即妙としか言いようがない。もう少し言語学的に言えば，我々は話し手としては発音を短縮する規則を知っていて，聞き手としては省略された部分を復元する能力を有するということになるであろう。しかし考えてみれば，我々の伝達行為は以心伝心で成立することもあるのであるから，発話を短縮したり，短縮された発話から完全な形 (full form) ないし基底形 (underlying form) を復元することは容易に違いない。ただ以心伝心的な伝達行為は言語学的分析の対象になり難いだけである。

一般に英語では文中で強勢を受けない機能語が縮約形となるわけであるが，今日慣用的に用いられている縮約形の殆どが Shakespeare の劇などでは既に多用されている。*Hamlet* に見られる例のいくつかを次にあげる。綴りや句読法は手許の Harrison (1948) による。

(3.111)

a. Who's there?
b. I'll cross it, though it blast me.
c. At least I'm sure it may be so in Denmark.
d. Hath there been such a time, I'd fain know that.
e. Who maintains 'em?

これらの例では be 動詞や助動詞，人称代名詞が短縮形となっているが，これは現代英語でもごくふつうに用いられるものである。当然予想されるように *Hamlet* には次のようなその用法が詩などに限定される縮約形も見られる。

(3.112)

a. 'Tis now struck twelve.
b. Tush, tush, 'twill not appear.
c. Have we, as 'twere with a defeated joy——
d. Upon the platform, 'twixt eleven and twelve
e. That he cried out 'twould be a sight indeed

などであるが，この (3.112) の諸例に見られる縮約形は，発音上は現代の日常語でも用いられる筈である。ただ正書法も考慮に入れるとすればやはり限定された用法と言うべきであろう。さらに *Hamlet* には次のような古い感嘆詞や慣用表現も見られる。

(3.113)

a. 'Sblood, there is something in this more than natural....
b. 'Swounds, I should take it.
c. God be wi' ye, fare ye well.
d. Well, God 'ild you!
e. Well, God-a-mercy.

この (a) の 'sblood [zblʌd] は God's blood の短縮形である。(b) の 'swounds [zwaundz, zaundz] は God's wounds の短縮形で zounds と綴る場合もある。(c) の God be wi' ye のより完全な形は God be with ye であるが，今日の goodbye はこの God be with ye の短縮形として形成されたものと考えられている。(d) の 'ild は yield の短縮形で，Harrison によれば 'God reward you' という意味になるという。(e) は God have mercy の短縮形である。

以上の例でも英語における分節的要素の弱化・消失の傾向を知ることが出来るが，次に現代の日常語における傾向を見るために，Salinger の *The Catcher in the Rye* に登場するアメリカの高校生たちの会話の中で用いられている縮約形のいくつかをあげる。

(3.114)

a. -Hey. Lend me your scissors a second, willya? Ya got 'em handy?
b. Wuddaya wanna make me do —cut my goddam head off?
c. Where 'dja get that hat?
d. No kidding, you gonna use your hound's tooth tonight, or not?
e. Why don'tcha?
f. C'mon, join me, why don't you?

これらの例では無強勢の人称代名詞や助動詞，前置詞などが，縮約されて前接的に用いられたり後接的に用いられたりすることがよく示されているように思われる。(a) では you の弱形が ya という形になっているが，これは ye と綴ることもある。(b) の wuddaya wanna は what do you want to の縮まった発音を表わしていることは明らかである。(c) の 'dja は did you の縮約形であり，(e) の don'tcha は don't you の縮約形であることは言うまでもないが，ja と cha の部分の子音の違いは同じ破擦音の有声と無声の違いとなっている。(f) の c'mon は come on の縮約形であるが，これは広告などでもよく用いられるようである。第二要素の on に強勢が置かれ，本来内容語で強勢を受ける筈の come が無強勢の語となり，そのためにその母音が脱落して後接的に発音されるようになるものと考えられる。同じ高校生たちの言葉遣いには次のような縮約形も見られる。

(3.115)

a. Say he had a tie on that you liked a helluva lot....

b. Boy, I can't stand that sonuvabitch.
c. Lemme be your manager.
d. Don't gimme that.
e. She only signed out for nine-thirty, for Chrissake.

(a) と (b) の helluva, sonuva- はそれぞれ hell of a, son of a の縮約された形である。(c) と (d) の lemme, gimme は代名詞 me が let, give などに前接する際に逆行同化 (regressive assimilation) を起こして生じた形である。(e) の Chrissake は Christ's sake の縮約形であるから，これは -t's の部分が脱落した形である。この場合の脱落は調音点がほぼ同じである子音が重なるために起こるものであるから，christen という語の -t- が脱落する現象と類似している。従ってこれは無強勢のための弱化・消失というよりは発音上の労力の節約 (economy of effort) の原理によるものと考えるべきであろう。

Eliot の "Sweeney Agonistes" は，

(3.116) When you're alone in the middle of the night and you awake in a sweat and a hell of a fright

というように a hell of a という「俗語」も飛び出す詩であるが，その中には次のような縮約形が用いられている。

(3.117)
a. We all gotta do what we gotta do
b. We're gona sit here and drink this booze

この (a) の gotta は (have) got to の縮約形で，(b) の gona は going to の縮約形であることは言うまでもないが，gona は gonna という綴りになるのがふつうである。このような例からも分かるように，英語の縮約形は正書法上もその形が確立されているものが多いわけである。

ところで Zwicky (1970) は，英語における弱化ないし消失には種々の制約があることを指摘している。例えば is と has の縮約形は，

(3.118) a. Who's Pete seen?
b. The man I told you about's here.
c. I've always known that Sam's crazy.

などにおけるように，その前の語が (a) のように母音で終わっている場合でも (b), (c) のように子音で終わっている場合でも自由に起こるのに対して，would と had の場合は母音の

後では縮約されるが，子音の後では縮約されないと言うのである。

(3.119)

Anyone who knows { a. Sue'd go. / b. *Sam'd go. }

c. ? The car'd been destroyed.

d. ? Homer'd go if you let him.

などに見られるように，(a) の縮約形が全く自然であるのに対して (b) では縮約形は許されない。そして (c) と (d) は中間的な場合で，[r] で終わっている語の後で had や would が縮約されると不自然ではあるが，受容不能ではないということを示している。さらに will, have, am, are の場合は，代名詞の後では縮約されるが，それ以外の場合は母音で終わる語の後でも縮約形は許されない。代名詞の後でも次の (3.120) のような場合は縮約形は許されないと言う。

(3.120)

a. Those who know me are (*me're) surprised.

b. Those who know her will (*her'll) be surprised.

c. You and I have (*I've) gone there once too often.

d. Everyone who hears you will (*you'll) be impressed.

e. The tallest of you are (*you're)being shipped off to Frederick the Great.

なお Zwicky は英語における縮約形が受容不能となる例として，

(3.121)

a. *Tell me where the concert's this evening.

b. *Do you know who the king's now?

c. *I just realized how happy Kurt's these days.

などをあげている。この (3.121) では is が動詞句 (VP) の最後の構成要素となっているために強勢を受けることになり，そのためにそれは縮約形として実現されることはないと Zwicky は説明しているが，King (1970, p. 134) の次の (3.122) のような指摘はこれと軌を一にするものである。

(3.122) "Aside from the question of emphasis, which naturally prevents the weakening or contraction of a form, the usual rule is that the contracted (or weakened or enclitic) form cannot be used at the end of a breath-group."

King は弱化・消失に関する規則の適用が阻止される例として次のようなものをあげている。（例文の中のダッシュは「音声的に実現されない代用詞」(unpronounced substitute) または「音声的に実現されない痕跡」(unpronounceable traces) を表わす。）

(3.123)

a. You'll need some, and I will——too.
b. I wonder where Gerard is——today.
c. I can't get over how gentle they are——with you.
d. It's the same one (that) you were looking at——yesterday.

これらの例ではダッシュによって示されたゼロ代用詞 (a zero substitute) や，要素の移動によって生じた痕跡の直前の助動詞や be 動詞は縮約されず，同じ統語的・音声的環境にある (d) の前置詞 at も弱形 [ət] として実現されることはないということになる。しかし次の例から分かるように，not の場合は (3.123) の諸例と同じ環境にあっても弱化の規則の適用が阻止されることはないと言う。

(3.124) I must say they're nice and crisp ; which they aren't——usually.

なお King が (3.122) で述べている「通常の規則」(the usual rule) は Palmer (1939², §§15-19) に拠ったものである。

第　四　章

区　切　り

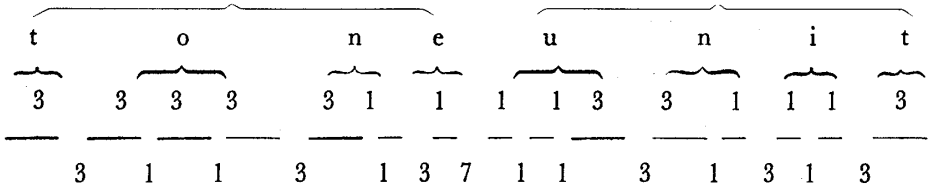
1.　言語的要素としての区切り

言語の過程的構造にとって＜区切り＞は不可欠の要素である。我々の言語化の過程は，有限の要素で無数の組み合わせを作って，無限の心的内容を伝達するための試みに外ならない。要素の組み合わせと言っても，それは単に要素を線的に排列するということではなく，群化とか層化といったような過程の中で形成される組み合わせである。従ってそれは普通に考えられている以上に心的で抽象的なものである。本章で取り上げる言語的要素としての区切りも，このような高度に抽象的な構造化の過程に超分節的要素の一つとして参与するものである。この区切りは我々の言語能力の一部を成している抽象的な要素であるから，それは音声的に実現されるとは限らない。しかしそれが音声的に実現された要素を我々は通常「連接」(juncture) とか「境界」(boundary),「途切れ」(break),「休止」(pause) などと呼んでいるわけである。正書法上も間隔 (space) とか句読点で以ってこの区切りを表わすのであるが，何れの場合も聴覚的ないし視覚的な切れ目を手掛かり (cue) として区切り方を見ようとするのは本末顛倒であって，我々はむしろ抽象的要素としての区切りがどのような構造化を経てどのように音声化ないし文字化されるかを見なければならない。

ところで通信体系としてのモールス符号 (Morse code) は，我々の伝達体系としての言語と種々の類似点をもっている。モールス符号には言語の分節的要素に相当する記号として短符 (dot) と長符 (dash) の二種類があり，それらの組み合わせによって欧文ならアルファベット26文字を符号化する。そして一つ一つの文字を表わす記号列の組み合わせによって語を符号化し，さらに語を表わす大記号列の組み合わせによって文を構成してメッセージを送信する。この場合記号と記号の間とか記号列の間，大記号列と大記号列の間の区切りが合図されなければ符号化が不可能となることは明らかである。それでモールス符号では，言語の超分節的要素の一つに対応するところの通常「間隔」(space) と呼ばれる要素が符号化の過程に参与するのであるが，この間隔には長さの違いによって区別される三つの種類がある。つまりモールス符号は二つの分節的要素と三つの超分節的要素で構成されていることになるが，二つの分節的要素は，長符を短符を基準単位とした3単位の長さとすることによって区別される。三種類の超分節的要素は，記号と記号の間隔は短符を基準単位とした1単位とし，

文字や数字などを表わす記号列の間隔は3単位，大記号列と大記号列の間隔は7単位とすることによって区別される。この比率は送信速度の速い遅いに関係なく保持されなければならないわけである。この符号化の過程的構造を視覚的に示せば次のようになる。

(4.1)



なおモール符号では句読点なども符号化して送信することが出来るようになっており，メッセージを符号化するためにはいろいろなレベルにおける区切りが不可欠の要素であることを示している。つまり言語における句（phrase）とか文（sentence）に相当する，いくつかの大記号列を組み合わせて形成される大記号列群を区切るための符号が必要となる場合があるわけである。ただ言語の場合は，大記号列や大記号列群に相当する構成要素は心的で抽象的な要素であるから，それは物理的な区切りによって把握されるのではなく，我々の言語能力の働きそのものによって把握されるのである。言語はこの点においてモールス符号の場合とは根本的に異なっていると言うべきであろう。

言語における区切りにはほとんど無自覚的に適用されるものと，日常的にきわめて具体的に意識されるものとがある。第一章であげた，

(4.2) a. $\overline{\text{カエル}}$（変える）
　　b. $\overline{\text{カ}}$エル（帰る）

という二つの動詞はその活用の種類が異なるのであるから，それは語幹と語尾の区切り方が異なるということを意味する筈である。つまりこれら二つの語は，

(4.3) a. カ・エル（変える）
　　b. カエ・ル（帰る）

というように区切られる。そして (a) は下一段に活用し，(b) は四段（または五段）に活用する。標準語ないし共通語の話者であればこのような区切り方や活用の種類，一つ一つの活用形の用法を「知っている」筈であるが，そのような知識・能力は無自覚的なものである場合が多い。Chomsky (1975, p. 165) の議論に即して言えば，このような場合の「知っている」は“know”という意味ではなくて“cognize”という意味であると言えるかも知れない。

つぎの（4.4）のような複合語の場合の区切りは 日常的にも具体的に意識されていると思われる。

（4.4）オモイ-メグラ・ス（思い巡らす）

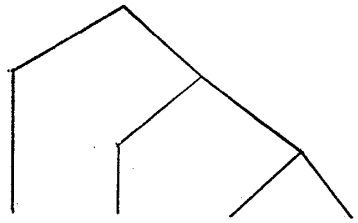
この場合の［-］は複合語を構成している語と語の間の区切りを示しているのであるが，それは［・］で示されている語幹と活用語尾の間の区切りに比べるとより顕在的なものであろうと思われるのである。このような区切りは，それが顕在的なものであっても潜在的なものであっても，語構造の形成に不可欠の要素である。

次の（4.5）の例に見られる区切りは句構造や文構造が形成されるレベルで起こるもので，日常的にもきわめて意識され易いものである。

（4.5）a. 僕は毎日新聞を読む。
b. 僕は『毎日新聞』を読む。

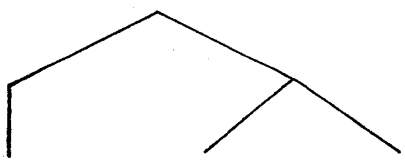
この（4.5）のような例では区切りだけではなく，アクセントの型も句構造の形成に参与することは言うまでもない。音声的に実現されたものによって句構造を把握するという点においては，アクセントのほうがより重要な手掛かり（cue）となっているかも知れない。何れにしても次の（4.6）のような句構造の違いが把握されなければならないわけである。

（4.6）a.



僕は　毎日　新聞を　読む。

b.



僕は　『毎日新聞』を　読む。

次にあげる諸例は同音の連続と繰り返しを多く含む文で，よく外国語としての日本語の教本などに用いられるものであるが，構造化の過程における区切り方の問題を考えるに当たっても示唆的である。

(4.7) a. 鳥の尾を追おうとする。
　　b. 庭には二羽鶏がいる。
　　c. 李ももも，桃ももも，ももはももでもいろいろある。

これらの文が特にローマ字で書かれている場合などは，正しい区切り方を把握することは外国人にとって著しく困難であろうと思われる。音声的に実現された区切りを手掛かりとして聴覚的にこれらの文における区切り方を把握することは，もっと難しいだろうと考えられる。しかし我々にとっては，このような場合の区切り方の把握は全く自動的になされるもので，この (4.7) の諸例はことば遊びの種となっている程である。

このように言語的要素としての区切りは，我々の構造化の過程においても構造を把握する過程においても重要な働きをするものであるが，英語においてもほとんど無自覚的な区切りからきわめて顕在的なものまで種々認められる。例えば，

(4.8) a. resign [rizáin]
　　b. re-sign [rì : sáin]
　　c. resolve [rizɔ́lv]
　　d. re-solve [rì : sɔ́lv]

などにおける (a) と (b), (c) と (d) はそれぞれ分節的要素の発音のし方が異なるわけであるが，このような場合の発音上の違いには区切り方の違いが関与していると考えられる。正書法上も (b) と (d) における区切りはハイフンを用いて示すのがふつうであるから，(a), (c) と混同されることはない。(a), (c) の両語も語構造の上では re·sign, re·solve というように区切られる筈であるが，この [·] という区切りそのものは，視覚的にも聴覚的にも特に示される必要はない。

(4.9) a. dishouse [dishάuz]
　　b. tranship [trænʃip]

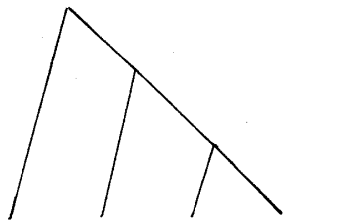
という例では，(a) と (b) はそれぞれ dis·house, tran·ship というように区切られるわけであるが，この場合の区切り方は両語の分節的要素の発音の違いとなって現われている。つまり両語の-sh-の部分の発音のし方の違いとなって現われているのである。

ところで日本語は音節と音節の切れ目が非常にはっきりした言語だと言われるが，英語などと比べると確かにそうであろうと思われる。ことば遊びで親しまれている「尻取り」とか，「上から読んでも下から読んでも同じことば」などは，日本語では一つ一つの音節の独立性が高いから可能なのであって，英語などを母国語とする子供たちには思いも寄らない事であろう。日本語の音節のこのような性質について金田一（1957, p. 65）は次のように述べている。

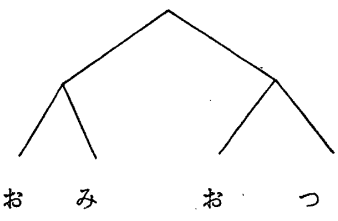
> (4. 10)「拍［音節］の切れ目がきわめて明瞭なこと，これはどうやら，日本語の性格の一つらしい。このことは日本人が一拍一拍を単位とする文字——すなわちカナをもっていることに関係があるかもしれない。が，それ以前にすでに明瞭なのだろう。」

まさにその通りだろうと思われる。日本語の長い歴史の中で，民衆が文字を知ったのはごく最近のことであるから，日本人のかな文字の使用が日本語の音節の性格を決定したとは考えられない。文字を知らない人々によって話され未だかつて文字化されたことのない日本語の中の諸方言の場合も，音節の独立性はきわめて強いものである。このように音節と音節の境界（boundary）が明瞭であることが，日本語の性格の一つと数えられるのであるから，日本語では語構造を形成している構成要素間の境界も明瞭であることになる。この点においても日本語は英語などとは性格を異にしていると考えられる。しかしこのことは，日本人が語の形態論的構造に関して顕現的な知識をもっているということを意味するものではない。接頭辞が三つも重なるということで一般にもよく知られている「おみおつけ」の語構造が次の(4. 11) の (a) のように分析されるものであるのか，(b) のように分析されるものであるのかを決定することは困難である。

(4. 11) a.



b.



この語の『広辞苑』の扱い方を参考にするとすれば，「御御御付」という書き表わし方は (a) の分析と一致していると思われるが，この語の見出し語としての「おみ—おつけ」という区切り方は (b) の分析と一致しているように思われる。一般には (a) のような構造をもつものと「感じている」人のほうが多いかも知れない。

語構造に関する我々の知識が顕現的なものであるとは限らないという点では英語の場合も同じである。しかも英語の場合は分節法 (syllabification, syllabication) に伴う困難性と相俟って，語のレベルにおける区切り方は必ずしも容易ではない。英語の分節法が難しい例としてよく引き合いに出されるのは次の (4.12) のような語である。

(4.12) a. min·ute n.
　　b. mi·nute a.

ウエブスターの *New World Dictionary* の「凡例」によれば，progress などのように語強勢の置き方によって品詞が変わる語の場合は，分節のし方も二通りあることになる。

(4.13) a. próg·ress n.
　　b. pro·gréss v.

この (4.13) の例は，英語の分節法は語強勢と密接な関係があることを示しているわけであるが，そのような関係が最も典型的に表われるのは次のような場合である。

(4.14) a. de·móc·ra·cy
　　b. dém·o·cràt
　　c. dèm·o·crát·ic

これら (4.13) と (4.14) の諸例は，英語では強勢を受ける音節は CVC という範例的な形を形成しようとする傾向がきわめて強いことを示している。従って，

(4.15) rec·on·dite [rékəndàit, rikɔ́ndait]

というような分節法の示し方は不親切であることになる。この語には，二通りの発音のし方に従って二通りの分節のし方がある筈だからである。つまり，

(4.15) a. réc·on·dìte
　　b. re·cón·dite

というようになる筈であり，この（4.15）の分節法であれば，次の（4.16）の分節法とも一致する。

(4.16) a. réc·og·nìze
b. re·cóg·ni·zance

Chomsky-Halle (1968) や Halle-Keyser (1971) においては，strong cluster と weak cluster の区別が強勢付与の問題との関連において重要であったのであるが，英語の伝統的な分節法も同じような関連において見直す必要があるように思われる。

多少例外的な例であるが，ディズニーの製作した映画 *Mary Poppins* の中で歌われる歌の中に Supercalifragilisticexpialidocious という途轍もない造語が出てくるが，これは作者自身によって次のように区切られている。

(4.18) Super-cali-fragil-istic-expi-ali-docious

この「語」の意味はあまり定かではないが，この区切り方はこの語の構成上の切れ目とほぼ一致していると思われる。しかしこの区切り方の著しい特徴は，それが「強弱格」(trochee) という作詩法上の単位に分けられているということである。このような分け方によってはじめてこの語は発音可能な（pronounceable）ものになると言えよう。*OED* に採録されている，

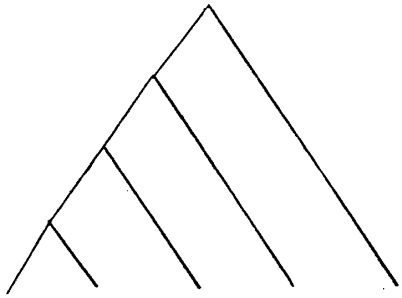
(4.19) The two longest monosyllables in our language are strength and straight, and the very longest word, honorificabilitudinity.

という用例の中の英語の「最多音節語」と考えられている語の構造も，英語の語形成や分節法や強勢付与に関する規則によって次のように示すことが出来る。

(4.19) hòn·or·ìf·i·ca·bìl·i·tu·dín·i·ty

このような場合，音節の境界と接辞の境界が一致するとは限らないわけであるが，この語の honor- という語幹を認定することは容易であるし，-fic, -able, -tude, -ity などの接尾辞を認定することもそれ程困難ではない。従ってこの語の語構造を現代英語の語形成法に即して，便宜上枝分かれ図を使って示せば次の（4.20）のようになる。

(4.20)



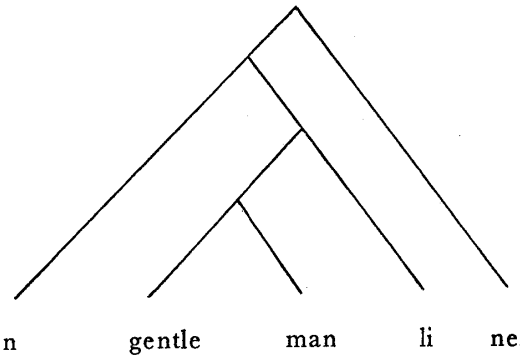
つまりこれは殆ど線的な排列と言ってよい構造であり，Halle（1973, p. 10）の表現を借りれば，「形態素の線的連鎖で形成されていて内部構造をもたない語」(words which consist of linear strings of morphemes without internal structure) であるということになるであろう。

この（4.19）の場合に比べて次の（4.21）の例に見られる区切り方はかなり複雑になっている。

(4.21) ungentlemanliness

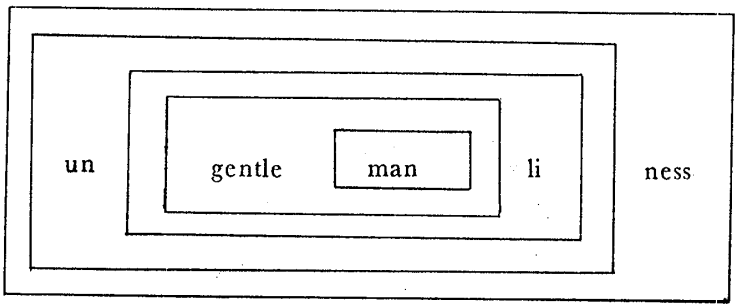
この（4.21）の語の構造は，まず gentleman という複合名詞が形成され，それに接尾辞-lyが結びついて形容詞を形成し，その形容詞に否定の接頭辞がつき，最後に-ness という接尾辞がついて名詞を形成するというように複雑になっている。しかもこの場合の語形成の過程においては，最初に manly という形容詞を形成し，その形容詞に gentle を結びつけることは正しくない。或いは gentleman という名詞に接頭辞 un- をつけることも同様に正しくないであろう。このような事実によって我々は，語構造の形成は一定の順序に従って行なわれるものであることを知らされる。(4.21) の語構造は，

(4.22)



というように示すことが出来る。言語的要素としての区切りは，このように，実際に発話される順序に従って行なわれるのではなく，語形成の順序に従って行なわれるものであることが分かる。この（4.22）の構造を，

(4.23)



というように入れ子型構造として示すことによって，我々はこの語の語形成の過程をより明確にすることが出来るかも知れない。ただこの ungentlemanliness という語の場合は，ungentlemanly という形容詞に-ness が結びついて名詞を形成するという分析のし方は Quirk *et al.* (1972, p. 979) などの分析とは一致するのであるが，これは gentlemanliness という名詞形に un- が結びついていると見る分析も可能である。*OED* ではこの ungentlemanliness とか unfriendliness などの un- は実詞 (sustantive) に結びついているものとして扱われている。そのように分析される場合のこの語の構造は，当然 (4.22) や (4.23) に示したものとは違うわけである。次にあげる undoable [ʌndú:əbl] という語は語構造が二通りに分析できるために意味も二通りに解されるという例である。

(4.24)

a.

un do able
(「もとの通りにすることができる」)

b.

un do able
(「実行できない」)

以上のように，この区切りは言語の構造化の過程にとって不可欠の要素であるが，この超分節的要素としての区切りは分節的要素の発音のし方とも密接な関係がある。我々は第二章において，

(4.25) He will act roughly in the same manner. (=2.23)

というような文で act と roughly との間に区切りがあるかないかによって，t から r への発音の移行のし方が異なるという場合について見た。つまり act と roughly との間に区切りがあれば t から r への発音の移行は sharp なものになり，区切りがなければその移行は muddy になるという場合について見たのである。このsharp とか muddy という用語は

Hockett (1958, pp. 54-55) が使っているものであるが，Hockett は，

(4.26) a. nìght rátes
　　b. nítràtes

という例をあげて，(a) の場合の t から r への発音の移行 (transition) は sharp であるのに対して，(b) の場合はその移行が muddy であると述べている。Gimson (1962, p. 277) によれば，この (4.26 b) のような語では /r/ は無声化するという。Gimson (1962, pp. 275-277) はさらに次のような例をあげて区切りと分節音素の発音との関係について観察している。

(4.27) a. an aim
　　b. a name
(4.28) a. that stuff
　　b. that's tough
(4.29) a. I scream
　　b. ice-cream
(4.30) a. how strained
　　b. house trained
(4.31) a. white shoes
　　b. whý choose

まず (4.27) においては，(a) の場合に比べて (b) の場合の [n] のほうが「長く」発音される。つぎの (4.28) では，(a) の stuff の [t] が殆ど無気音となるのに対して，(b) の tough の [t] は有気音 (aspirated [t]) として発音される。(4.29) では (a) の scream の [r] があまり無声化されないのに対して，(b) の cream の [r] は無声音として実現される。同様に (4.30) においても (a) の strained の [r] は殆ど無声化されないが，(b) の trained の [r] は無声音となる。最後の (4.31) では，(a) の shoes の [ʃ] のほうが (b) の choose の [tʃ] という破擦音の場合より長く発音されると Gimson は言う。また Jones (1963[12], xxvii) によれば，

(4.32) a. beestings ('first milk of a cow')
　　b. bee-stings ('stings of bees')

というような場合 (b) では，bee と stings との間に区切りがあり，そのために bee の母音

の長さが (a) の場合により長くなるという。

これら (4.26) — (4.32) の諸例によって我々は，区切り方の違いが分節音素の発音のし方の違いとなって現われることが分かるのであるが，そのような場合，実際の発音上の切れ目と分節音素の発音に伴う諸特徴の何れがより重要な音声的手掛かりになっているかを決定することは必ずしも容易ではない。

2. 音声的手掛かり

言語の構造化の過程を図式的に単純化して考えれば，それは意味の音声化ということに外ならない。心的ないし情緒的要素としての意味を我々は以心伝心的に伝え合っている場合もないではない。日常的にはよく「言わず語らず」のうちに理解し合っている場合もある。「目は口ほどに物を言う」というようなことも決して珍しいことではない。従って意味の音声化といっても，心的・情緒的要素としての意味が物理的音声によって文字通り伝達 (convey) されるのではなく，それはむしろ喚起 (evoke) されるものと考えるべきであろう。言葉のやり取り (give-and-take) といってもそれは決して音声化されたものが話者と聴者の間を往復するということを意味するのではなく，それはいわば感応 (rapport) とでも言うべきものによって理解し合うということであろう。

しかしながら，我々の音声を知覚する機構や文構造を把握し意味解釈をする能力は高度に発達したものであり，我々の伝達行為は以言伝心的に行なわれる場合が効果的でもあり創造的でもある。言語が我々の伝達活動において果たす役割りを過小に評価してはならないのである。「感応」というような概念が言語学になじみ難いのはむしろ当然であろう。ただ言語の役割りは過大評価されてもいけないということを我々は強調したいのである。Hawthorne の "The Ambitious Guest" の中に，

(4.33)

> Young and old exchanged one wild glance, and remained an instant, pale, affrighted, without utterance, or power to move. Then the same shriek burst simultaneously from all their lips.
>
> "The Slide ! The Slide ! "
>
> The simplest words must intimate, but not portray, the unutterable horror of the catastrophe.

という個所があるが，これは言葉の果たす役割りとか機能というものが時と場合によって違うということを非常によく示している。一口に言語による伝達と言っても多言を要しない場合とか，言葉を尽くして説明しなければならない場合など色々ある筈である。Hawthorne

の表現を借りて言えば，intimate すると言うのにふさわしい場合もあるであろうし，portray すると言うべき場合もある筈である。

ところで Gardiner (1951², p. 34, et passim) によれば，語 (word) の機能は「意味されるもの」を把握するための clue であるという。これは言語の役割りないし機能というものを，過小にでもなく過大にでもなく正当に評価しなければならないという問題との関連において示唆的である。我々が使用する語の一つ一つに固有の意味があると考えるのは誤りではないであろうが，我々の意味解釈機構は，一つの語と一つの意味を結びつけるというような単純なものではない。語の意味解釈は語のもつ形態論的・統語論的特性や意味素性に基づいてなされる筈である。そしてこれらの特性や素性にはいくつかの語に共通のものもあり，一つの語を他の語と区別するものもある。従って意味解釈としての構造化の過程はそのような特性ないし素性の力学的な統合 (dynamic integration) の過程と考えることの出来るものであり，語彙論的単位としての語はそのような過程の中で clue としての機能をもつことになるわけである。

さて言語の構造化の過程における音声的手掛かり (phonetic cue) についても，過小でも過大でもない正当な評価がなされなければならない。まず我々の文構造を把握する機構は，構造上の区切りがすべて発音上の切れ目として実現されなければ構造の把握が出来ない程単純なものではないということを我々は知らなければならない。しかし前節の (4. 26)—(4. 32) の諸例や次にあげる (4. 34)—(4. 35) などにおける区切り方の違いには種々の発音上の特徴が伴う。

(4. 34) a. we'll own
　　b. we loan
(4. 35) a. It's the beef-eater that matters.
　　b. It's the bee-feeder that matters.

例えばこの (4. 34) では，(a) の l はいわゆる「暗い l」(dark 'l') となり，own の語頭には弱い声門破裂音 (glottal stop) が伴う。一方 (b) では，we の母音は (a) の場合より長くなり，loan の語頭の子音は「明るい l」clear 'l') となる。次の (4. 35) でも (a) の beef-eater と (b) の bee-feeder との間には声門破裂音を伴うか伴わないか，母音や子音の発音が長いか短いかというような違いがあると考えられる。このような場合これらの発音の特徴は，構造上の区切り方の違いを把握するに当たってどの程度確かな手掛かりとなっているのであろうか。アメリカ英語のネイティヴ・スピーカーである Hill は，that stuff と that's tough (=4. 28) のような最小対立 (minimal pair) について次のように述べている。(1958, p. 25)。

(4.36) "English speakers sometimes maintain that there is no difference between the pair, but it is easy to show that they do indeed contrast. If the pair are repeated several times and a group of listeners is asked to identify which construction is occurring, there is always agreement."

この場合 Hill は，母国語話者としての内省 (introspection) に基づいて判断しているのではなく，どちらかと言えば客観的事実として報告しているのである。Hill によれば，that stuff ; that's tough における対立は， that の t が長く発音されるか， that's の s が長く発音されるかという違いによるものである。ただその場合長く発音されると言ってもその長さは，単音の平均的長さを基準単位としての半分だけ延長したもの (a half-unit prolongation) である。ここで Hill は，今日では Joos (1962) として発表されている音響音声学的測定に基づいて報告しているようであるが，この程度の発音の延長が実際上音声的手掛かりになるかどうかはきわめて疑問である。

また実際の発音上の切れ目は，構造上の区切りを識別するための手掛かりとなるかということに関しても疑問は生じる。Robert J. Geist (personal communication) によれば，アメリカの子供たちがよくやる「当てっこ」が次の (4.37) のようになる場合があるそうである。

(4.37)

A : I ate something that starts with 'n'. Guess what !

B : Negg ?

A : Nope.

B : Norange ?

A : Yep.

この中の negg や norange は an egg>a negg, an orange>a norange というような「異分析」(metanalysis) によって形成されたものである。説明するまでもなく子供たちはこのような分析を言語学者と同じく意識的にやっているのではなく，文字通り天真爛漫にやっているのであろうが，このような自然の分析例は単に未発達の段階の言語の特徴を示しているだけでなく，成人の言語における発音上の分節法 (phonetic syllabification) の一つの傾向も示していると思われる。つまり an egg とか an orange などは成人の言語でも [ə neg], [ə nɔ:rindʒ] というように発音される傾向があるということである。ただ通時的には異分析によって形成された語の例としては，

(4.38) a. (a) nickname<ME (an) ekename

b. (an) apron<ME (a) napron

というように，語頭に音が添加される例と並んで語頭音が脱落する例も見られるのであるから，異分析という現象そのものは発音上の分節法とは関係なく，専ら語境界の設定に関連して起こるものと理解しなければならないかも知れない。何れにしても，言語の構造上の区切りというものは何らかの音声的手掛かりがなければ把握できないというようなものではないであろう。我々はむしろ構造上の区切りに基づいて実際の発音を「聞いている」場合もあるであろうし，発音上の手掛かりによって構造上の区切りを「知る」場合もあるであろう。我々の言語の構造を形成し把握する機構は勿論一つであって，それは種々の心的働きを統合するようなものであろうと思われる。従ってこの問題を考察する場合の我々の視点も，Scholes (1971, p. 9) が適切にまとめている次の二つの視点を統合するものでなければならないであろう。

(4. 39)

a. "There is, on the one hand, the structuralist school of thought which maintains, in effect, that a sentence can be identified and defined by a reference to heard suprasegmental features. From this point of view, the constituent structure of a given sentence is 'discovered' by the listener on the basis of acoustic cues provided by the speaker."

b. "The other point of view... maintains that the listener's knowledge of the syntax of English allows him to perceptually supply the proper suprasegmental features of a sentence when no acoustic cues for these features are present in the signal. This point of view, quite opposite from the structuralist one, says, in effect, that listeners do not infer syntactic structure from acoustic suprasegmentals."

これら二つの視点のうちの (a) の視点に立てば音声的手掛かりを過大評価する傾向があり，(b) の視点に立てばそれを自動的に与えられるものとして過小評価しがちであるから，これら二つの視点はどうしても統合されなければならないのである。

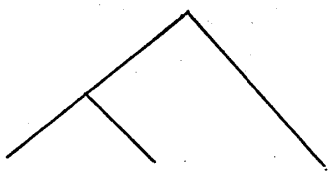
次にあげる例はアメリカの構造言語学者たちの間では強勢や連接との関連で最もよく議論されたものである。

(4. 40) a. lighthouse keeper
b. light housekeeper

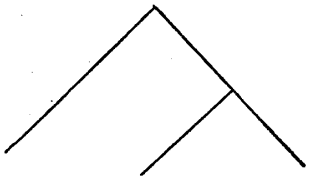
この (4. 40) の (a), (b) がそれぞれ次のような句構造をもつものであることは，正書法上の区切り方によっても知ることが出来る。

(4.41)

a.



b.



そしてこの二つの句構造は，音声的には，分節音素の連鎖としては同じ形になるのであるから，当然超分節的要素によって区別されることになる。例えば，我が国でもよく知られている Trager-Smith (1951) の四種類の強勢による分析に従えば，(4.42) のように区別されることになる。ここでは便宜上 Smith (1956, p. 38) に見られる (b) の light housekeeper が 'a person who does light-housekeeping' という意味になる場合と，'a housekeeper who doesn't weigh very much' という意味になる場合との違いについては考慮しないことにする。

(4.42) a. líghthòuse kêepĕr

b. lîght hóusekèepĕr

この (4.42) におけるような強勢の型による区別に対して Bolinger-Gerstman (1957) は，彼らの音響音声学的実験の結果に基づいて，(4.42) のような場合は語と語の間の間隔も有意的 (significant) であると述べている。彼らの測定によれば，これら二つの発話を発音するに要する時間の長さを語の部分と間隔の部分を分けて示せば，次の (4.43) のようになる。

(4.43) a. líght hòuse kêepĕr
200 40 280 120 400

b. lîght hóuse kèepĕr
220 140 220 60 300

単位は msec＝milliseconds

Bolinger-Gerstman (1957, p. 255) の結論は次のようなものであるが，これは今日の我々から見てもきわめて妥当なものである。

(4.44) "The common-sense conclusion... is that since in *lighthouse keeper* the semantic bond between *light* and *house* is closer than that between *house* and *keeper* (immediate constituents are *lighthouse/keeper*), and since the disjunctures transparently supply a physical separation whose width corresponds inversely to the semantic bond, it follows that the disjunctures function directly to carry information, and not indirectly as components of a hypothetical stress."

この結論の中で Bolinger-Gerstman は，アメリカの言語学者たちの間でより一般的に用いられていた「連接」(juncture) という用語を避けて「離接」(disjuncture) という用語を使っているが，それは彼らがこの発音現象を「音素から音素への移行のし方」(transition from one phoneme to another) として捉えるのではなく，「音節中心の分離のし方」(separation of syllable centers) として捉えていたからであろうと思われる。(4.43) の実験結果によれば，light と house の間の間隔は (a) の場合が 40 msec であるのに対して (b) の場合は 140 msec となっていて，これは (4.41) の枝分かれ図に即して言えば，低いほうの枝の分かれ目は小さいほうの数値に対応し，高いほうの枝の分かれ目は大きいほうの数値に対応していることになる。

ただこれらの数値は Lieberman (1967, pp. 149-154) の実験結果と必ずしも一致していない。Lieberman の測定の結果は，

(4.45) a. líght　hòuse　kêep　ĕr
　　180 40 170　190 90 100 120
　　b. lîght　hóuse　kèep　ĕr
　　240 220 160 180 90 110 110

となっていて，light と house の間の間隔は (a) の場合が 40 msec であるのに対して (b) の場合は 220 msec で，その差は大きいものであるが，house と keep の間の間隔には殆ど差違が見られない。Bolinger-Gerstman の測定では house と keep の間の間隔はちょうど二対一の割合になっていて枝分かれ図で示した構造上の区切りと一致していたものである。このように house と keep の間には殆ど間隔の置き方の違いが認められないにも拘らず Lieberman は，この二つの発話を区別する音響的手掛かり (acoustic cue) となっているものは強勢の型ではなく，離接 (disjuncture) であるという結論を下している。彼はこの「離接」という用語を「母音と母音の間の間隔」(the intervals between the vowels) というように定義しているから，これは考え方も用語も Bolinger-Gerstman (1957) に従ったものであることが分かる。従ったと言っても，彼は決してそれを踏襲したのではなく，むしろ彼はその実験音声学的研究と並行して彼が精力的に行なった文献渉猟の中でそれを発見して，それに新しい照明を当てたと言うべきであろう。ただ彼が (4.45) の二つの発話のような場合の強勢の果たす示差的機能を極端に過小評価することは正しくないであろう。

第三章で多少詳しく検討したように我々は，

(4.46)

a. a gréenhòuse [名] (=3.15 a)

b. a grèen hóuse [名詞句] (=3.16 a)

のような二つの構造は強勢によって区別されると考えるのであるから，(4.45) のような場合も強勢のもつ示差的機能を認めるものである。その場合も我々は，強勢だけが構造を把握するための手掛かりとなると考えるのではないということは既に述べた通りである。Lieberman (1967, p. 153) は，(4.45) の二つ発話の場合，基本周波数 (fundamental frequency) も声門下の空気圧 (subglottal air pressure) も示差的でないとして次のように結論しているのであるが，我々はその前半の実験結果に異を立てることは出来ないが，後半のように結論することは正しくないと考える。

(4.47) "The duration of the interval between the two air pressure peaks always correlates with the constituent structure of the utterances. The disjuncture rather than the magnitude of the air pressure peak differentiates the utterances."

しかし Lieberman のこの結論は，接近のし方は異なるが，Chomsky-Halle-Lukoff (1956) の分析の結果と一致しているという点が注目される。Chomsky-Halle-Lukoff は，文の構成要素の階層 (hierarchy) に対応すると考えられている二種類の連接 (juncture) を設定する。内部連接 (internal juncture) と外部連接 (external juncture) の二種類であるが，(4.45 a) の light と house の間には内部連接があり，(4.45 b) の light と house の間には外部連接があるというように分析しているのである。(4.41) の枝分かれ図における低いほうの枝の分かれ目に対応するのが内部連接であり，高いほうの枝の分かれ目に対応するのが外部連接であるということになる。Chomsky-Halle-Lukoff はこのような場合強勢のもつ示差的機能を認めないという点においても Lieberman と一致しているが，我々はこのような場合音声的手掛かりとしては連接と強勢だけでなくその他の音声的特徴も関与すると考えるものである。言語の構造を過程的構造と見るという場合，この連接とか強勢，分節音素的特徴などの諸要素のうちのどれが先かという優位性ないし先行性 (priority) を決定することは必ずしも容易ではないが，これらの要素がすべて直接的に構造化の過程に参与していることは確実である。構造を把握する機構にとってこれらの要素のうちのどれがより重要な手掛かりとなっているかを決定することは困難であっても，それらが直接的に同時的に関与していることは否定できないであろう。いくつかの構成要素が直接的にしかも同時的に構造化の過程に参与すると考えるのは自家撞着ではないかという疑問が起こるかも知れないが，我々の考えている過程的構造というものは決して物理的時間の経過にそって形成されるというよう

なものではないのであるから，言語構造を「過程的」に捉えるということと構成要素が「同時的」にその形成に参与すると考えることは矛盾はしない筈である。

3. 句構造と区切り

我々は文構造を句構造（phrase structure）として把握することが出来る。これは我々の言語能力の著しい特徴の一つであると言うべきであろう。文の構成要素を語とか形態素とかと見ることも可能であり，文の終極構成要素（ultimate constituent）は音素であると考えることも出来る。しかし意味を音声化するという言語化の過程において我々が文構造を形成し把握するという場合，句構造の形成ないし把握が中心的な役割りを果たしていることは明らかである。

(4.48)

a. 東京は日本の首都である。
b. 日本の首都は東京である。

というような言い換えは我々にとって全く自動的なものであるが，そのような言い換えが自由に出来るのは我々が文構造を句構造として把握しているからだと考えられる。次の(4.49)の (a) と (b) のような言い換えであれば，就学前の子供たちにとってもごく自然に出来るものであろう。(4.49 c) のような区切り方（句切り方）の間違いは起こらない筈である。

(4.49)

a. 星組の先生は田中先生です。
b. 田中先生は星組の先生です。
c. *田中先生ですは星組の先生。

この (4.49) の (a), (b) のような言い換えはきわめて単純な操作であるが，子供たちは次第に次の (4.50) のような言い換えに見られる操作も自由に出来るようになる。

(4.50)

a. この引き出しに金魚の餌が入っています。
b. 金魚の餌はこの引き出しに入っています。
c. 金魚の餌が入っているのはこの引き出しです。
d. この引き出しに入っているのは金魚の餌です。

この（4.50）の例に見られるように，このような言い換えという操作は，表面上連続している要素を区切って並べ換えるだけでなく，表面上は不連続（discontinuous）な要素を統成することによって行なわれる場合があることになる。この不連続要素の統成ということは，直接構成要素分析（immediate constituent analysis）においてはどちらかといえば例外的なものと見做されていたのであるが，それはむしろ我々の句構造の形成ないし把握は，抽象的なレベルでなされるということを示すものである。それはまた我々のいう構造上の区切りのもつ二つの機能すなわち「統成的機能」（amalgamative function）と「分割的機能」（segmentative function）を示すものでもある。この統成的機能という用語は有坂（1959, p. 116）に負うものであるが，とにかく我々の句構造の形成には統成（amalgamation *or* synthesis）と分割（segmentation *or* analysis）という二つのいわば相反する力が働いていると考えられるのである。構造上の区切りが連接（juncture）と呼ばれたり離接（disjuncture）と呼ばれたりするのもこのことと関係があるかも知れない。

Chomsky（1975, p. 31）によれば，英語を母国語とする子供たちは次の（4.51）の (a) の平叙文から (b) のような疑問文をつくるとき，(c) のような非文法的な文を生成することはないという。

(4.51)

a. The man who is tall is in the room.

b. Is the man who is tall in the room?

c. *Is the man who tall is in the room?

子供たちはその言語習得の過程において色々な間違いをするものであるが，この (c) のような間違いは決してしないというのであるが，それは子供たちが (a) のような平叙文をいくつかの抽象的句（abstract phrases）に分析して把握しているからであると Chomsky は言う。そしてそのような句切りが「抽象的」なものであることについて彼は次のように説明している。

(4.52) "The phrases are 'abstract' in the sense that neither their boundaries nor their categories (noun phrase, verb phrase, etc.) need be physically marked. Sentences do not appear with brackets, intonation boundaries regularly marking phrases, subscripts identifying the type of phrase, or anything of the sort." (p. 32)

確かに我々は句構造を，我々が内蔵するに至った言語規則によって形成し把握するのであるから，統語論的句切りがすべて聴覚的ないし視覚的に合図される必要はない。このことは，前節で見たような句構造を把握するための音声的手掛かりを過大評価するような過ちに陥らないためにも正しく理解しておく必要があるであろう。ただこのことは決して音韻論的句切

りは，原則的には，統語論的句切りと一致するということを否定するものではない。統語論的句切りが発音上の句切りとして実現されることによって，句構造の把握と意味解釈が適切に行なわれる場合があるということを我々は日常的にもよく経験する。逆に統語論的句切りが，聴覚的にも視覚的にも合図されないために，構造把握と意味解釈に曖昧性が生じるということも我々が日常経験する通りである。

本章第一節にあげた He will act roughly in the same manner.（=4.25）という文は，roughly という副詞がその前の動詞を修飾するのかその後の前置詞句を修飾するのか曖昧であるが，そのような場合は，発音上の句切り方によって曖昧性を解消することが出来る。正書法上も roughly の前か後にコンマを置くことによって句構造を一義的に決定することが出来る筈である。次の（4.53）のような例は，統語論的句切りと音韻論的句切りの関係を論じる場合にしばしば引き合いに出されるものである。

(4.53)

a. Two times three, plus two, is eight.

b. Two, times three plus two, is ten.

この場合 (a) は（2×3）+2=8 ということで，(b) は 2×（3+2）=10 ということに外ならない。この（4.53）の表記法は Pike（1945, p. 33）に従ったものであるが，この中の句読法上のコンマは彼のいう tentative pause を表わすものである。このような場合に注意しなければならないことは，この（4.53）のような内容をふつうの言葉を使って口頭で伝えることには自ずと限界があるということである。

句構造上の曖昧性が発音上の区切りによって解消する例のきわめて古典的なものが，Jespersen（1924, p. 103 fn.）の次のような話の中に見られる。

(4.54) "A friend once told me the following story about a seven years old boy. He asked his father if babies could speak when they were born. 'No!' said his father. 'Well,' said the boy, 'it's very funny then that, in the story of Job, the Bible says Job cursed the day that he was born. The boy had mistaken a group primary (object) for a group tertiary."

Jespersen はこの話を語群（word group）のランク（rank）の問題との関連であげているのであるが，この中の Job cursed the day that he was born. という文は the day that he was born という部分が名詞句であるか副詞句であるかが一義的に決定できないために，この話の中の少年はそれを聖書とは違う意味に解したのである。その少年はこの文を cursed という動詞の後に発音上の区切りがあるものとして解釈したわけである。この文が「ヨブは自分の（生まれた）日を呪った」という聖書的意味で用いられるときは，そのような発音上

の区切りは置かれない筈である。

句切り方の違いによって意味も異なるということは我々が日常的によく経験することである。次にあげる諸例の中には，ことば遊びのような興味の対象となるものも含まれている。

(4.55) a. The man who was carrying a bag turned the corner.
b. The man, who was carrying a bag, turned the corner.

(4.56) a. The inspector says the schoolmaster is a fool.
b. The inspector, says the schoolmaster, is a fool.

(4.57) a. To read gives one/pleasure.
b. To read gives/one pleasure.

この最後の例では，正書法上コンマで句切り方の違いを示すことは出来ないと思われるので，便宜上斜線を用いた。説明するまでもなく，(4.55) は関係代名詞の制限的用法と非制限的用法とが，句切りによって区別されている例であり，(4.56) は句切り方によって文の一部分が挿入句となる場合があることを示す例である。最後の (4.57) のTo read gives one pleasure. という文は「読書は人に楽しみを与える」という意味にも「読書は一つの楽しみを与える」という意味にもなり得る文であるが，この二つの意味を句切り方だけを変えることによって区別することが出来るということをこの例は示している。ところで Chomsky (1965, p. 13) には，次の (4.58) のような関係節を含む文の句切り方への言及が見られる。

(4.58) This is the cat/that caught the rat/that stole the cheese.

この英語としてやや不自然な文は，Chomsky によれば，(4.58) で斜線で示した個所に音調の切れ目 (intonation break) を置いて読まれるのが普通であるという。ところがこの文は，次の (4.59) のように示すことの出来る右枝分かれ構造 (right-branching construction) をもつものである。

(4.59) [This is [the cat that caught [the rat that stole the cheese.]]]

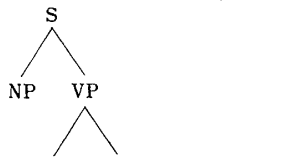
従ってこの文の発音上の句切りと構造上の句切りとは全く一致しないことになるとChomskyは言う。しかし (4.58) の読み方は英語のネイティヴ・スピーカーにとって自然なものであるというのであるから，その読み方は (4.59) とは違う構造上の句切り方に基づいてなされている筈である。それはほぼ次のようなものであろうと考えられる。

(4.60)
a. This is the cat/
b. the cat caught the rat/
c. the rat stole the cheese.

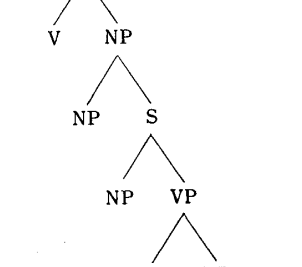
そしてこの（4.60）の (a), (b), (c) は，それぞれ，次の（4.61）のような枝分かれ図の中の (a), (b), (c) の段階の句構造に対応していると考えられる。つまり（4.58）の発音上の句切りは（4.60)—(4.61）のような句切り方に基づいていることになるのである。

(4.61)

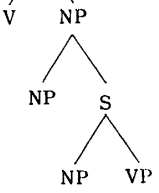
a.



b.



c.



挿入句を含む文の句切り方としては，(4.56 b）のように，挿入句が be 動詞の前に挿入される場合もあるが，そのほかにも色々の場合があることは言うまでもない。

(4.62)

a. A grammatical transformation is, in other words, a rule that applies to P-markers.
b. This fact, of course, has no bearing on the question.
c. Suppose, however, that we were to include the following.
d. You'll be surprised, I'm sure, at the change you'll find in her.

などのように英語における挿入句は，その種類も多く，挿入される文中の位置も多様である。しかし次の（4.63）のような句切り方は，実際にネイティヴ・スピーカーによって使用された例であるが，例外的なものと考えるべきであろう。

(4.63) The scene, is in brief, one of confusion.

この（4.63）のような句切り方に対するネイティヴ・スピーカーの反応は必ずしも一様ではないが，少なくとも，口調という点では特に不自然ではないようである。

さて Sadock (1974, p. 38）は（4.64）のような例をあげて，統語論的句切りが音声的に休

止（pause）として実現されることが義務的（obligatory）である場合と，随意的（optional）である場合があることを指摘している。

(4.64)

a. Feta is made from goat's milk, since you wanted to know.
b. Feta is made from goat's milk, since there are few llamas in Greece.

この（4.64）の (a) と (b) の since に導かれる従属節は，形の上ではよく似ているが，主節との意味上の関係は全く異なるものである。(b) の従属節は主節について理由を説明する副詞節であるが，(a) の従属節は話者が発言をしていること自体について理由を述べているのである。我々の発言行為の中では，話者が発言をするということ自体は言語的に表現されるとは限らないわけであるが，今日では遂行分析（performative analysis）と呼ばれている Ross (1970) などの統語分析では，平叙文はすべて「話者＋発言動詞＋聴者」という形の高位節 (superordinate clause) もつものとして分析される。この高位節は簡単に *I tell you* というように書き表わされる場合もあるが，(4.64 a) の従属節は遂行分析でいうところの高位節について理由を述べているのである。そのような場合，(4.64 b) の主節と従属節との間の休止は随意的であるのに対して，(4.64 a) においては since に導かれる節の前に休止がなければ，その文は成立しないというのである。統語論的・意味論的句切りにも色々の種類があると考えられるが，この (4.64 a) に見られるような大きい句切りは，音声的にも句切りとして実現されなければならないことになる。

一方 Jackendoff のネイティヴ・スピーカーとしての判断によれば (1972, p. 50),

(4.65)

a. Evidently Horatio has lost his mind.
b. Horatio has evidently lost his mind.
c. *Horatio has lost his mind evidently.

というような文は It is evident that Horatio has lost his mind. と書き換えることが出来るという性質をもつものであるが，このような場合 evidently という副詞は，(4.65) の (a) と (b) におけるように文頭か助動詞の後に置かれれば文法的な文を形成することが出来るのに対して，(c) におけるように同じ副詞が文末に来るとその文は非文法的になるという。ところがこの (c) の文も (4.66) で句読法上のコンマで示したように文末の副詞の前に休止を置けば文法的な文となるというのである。

(4.66) Horatio has lost his mind, evidently.

この evidently という副詞は，certainly とか unfortunately, apparently などと共に文（修

飾）副詞（sentence (-modifying) adverb）と呼ばれるのが普通であるが，happily などは，動詞を修飾する副詞としても文を修飾する副詞としても用いられるものであるから，次の(4.67) の (a) は「彼は幸福な死に方はしなかった」という意味になり，(b) のほうは「幸いに彼は死ななかった」という意味になるわけである。

(4.67)

a. He did not die happily.
b. He did not die, happily.

序ながら，この (4.67) のような場合，文強勢の置き方も異なることは言うまでもない。(4.67 a) は文全体が一句切りとなるのであるから文強勢は happily の語強勢と一致することになり，(4.67 b) は全体が二つに句切られるのであるから，文強勢は die と happily の両方に置かれることになる。文強勢が句強勢（phrase stress）と呼ばれたりするのは，このような句切りと強勢との関係を考慮してのことであろう。

Jackendoff が考察している (4.65) の場合と類似した例であるが，Katz-Postal (1964, p. 77) によれば，

(4.68)

a. maybe you will drive the car
b. no you will not drive the car

(4.69)

a. *maybe drive the car
b. *no do not drive the car

などの例に見られるように，これらの文が音調の上で一句切りとして発話される場合には，maybe とか no などの副詞は (4.68) におけるように平叙文と共起 (co-occur) することは出来るが，(4.69) におけるように命令文と共起することは許されないという。これはこれらの文が一句切りとして発話される場合の共起制限であるから，(4.69) の二つの文が非文法的であるのに反して (4.70) の二文は英語として全く自然である筈である。

(4.70)

a. maybe, drive the car.
b. no, do not drive the car.

しかしこれらの文を発することによって遂行される我々の発話行為 (speech act) そのものが適格 (felicitous) なものとなるためには，(4.70) においてコンマで示した発音上の句切りのほかに種々の意味論的・語用論的条件が揃わなければならないことは言うまでもない。

この句構造と区切りの問題を考えるに当たって想起しなければならないことは，かつて

Chomsky によって指摘された次の（4.71）のような無意味（nonsensical）な「文」の音調に関する議論である（Chomsky, 1957, pp. 15-16).

(4.71)

a. Colorless green ideas sleep furiously.
b. Furiously sleep ideas green colorless.

Chomsky によれば，この（4.71）の (a) と (b) は共に無意味な文であるが，(a) の文はごく普通の文音調で読むことが出来るのに対して，(b) では一語一語を区切って発音することしか出来ないという。つまり (a) は，

(4.72) S⟶NP+VP

というような書き換え規則によって定義することの出来る文の性質を備えているのに対して，(b) は単語の羅列に過ぎない。従って，(b) を音調上一句切りとして発音することは出来ないというのである。(a) の文は無内容ではあっても，いわば不思議の国の Alice が Jabberwocky の詩を「理解」することが出来たように，英語のネイティヴ・スピーカーであれば，この文の Colorless green ideas の部分が NP で，sleep furiously という部分が VP であって，その両者が統成（amalgamate）されて S を形成するというように分析することが出来る。従ってその音調も自然な文音調になる筈である。

ところで Hill (1964, p. 165) は，彼自身が10人のインフォーマントを使って調べた結果に基づいて次のように反論している。Hill によれば，彼の10人のインフォーマントのうち8人までが（4.71 b）の文をごく普通の文音調で読んだというのである。残りの2人はこの文を，

(4.73) Furiously sleep ideas/green/colorless.

というように三つに区切って読んだばかりでなく，この文は modern poetry のようであるという感想を付け加えたという。従ってこの文の音調に関して Chomsky が指摘していたことは間違っていたというのが，Hill の Chomsky に対する反論の主旨である。この議論の中で我々にとって最も興味深く思われることは，たとえどんな形にせよ文の句構造が把握できれば，その文は適切な文音調で読むことが出来るという点で，両者の見解が全く一致しているということである。Chomsky は（4.71 b）の文をどんな形の句構造も形成することが出来ない例としてあげていたのであるが，Hill のインフォーマントたちはこの文を何らかの形で理解し，その句構造を分析することも出来たわけである。彼らが把握した句構造は，(4.73)の区切り方からもある程度知ることが出来るように，それは恐らく，Furiously sleep ideas の部分が NP と見做され，green colorless の部分が VP と見做されるというようなものであ

っただろうと想像される。そしてそのような句構造の把握は，彼らの言語知識だけではなく，豊かな想像力も働かせてなされている筈であるから，(4.71) で用いられている五つの単語をどんな形に並べ換えても，Chomsky が意図したような句構造をもたない語の羅列の例を作ることは出来ないかも知れない。

4. 呼気群

言語の過程的構造にとって欠く事の出来ない句切りないし区切りという要素は，呼気群 (breath-group) という観点からも考察する必要があると思われる。英語の breath-group に相当する用語として現在主として二種類が使われている。「気息群」と「呼気段落」の二種類であるが，我々は「気息」という用語は aspiration を表わすものとして用い，また「段落」は文章論の用語として用いるために，ここではその何れも利用することが出来ない。従って我々はこれら二つの用語のいわば混交のような「呼気群」という用語を使うことにしたのである。句切りという言語的要素を呼気群との関連において考察するということは，我々の言語化の過程における発音または発声 (phonation) の生理学的側面に考慮を払うということに外ならない。我々の言語能力は心的なものであり，それは比喩的に心的器官 (mental organ) と呼ばれることもあるが，言語音の実際の発音は，本来的には消化器官であり呼吸器官であるところの身体的器官のいわば二次的な機能によってなされるものである。従って言語研究においてこの「発音器官」の仕組みや運動に考慮を払うのは当然のことである。

第一章の第三節で我々は，Lieberman (1967, p. 41) や Lenneberg (1967, p. 279) などが，幼児の泣き声に既に文音調の原形を見ているということに触れた。Lieberman やLenneberg によれば，幼児の泣き声も当然のことながら呼気群に区切られていて，そのような区切りはやがて言語単位としての句とか文とかを区切るために用いられるようになる。しかもそのような場合初期の呼気群と後の文音調とは発達の上で全く連続しているという。そしてこのことは子音や母音などの分節的要素の発達がいわゆる喃語期と，その後の言語音を発音するようになる時期との間には連続性が見られないのと対照的であるということも指摘されていた。

我々の呼吸は，血液の中に酸素を送り二酸化炭素を取り出すという純生理的な機能をもつものであろうが，我々の言語の発音もこの呼吸に負っていることは言うまでもない。厳密に言えば我々の発音は呼吸作用 (respiration) の呼気 (expiration) によってなされるわけである。吸気 (inspiration) によって調音される言語音が使われている例も報告されてはいるが，これは全く例外的なものと見做してよいと思われる。さて成人の呼吸の回数は普通一分間に16回から18回ぐらいで，呼気のほうが吸気よりやや長いと言われるから，一回の呼気の長さは2秒ないし3秒と考えてよいようである。従って我々の呼気群の長さは普通の場合3秒を

越えない程度であることになる。Nishihara-Nasu (1975) の公刊された資料によれば，次のような日本語および英語の文例を発音するに要する時間の長さは括弧内に示すようなものである。(単位は秒である。)

(4.74)

a. 僕にきまっているじゃないか。(1.3)
b. じゃひとつどちらが強いかためしてみよう。(1.7)
c. それじゃ何でためそうか。(1.5)
d. あすこから旅人が来るぞ。(1.3)

(4.75)

a. I am sure I am the stronger. (1.3)
b. Well, let's try to prove who is the stronger. (2.6)
c. What shall we do, then? (1.0)
d. There comes a traveller. (1.0)

Nishihara-Nasu の資料では時間の長さは特に数値では示されていないので，オシログラフ (oscillograph) によって記録された資料の我々の読み方には不正確な点があるかも知れないが，こういう資料は我々が呼気群の時間の長さを考える場合の重要な目安となるものである。

しかし我々の言語化の過程における呼気群の時間の長さとか，それによって区切られる構成要素の範囲とかは，呼吸という純粋に生理的要因だけで決定されるのではない。それはむしろ基本的には言語的に決定されるものと考えるべきであろう。Jones (1960[9], §1002) は呼気群について次のように述べているが，これは重要な指摘である。

(4.76) "Pauses are continually being made in speaking. They are chiefly made (1) for the purpose of taking breath, (2) for the purpose of making the meaning of the words clearer."

つまり我々が長い文を呼気群に区切って発音するのは，単に息を継ぐという生理的理由によるのではなく，それは意味を明確にするという目的ももっているわけである。例えば，

(4.77) I did not go because it was hot.

という文は，「暑かったから行かなかった」という意味にも「暑かったから行ったのではない」という意味にもなり得る。このような場合，我々の意図する意味が前者のようなものであれば，我々はこの文を二つの呼気群に分けて発音しようとするであろうし，もし後者の意

味であれば，一息で発音しようとするだろうと思われる。後者の場合，文末の音調は昇調（音声的により正確に言えば降・昇調）になる筈である。なおこの呼気群という発音上の区切りは，Hockett（1955, p. 44；1958, p. 38）の大分節（macrosegment）や Chomsky-Halle（1968, p. 9）の音韻論的句（phonological phrase），さらに Halliday（1967, p. 12；1970, p. 3）のいう tone-group や Crystal（1969, § 5. 4；1975, p. 16）の tone-unit などにほぼ相当するものである。また橋本（1959, pp. 161-227）や服部（1960, pp. 415-427）などのいう文節という区切りとの関連性を考慮に入れることも，この呼気群に関する議論にとって有益であろうと思われる。しかしこのように異なる用語の背景には，異なる理論の枠組みと接近法があるのであるから，我々はそれらの用語の間の異同によりは，むしろそれぞれの用語と呼気群との関連性に注目しなければならないであろう。

この呼気群の時間の長さや，それによって区切られる構成要素が決定されるためには種々の要因が関与すると考えられるが，呼気群は息を継ぐという目的の外に意味を明確にするという目的ももつものであるから，それは統語論的・意味論的区切りと一致することが最も自然である筈である。次の（4. 78）は名演説として評判の高いケネディーの大統領就任演説の結びの部分である。呼気群の境界を斜線で示す。

(4. 78) Finally, whether you are/citizens of America/or citizens of the world, /ask of us here/the same high standards/of strength and sacrifice/which we ask of you. /With a good conscience/our only sure reward, /with history the final judge of our deeds, /let us go forth to lead the land we love, /asking His blessing/and His help, but knowing that here on earth/God's work/must truly be our own. /

このようにこの演説では，呼気群の境界と統語論的・意味論的境界とほぼ一致している。この就任演説全体の所要時間は13分30秒で，それが全体として凡そ276個の呼気群に区切られているから，機械的に呼気群の時間の長さの平均を算出すれば2. 9秒となる。これは典型的な演説体（oratorical style）であるから，一つ一つの呼気群が自然談話の場合よりやや長いものになっている。所々聴衆の拍手のためにポーズが長くなっている個所があることも考慮に入れなければならない。そしてポーズの認定が難しい個所もあるが，それはこの種の調査には色々な困難が伴うということを意味するのであって，ポーズの認定が困難であるために構造把握や意味解釈に支障を来すということでは決してない。ところで大石（1971）の日本語についての同じような調査によれば，所要時間が7分53秒の或る講演に305のポーズが認められたという。この場合の呼気群の時間の長さは約1. 5秒であったことになる。

自然談話の場合は，呼気群によって区切られる構成要素には様々な種類があるだろうということは容易に予想できるが，Hockett（1958, p. 167）は I'm going outside. という文における outside の out と side の両方がそれぞれ大分節（macrosegment）を形成するという

例をあげている。この会話の例は実際に話されていたのを彼が直接聞いたものであるという。

(4.79)

A : Where're you going?
B : Out.
A : Out where?
B : Side.

この場合 out と side は outside という語の構成要素であるから，語より小さい要素が呼気群を形成していることになる。対話ないし会話の場合は，話者と聴者が役割りを交替するわけであるが，そのために色々な種類の呼気群が形成されることになる。

(4.80)

a. 'He can't send you back—' 'I don't want to go back!' he broke in, 'I want a new field.'
——H. James, *Turn of the Screw.*
b. 'I will obey the church—' 'You will?' '—Provided it does not command anything impossible.'
——B. Shaw, *Saint Joan.*
c. 'Did she see anything in the boy—?' 'That wasn't right? She never told me.'
d. 'Surely you don't accuse him—' 'Of carrying on an intercourse that he conceals from me?'
——H. James, *The Turn of the Screw.*

この (4.80) の (a) では，最初の文が完結する前に相手の人が口をはさんだ (broke in) ために，内容的には未完結の呼気群が生じたものである。(b) の場合は I will obey the church provided... と続くべきものが，別の人の発言によって中断されたものである。(c) と (d) の例は，最初の話者が言い始めた文を途中で別の人が取って代わって完結させているものである。この (4.80) の例は何れも小説や戯曲などの文学作品から抜き出したものであるが，日常的にも話者と聴者の役割りの交替によって文が中断したり別の人に引き継がれたりするのは，我々がよく経験することである。

第　五　章

文　音　調

1. 文と発話行為

我々の言語の過程において，文音調はどのような役割りを果たしているかを考察するのが本章の目的である。そもそも我々の言語行為というものは，社会集団の成員が協力しあうために営まれるものである。旧約聖書のバベルの塔の物語も，言語が協力し合うための不可欠の手段であることを示しているように思われる。

(5.1) "And the Lord said, Behold, the people is one, and they have all one language ; and this they begin to do : and now nothing will be restrained from them, which they have imagined to do. Go to, let us go down, and there confound their language, that they may not understand one another's speech." *Genesis*, 11 : 6-7.

つまり神は，人々が協力し合って塔を建てるという企てを遂行することが出来ないようにするために，彼らの言語を混乱（babelize）させたというように解釈できるのである。歴史上支配者たちが人民の言語を統一（debabelize）するために心血を注いだということも，言語が協力のための不可欠の手段であることを示すものであろう。言語のこのような特性は，多くの言語学者たちによって明確に認識されている。次の Bloch-Trager (1942, p. 5) の言語の定義などはその代表的なものである。

(5.2) "A language is a system of arbitrary vocal symbols by means of which a social group cooperates."

言語を伝達の手段と考える場合は，その伝達の目的は言語共同体の成員が協力し合うことにあると言えよう。

人間の言語行為を自己表現 (self-expression) と見ることも可能であり，言語のそのような側面だけが強調されることもある。また言語を思考の道具 (instrument of thought) と見る立場もある。実際に言語と思考の関係を軽視するような言語研究というものは考え難い。言語能力と思考能力を区別することは容易ではない。思考は声なき言語 (silent talk) であるとか，言語は精神を映す鏡 (mirror of mind) であると言われたりするように，我々の思考作

用は言語を土台として行なわれ，我々の言語活動はその心的（または精神的）側面において，思考を土台としていると考えることが出来る。このような意味において人間は考える葦と呼ばれるのであろうが，だからと言って思考の道具というような言語像を描く必要はない筈である。そのような言語像に対しては，それは言語を「独白の言語」としか見ていないという批判もあるが，我々の言語は，本来的にも日常的にも，協力し合うために話されるのであり，それはむしろ「対話の言語」と呼ばれるにふさわしいものである。我々は決して独白（monologue）としての言語を考察の対象から外してしまうことは出来ないが，言語は第一義的には対話（dialogue）であると考えるべきであろう。この点に関しても我々は Gardiner (1951², p. 21) の次のような見解に負う所が多い。

(5. 3) "If language has proved necessary for thought of an abstract kind and for intellectual self-expression, that function is secondary and a by-product, so to speak ; surely the primary function of speech was to facilitate co-operation in such matters as could not be indicated by mere pointing or gesticulation."

このように我々の発話行為は，話し手と話し相手の間の対話ないし会話として成り立っている。日常生活の中で我々は，挨拶を交わすことによって人間関係に潤いを与え，自分が見聞したことや経験したことを人に伝えて共有の知識をふやそうとする。また人に質問をして教示を仰いだり，依頼したり命令したりすることによって人の尽力を得ようとしたりする。感嘆の表現によって自分の感情を表出したり，人の注意を喚起したりする。時には祈願することによって神の助けを求めることもあれば，神の罰を免れようとすることもあるのであろう。このような発話行為の種類は，小説などでは，話法（narration）でいう伝達部のような形で示され，戯曲ではよく舞台指示（stage direction）として示される。ただ発話行為の種類はすべて顕現的に指示されなければならないということはない。例えば，

(5. 4) How are you ?

という発話が挨拶であるのか質問であるのか分らないというような事はきわめて稀である。

ところでこのような発話行為と統語論的文との関係はどのように考えればよいのであろうか。我々の文法書は，通常，文をその統語論的・意味論的類似性に基づいて次のように分類する。

(5. 5)

a. 平叙文 (Declarative Sentence)
b. 疑問文 (Interrogative Sentence)
c. 命令文 (Imperative Sentence)

d. 感嘆文（Exclamatory Sentence）

e. 願望文（Optative Sentence）

この分類に従えば，平叙文の統語構造をもつ文を話者が何らかの陳述をするために用いるものが平叙文であり，疑問文の統語構造をもつ文が質問をする発話として用いられる場合が疑問文であることになる。命令文の場合も同様に，統語論的に命令文と認定される文が命令するとか依頼するとかという発話として用いられるものが命令文であるというように我々は理解している筈である。感嘆文や願望文の場合も同様である。

このような文の分類は，統語論的文の種類と我々の発話行為の種類が一致する場合は特に問題はないように思われる。しかし，

(5.6) The earth is round?

という場合などは平叙文の統語構造をもつ文が，質問をする行為として発話されたものである。この場合，疑問符［？］は統語論的・意味論的には Katz-Postal (1964, p. 79) のいう疑問形態素を表わすものと考えることが出来る。あるいは遂行分析的に I ask you というように書き表わすことの出来る高位節に相当するものと考えることも出来るわけであるが，それは音声的には昇調の文音調として実現されるものである。こういう場合，我々はこの (5.6) の文を疑問文と見做すべきであろうか。もしこれを疑問文として分類するとすれば，次の (5.7) のような文は平叙文として分類されることになるのではないかと思われる。

(5.7) Can the leopard change his spots?

この文の聖書 (*Jeremiah*, 13 : 23) における意味は「悪に慣れた人間が善を行なうのは豹がその斑点を変えるほどに難しい」というもので，これは修辞疑問の例としてよく引き合いに出されるものである。修辞疑問は統語論的には疑問文であるが，発話行為としては質問ではなく陳述であるということになり，(5.5) のような文の種類に従って分類することが難しくなるわけである。また，

(5.8) Would you give me a drink, please?

という文は，please という語が用いられていることからも分かるように，質問ではなく依頼する発話行為として実現されたものであるから，これも統語論的文の種類と発話行為の種類が一致しない例である。Sadock (1970, 1971) の穿った用語によれば，(5.7) のような文は queclarative の例で，(5.8) の文は whimperative の例であることになる。これらの Sadock の用語は，疑問文でも陳述をする行為の遂行のために用いられる場合があるという

ようなことを端的に表わしている。

統語論における文の意味というものは，かつて Fries (1955) などによって論じられたように，語彙的意味 (lexical meaning) と構造的意味 (structural meaning) の両方によって成立すると考えられる。Katz-Postal (1964, p. 39) にも，この Fries の考え方と軌を一にする次の (5. 9) のような文の意味の定義が見られる。

(5. 9) "The meaning of a sentence is a function not only of the meanings of its lexical items but also of the grammatical relations between them."

文の意味に関するこのような規定のし方は全く妥当なものと思われるが，我々がいま問題にしているのは，このようにしてその意味が形成される文は，様々な発話行為を実現するものとして用いられるという点である。

(5. 10)

a. 違反者は厳罰に処せられます。

b. 違反者は厳罰に処せられました。

という二つの文は，統語論的には共に平叙文であり，その意味も時制の違いを除けば同じである。しかしこの (5. 10) の場合 (b) は既に起った事について報告をする文であるが，(a) はこれらから起こり得る事について警告をする文である。我々の言語生活の中では，このような警告と報告の違いなどは，普通の場合，支障なく理解されるものである。実際に我々はもっと微妙な違いでもきわめて自然に理解することが出来るのが普通である。そしてそれは Fries (1955) によれば彼のいう社会・文化的意味 (socio-cultural meaning) の違いとして理解されることになるであろう。それはまた Grice (1967) や Gordon-Lakoff (1971) によれば，彼らのいう会話の原理に従って理解されることになるであろう。

以上のことから，我々のいう言語の過程的構造は，文を構成する要素だけでなく，発話行為の種類を示す要素も含むものであることは明らかであろう。この発話行為の種類を合図する要素がすべて言語化され，音声的にも実現されるとは限らないということは，言語の他の要素の場合と同じである。文を構成している語の品詞が形態論的に顕現的に示されるとは限らないように，発話行為の種類を表わす要素も音声的に実現されるとは限らないのである。しかし，文音調が発話行為の種類を表わす要素として我々の言語化の過程に参与するということは疑いのない事実である。先に見た (5. 6) は昇調の文音調が質問をするという発話行為を表わしている例であったわけである。反対に，もしその (5. 6) の文が降調の文音調で発音されれば，それは最早質問ではなく，陳述をする発話行為として受け取られる筈である。このことから我々は，(5. 6) の例のように文の種類と発話行為の種類が一致しない場合は，

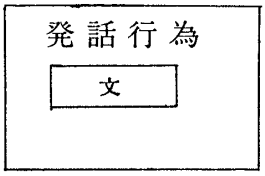
音調が構文に優先することが分かる。これは，Gardiner（1951², p. 204）の説明によれば，

(5. 11) "A fact of great interest is the decisive character of elocutional form. When locutinal and elocutional form are in conflict, it is the latter which dictates how a sentence is to be taken."

ということである。この中の elocutional form というのは音調形式のこでであり，locutional form は統語形式を指すと考えて差し支えないものである。

一般に文と発話行為の関係は，

(5. 12)



というように示すことの出来るものであり，我々は文の内容が聞き取れない場合でも，音調だけで発話行為の種類を区別することが出来る場合が多いわけである。発話行為の種類は，次の（5. 13）の諸例のように遂行分析における高位節の形式で表わされる場合や（5. 14）のように命令法や法助動詞で示される場合，そして（5. 15）のように音調で示される場合などがあることになる。

(5. 13) a. I promise.
b. I welcome you.
c. I advise you to go home.

(5. 14) a. Shut it, do. (=I order you to shut it.)
b. Shut it, if you like. (=I permit you to shut it.)
c. Shut it if you dare. (=I dare you to shut it.)
d. You may shut it. (=I give permission to your shutting it.)
e. You must shut it. (=I order you to shut it.)
f. You ought to shut it. (=I advise you to shut it.)

(5. 15) a. It's going to charge ! (a warning)
b. It's going to charge ? (a question)
c. It's going to charge!? (a protest)

これらの例は Austin（1962）によって詳しく論じられているものである。(5. 13) は彼のいう明示的遂行文（explicit performative）の例であり，(5. 14) の諸例はそれぞれ括弧の中の遂行文と類似した発話行為として用いられる文である。(5. 15) の三つの文は音調の違いに

よってそれぞれ警告，質問，抗議する発話行為となる例である。この（5.15）の (a) の [！] は降調の音調を表わすもので，(b) の [？] は昇調の音調を表わすということは明らかであるが，(c) の [!?] が実際にどういう形の音調になるのか，我々のように英語のネイティヴ・スピーカーでない者には分かり難い。ネイティヴ・スピーカーの発音のし方も必ずしも一様ではないが，これは [!?] という符号の使い方にも示されているように，降調と昇調の複合したものであろうと考えられる。しかしそれは第四章の（4.77）の文に伴うと我々が考えた降・昇調とは異なるものである。そしてこのような場合には文末音調だけが関与するのではなく，文頭の音調や文強勢などにも違いが見られることは言うまでもない。警告とか質問，抗議などという発話行為の場合は，次の（5.16）のような文がごく普通の陳述として発話される場合に比べて，文全体にかかる音調がやや高い筈である。

(5.16) It's going to rain.

しかし（5.15）の例に見られる音調の機能は，我々のいう言語の過程的構造において，音調がどのような役割を果たすものであるかを端的に示している。

2. 文音調の基本形

文音調は，「文の受け取り方」(how a sentence is to be taken) を示す音声的要素として，言語の構造化の過程に参与すると我々は考えるものであるが，その文音調に降調と昇調の二種類があることは広く認められている。第一章で見た有坂（1959, p.128）の見解によれば，降調は断言文に伴う音調であり，昇調は疑問文に伴う音調である。疑問文の場合は答えを要請する感情の緊張のために文末の音調は昇調となり，断言文の場合はそのような緊張はないから降調になる。文音調と話者の情意との関係は全く自然的なものであるというのであるが，実際には疑問文の音調が常に昇調になるとは限らないし，昇調の文音調は質問をする発話行為のほかにも種々の発話行為を表わすことが出来る。

Palmer（1933）などが英語の音調を六つの音調型（tone-pattern）に分類しているのに対して，Armstrong-Ward（1931[2]）は二つの基本的な音調の型を認める立場を取っている。Armstrong-Ward のこの二音調説（two-tune theory）は，Jones（1932[3]）の英語音声学の中の音調論の枠組みとなったものであり，我が国でも青木（1933）の朗読法などに採り入れられている。

(5.17) "English intonation can be reduced to two tunes, with variations of these due to special circumstances." (p.4)

というのが Armstrong-Ward の基本的な考え方であり，二つの基本形はそれぞれ Tune I, Tune II とよばれているのであるが，この二音調説が Lieberman (1967. ch. 2) の生理学的・音響学的研究によって新しい観点から再評価されるようになっていることは注目すべきである。Lieberman によれば Tune I と呼ばれている降調の文音調は，一つの呼気群 (breath-group) の終り部分では，声門下の空気圧 (subglottal air pressure) が下がるために基本振動数 (fundamental frequency) も減少するということを意味する。これに対して，Tune II と呼ばれている昇調の文音調の場合は，声門下の空気圧は降調の場合と同じく低下するが，喉頭の筋肉の緊張が高まるために基本振動数が増加する。

(5.18) "The marked breath-group [+BG] is differentiated from the normal, unmarked breath-group [−BG] at the articulatory level by the presence of an increase in the tension of the laryngeal muscles at only one point in the breath-group, its end where the subglottal air pressure falls." (p. 31)

というように Lieberman は，非常に複雑な実験によって得られた結果に基づいて説明してているが，これは全く新しい観点から見た二音調説であると言えよう。彼のいう [+BG] というのは，末尾の音調が昇調になる呼気群のことであり，[−BG] は末尾の音調が降調になる呼気群のことである。この [+BG], [−BG] という場合のプラスの記号は，その呼気群が有標 (marked) であることを示し，マイナスは無標 (unmarked) であることを示すものであるが，この区別は二つの末尾音調の調音上の違いを反映していると思われる。

このように Lieberman の二音調説は呼気群と音調とを統合するものであるが，我々は，呼気群と音調とは別々の要素によって形成されるものと考えているのであるから，この点に関する限り我々は Lieberman と立場を異にしている。しかし，文音調の基本形として降調と昇調の二種類を認めるという点では，我々は Armstrong-Ward や Lieberman と全く同じ立場に立つものである。我が国では特によく知られている Palmer (1933) の次のような六つの音調型も我々の立場からすれば，降調と昇調の Armstrong-Ward のいう変異形 (variations) として分類することが出来るように思われる。

(5.19)

a.	The "Cascade" Pattern	降調
b.	The "Dive" Pattern	
c.	The "Ski-Jump" Pattern	
d.	The "Wave" Pattern	昇調
e.	The "Snake" Pattern	
f.	The "Swan" Pattern	

Palmer の分類では，(a) と (c) の文末音調は共に低・降調 (low-falling) であり，この二つの

型は文末音調によってではなく，文頭の音調で区別されていることになる。(b) は高・降調 (high-falling) の文末音調によって (a), (c) とは異なる型として分類されているのであるが，これらの三つの型は降調という共通要素をもっていることになる。同様に (d), (e), (f) もそれぞれ高・昇調 (high-rising), 昇・降・昇調 (rising-falling-rising), 低・昇 (low-rising) などの音調によって区別される型であるが，これらの三つの型は昇調という要素を共有していることになる。従って Palmer の六つの音調型は，その末尾音調の特徴によって二つの基本形にまとめることが出来るわけである。

ところでこのような音調の意味・機能については，通常，降調は発話の完結 (finality) を合図するもので，昇調は未完結 (nonfinality) を合図すると言われる。降調の文音調によって発話の完結を合図するということは，話者と聴者の役割りの交替が支障なく行なわれるために必要であろうと思われる。それは無線交信において「どうぞ」("over") という合図のことばが使われるのに似ている。また昇調の文音調は発話が未完結であることを合図するという場合それは，Pike (1945, p. 51) が指摘しているように，話者または聴者による補足 (supplementation) が必要であるということを意味すると考えられる。例えば，

(5. 20) a. I don't lend my books to anybody.
b. When they arrived at the station, they found that the train had gone.
c. Did I offend your brother?

などにおける (a) の文が「私は自分の本を誰にでも貸すのではない」という意味を表わす場合は昇調の音調を伴って発音されるのが普通であろうが，そういう場合の音調はその発話が未完結であるということを合図すると思われる。話者によって何らかの補足がなされることを聴者は期待する筈である。そのような補足的意味が言語的に表現されない場合でも，聴者は「私の場合本は人を見て貸すことにしている」といったような意味をいわば「含み」として受け取るだろうと思われる。次の (b) の文では従属節の部分が昇調の音調で発音されるわけであるが，こういう場合の音調は文字通り発話が未完結であることを表わし，聴者はそれによってその発話が同じ話者によってさらに続けられるものであることを知るのである。(c) の文も昇調で発音されるのが普通であるが，これは聴者による補足を要請するものである。ただ次の (5. 21) のような特殊疑問文は，降調で発音すれば事務的な尋ね方になるというようなことを，完結・未完結の違いとして説明することは不自然であるように思われる。

(5. 21) Where did you come from?

このように文音調の二つの基本形の意味・機能を完結・未完結という観点から説明しようとする試みにに対して，Halliday (1970, p. 23) はこれを両極性 (polarity) という見地から説明しようとしている。

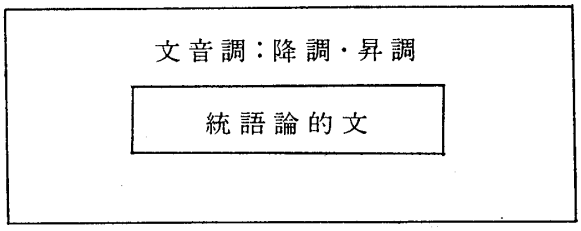
(5.22) "Basically, a falling contour means certainty and a rising contour means uncertainty. This is true in many languages, though by no means all. In English, it takes this particular form : a falling contour means certainty with regard to yes or no. We go down when we know whether something is positive or negative, and we go up when we do not know. In other words we go down when we know the *polarity* of what we are saying."

Halliday は音調の種類としては五つの型を認める立場を取っているが，英語音調の基本的要素（basic elements）と彼が考えている降調と昇調の意味を，きわめて消極的にではあるが，この（5.22）のように説明しているのである。英語の二つの基本音調の意味をこのように規定すれば，同じ疑問文でも一般疑問は昇調で発音され，特殊疑問は降調で発音されるのが普通であることなどはうまく説明できる。しかしこれも（5.21）のような場合には適用できないことになる。

3.　話者中心的音調と聴者志向的音調

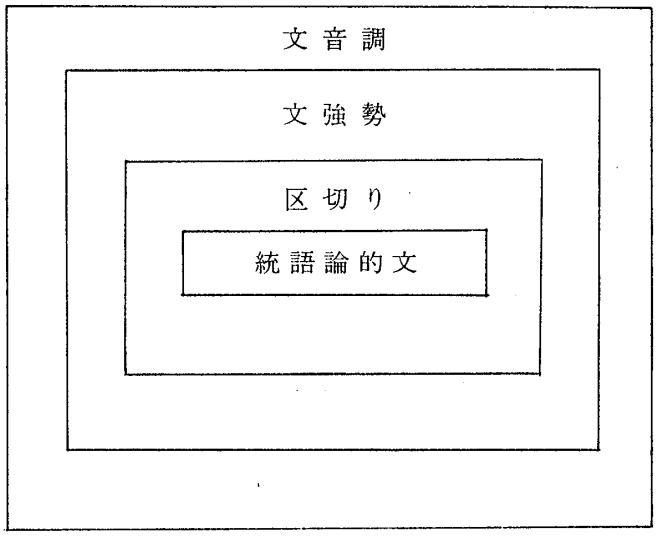
我々の言語化の過程において文音調は発話行為の種類を合図する役割りを果たしていると我々は考えているのであるが，本章の第一節で見たような統語論的文と発話行為の関係に即して文と音調との関係を示せば，次のようになるであろう。

(5.23)



文と音調とのこのような関係によって，同一の統語論的文が降調の音調を伴って陳述する発話行為として用いられたり，昇調の音調を伴って質問をする発話行為として実現されたりするわけである。我々は文音調を文全体にかかる音調曲線によって形成される型として分類するという立場を取らずに，文音調を文末音調として捉え，それが文強勢や区切りと相俟って英語の超分節的構造を形成すると考えたのである。ここで統語論的文と我々のいう音調全体との関係をまとめて図示するとすれば，次の（5.24）のようになるであろう。繰り返して述べるまでもなく，超分節的要素としての区切りは文の句構造に基づいて決定され，文強勢は語彙項目の種類や意味の比重の置き方に従って付与され，文音調は発話行為の種類との関連において選択されるわけである。

(5.24)



我々の発話行為には様々な種類があることは言うまでもないが，それは陳述とか通知する発話行為のように比較的に話者中心的な性格が強いものと，質問とか依頼する場合のように聴者志向的性格が強いものと二種類に大別することが出来るように思われる。実際に発話行為の種類をすべて列挙して分類するということは非常に困難な作業であろうと思われるが，その問題について考えることは別の機会に譲るとして，このような二種類の発話行為との関連において，我々は降調と昇調の文音調をそれぞれ次の（5.25）の(a)，(b)のように規定することが出来る。

(5.25) a. 話者中心的音調（speaker-based tone）
b. 聴者志向的音調（hearer-oriented tone）

この(a)の話者中心的音調は，話しの相手に対していわば閉じられた音調であり，(b)の聴者志向的音調は開かれた音調である。日本語の「抑揚」という用語に即して言えば(a)は抑調であり，(b)は揚調である。そして宮地（1971, p. 148）や大石（1971, p. 382）のいう「相手への配慮または配意」が(a)には欠けていて，(b)の場合はそれがあることを特徴としていると言えるであろう。

降調と昇調の文音調を（5.25）のように規定する立場に立てば，前節で見た，

(5.26) Where did you come from？(=5.21)

というような特殊疑問が，なぜ降調で発音すれば事務的な尋ね方になり，昇調で発音すれば親切な尋ね方になるのかということが理解し易いと思われる。ちなみに Schubiger（1958, p. 59）は特殊疑問の音調に関して，Sweet のネイティヴ・スピーカーとしての観察を参照しながら次のように述べている。

(5.27) "The rise is more frequent now than it used to be. Sweet wrote in 1898 (§ 1936): 'The brevity and imperativeness of special interrogative sentences such as 〔*what is his name*?〕[↘] is often avoided by substituting a longer general interrogative form: 〔*can you tell me what his name is*?〕[↗]' Today one would just say: 〔*what is his name*?〕[↗]"

Sweet や Schubiger によれば，What is his name？というような特殊疑問も，命令口調とか切り口上を避けるために昇調で発音される傾向が見られるというのであるが，そのような場合の昇調は，Can you tell me what his name is？ という一般疑問の中で Can you tell me と表現されている発話行為を表わしていると考えることが出来る。「教えてくれないか」といったような聴者志向性の高い種類の発話行為が昇調の音調として実現されたと考えられるのである。

ところで我々は通常一般疑問は昇調で発音され，特殊疑問は降調で発音されるというように理解しているわけであるが，このより一般的な原則はどういうように説明されるのであろうか。まず考えられることは，一般疑問のほうが特殊疑問に比べて聴者志向性が高いということである。Halliday の表現を借りて言えば yes か no かという両極性に関して不確かである場合のほうが聴者志向性が高いということになる。

(5.28) a. Do you have a pen name?
b. What is your pen name?

というような二種類の疑問文を比較すれば，両者の間には教示を抑ぐという聴者志向性の度合いの違いが感じられる。その度合いの違いは，次のような文脈で考えればなお一層はっきりと感じられる筈である。

(5.29) a. Do you have a pen name?
b. Yes, believe it or not.
c. What is it?
d. JR.

つまり聴者志向性の度合いの違いによって一般疑問の音調は昇調となり，特殊疑問は降調となると考えられるのである。

一方 Jones (1960[9], § 1040) は，Coleman の分析（岩崎，1957, p. 23 参照）に言及しつつ，一般疑問の音調について次のように述べている。

(5.30) "Questions requiring the answer 'yes' or 'no' have this intonation [↗] because they imply the continuation 'or not'."

一般疑問はその後に 'or not' が続くというような「含み」をもっているから，その音調は昇調になると Jones は考えていたようである。つまり yes か no かという両極性に関して質問をしているという話者の心理が昇調の音調で表わされると Jones が考えていたとすれば，それは我々の立場と基本的に一致するものである。しかし Coleman はこのような音調上の特徴をもつ一般疑問を，選択疑問の第二要素が省略されたものと見做していたのである。例えば，

(5.31) Will you go to Paris, , — or Rome ?

というような選択疑問の第一要素の末尾音調は昇調になり，第二要素の音調は降調になるのが普通であるが，その第二要素が省略されれば，昇調を伴った第一要素が残るわけである。これが Coleman の考えていた一般疑問の音調の「真の説明」である。

統語論的疑問文は質問とか依頼とかという聴者志向的性格の強い発話行為を実現するものとして用いられるのであるから，これが聴者志向的音調を伴って発音されるのはきわめて当然のことであって，一般疑問の音調を選択疑問との関連において説明する必要はない筈である。実際に選択疑問の第一要素は殆どすべての場合昇調を伴うと考えられているのであるが，一般疑問の音調は昇調になるとは限らない。Fries (1964) の調査では，2561 例の yes-no questions のうち1580例 (61.7%) までが降調で発音されており，981例 (38.3%) が昇調で発音されているに過ぎない。従って，一般疑問の昇調と選択疑問の昇調とを同一視することはきわめて疑問であることになる。それにも拘らず Coleman の追従者は意外に多い。Palmer (1968, p. 19) も一般疑問の昇調は or not という語句に取って代わるものと考えており，そのような場合の昇調を彼のいう空語 (alogism) の一種と見做している。Palmer (1968) の初版は 1917 年に刊行されたものであるが，最近では Chafe (1970, ch. 19) や Langacker (1970) が Coleman と基本的に同じ分析をしている。

次の (5.32) のような統語論的命令文は通常降調で発音されれば命令 (command) を表わすのに対して，昇調で発音される場合は依頼 (request) を表わすというように説明される。

(5.32) Ring me up at eleven.

我々の命令行為というものは，相手の意向を確かめることなく話者がいわば一方的に遂行するものであるから，話者中心的な音調を伴うと考えられる。これに対して依頼する行為は，相手の意向を確かめるという要素を多分にもっているために，聴者志向的音調を取ると考えることが出来る。また次の (5.33) のような疑問文は，降調で発音される場合は括弧の中に示したような意味になると言われるが，これも降調の話者中心的性格によるものと考えら

れる。

(5.33) a. Have you been to the Zoo?[↘](Tell me if you have been to the Zoo.)
b. Do you understand it now?[↘](=You ought to understand it now.)

次の (5.34) の (a) は，会ったときの挨拶としては降調で発音され，別れるときの挨拶としては昇調で発音されるというよく知られた例で，(b)は Please excuse me. という意味では降調で発音され，I didn't hear what you said. という意味で用いられる場合は昇調になるという例である。このような場合も話者中心性・聴者志向性という区別との関連において考えれば理解し易いと思われる。

(5.34) a. Good morning.
d. I beg your pardon.

同様に，

(5.35) a. Thank you, dear.↗
b. Thank you, sir.↘

などにおける昇調と降調もれれぞれ聴者志向性と話者中心性を表わしていると思われる。呼掛けの語句に伴う昇調などは聴者志向的音調の典型的なものと考えられる。ただこのような場合，我々は音調という言語的要素を話者の心理や現実の状況と密着したものに限定してはならないであろう。言語的要素というものは一旦型として確立されれば様々な意味・用法が生じるものである。

参 考 文 献

I

Abe, Isamu. (1955). "Intonation Patterns of English and Japanese," *Word*, 11.

Abe, Isamu. (1957). "On Japanese Intonation. An Experiment," *Lingua*, 7.

Abe, Isamu. (1966). "Physical and Linguistic Aspects of Some English Rising Intonations—A Tentative Study," *Studies in English Literature* (English Number).

Akin, Johnnye, (1966). "Intonation Contours in American English," 『音声の研究』 12.

Akmajian, Adrian and Ray S. Jackendoff. (1977). "Coreferentiality and Stress," *Linguistic Inquiry*, 1.

Armstrong, Lilias E. and Ida C. Ward. (1931²). *A Handbook of English Intonation*. Second Edition. Cambridge: W. Heffer & Sons.

Austin, J.L. (1962). *How to Do Things with Words*. Oxford University Press.

Baker, C.L. (1970). "Notes on the Description of English Questions: The Role of an Abstract Question Morpheme," *Foundations of Language*, 6.

Ballmer, Thomas T. (1976). "Macrostructures," in Teun A. van Dijk, ed., *Pragmatics of Language and Literature*. North-Holland Publishing Co.

Baum, P.F. (1961). *Chaucer's Verse*. Durham.

Beaver, Joseph C. (1969). "Contrastive Stress and Metered Verse," *Language and Style*, 2.

Beaver, Joseph C. (1971a). "Current Metrical Issues," *College English*, 33.

Beaver, Joseph C. (1971b). "The Rules of Stress in English Verse," *Language*, 47.

Beaver, Joseph C. (1973). "A Stress Problem in English Prosody," *Linguistics*, 95.

Berman, Arlene and Michael Szamosi. (1972). "Observations on Sentential Stress," *Language*, 48.

Bierwisch, Manfred. (1968). "Two Critical Problems in Accent Rules," *Journal of Linguistics*, 4.

Bliss, A.J. (1958). *The Metre of Beowulf*. Oxford: Basil Blackwell.

Bliss, A.J. (1962). *An Introduction to Old English Metre*. Oxford: Basil Blackwell.

Bloomfield, Leonard. (1933). *Language*. Henry Holt & Co.

Bolinger, Dwight L. (1949). "Intonation and Analysis," *Word*, 5.

Bolinger, Dwight L. (1951). "Intonation: Levels versus Configurations," *Word*, 7.

Bolinger, Dwight L. (1952). "Linear Modification," PMLA 67.

Bolinger, Dwight L. (1957). "English Stress: The Interpretation of Strata." 『音声の研究』 8.

Bolinger, Dwight L. (1958a). "Intonation and Grammar," *Language Learning*, 8.

Bolinger, Dwight L. (1958b). "A Theory of Pitch Accent in English," *Word*, 14.

Bolinger, Dwight L. (1961a). "Contrastive Accent and Contrastive Stress," *Language*, 37.

Bolinger, Dwight L. (1961b). "Ambiguities in Pitch Accent," *Word*, 17.

Bolinger, Dwight L. (1961c). *Generality, Gradience, and All-or-None*. Mouton & Co.

Bolinger, Dwight L. (1962). "Intonation as a Universal," Proceedings of the Ninth International Congress of Linguists, Boston, 1962. Mouton & Co.

Bolinger, Dwight L. (1968). "Judgments of Grammaticality," *Lingua*, 21.

Bolinger, Dwight L. (1972). "Accent is Predictable (If You're A Mind-Reader)," *Language*,. 48

Bolinger, Dwight L. and Louis J. Gerstman. (1957). "Disjuncture as a Cue to Constructs," *Word*, 13.

Borroff, Marie. (1967). *Sir Gawain and the Green Knight: A New Verse Translation*. Longmans.

Brame, Michael K. (1972). "The Segmental Cycle," in Michael K. Brame, ed., *Contributions to Generative Phonology*, University of Texas Press.

Brend, Ruth M., ed., (1975). *Studies in Tone and Intonation*. Basel: S. Karger.

Bresnan, Joan W. (1971). "Sentence Stress and Syntactic Transformations," *Language*, 47.

Bresnan, Joan W. (1972). "Stress and Syntax: A Reply," *Language*, 48.

Chafe, Wallace L. (1970). *Meaning and the Structure of Language*. University of Chicago Press.

Chatman, Seymour. (1964). *A Theory of Meter*. Mouton & Co.

Chomsky, Noam. (1955). "Semantic Considerations in Grammar," in Monograph Series on Languages and Linguistics, 8.

Chomsky, Noam. (1957). *Syntactic Structures*. Mouton & Co.

Chomsky, Noam. (1965). *Aspects of the Theory of Syntax*. M.I.T. Press.

Chomsky, Noam. (1966). *Cartesian Linguistics*. Harper & Row.

Chomsky, Noam. (1970). "Deep Structure, Surface Structure, and Semantic Interpretation," in Jakobson, Roman and Shigeo Kawamoto, eds., *Studies in General and Oriental Linguistics*. Tokyo: TEC Company.

Chomsky, Noam. (1975). *Reflections on Language*. Pantheon Books.

Chomsky, Noam, Morris Halle, and Fred Lukoff. (1956). "On Accent and Juncture in English," in M. Halle, H. Lunt, and H. MacLean, eds., *For Roman Jakobson*. Mouton & Co.

Chomsky, Noam and Morris Halle. (1968). *The Sound Pattern of English*. Harper & Row.

Classe, André. (1973). *The Rhythm of English Prose*. Folcroft Library Editions.

Coleman, H.O. (1914). "Intonation and Emphasis," *Miscellanea Phonetica* I, Association Phonetique Internationale.

Cowan, J.M. and B. Bloch. (1948). "An Experimental Study of Pause," *American Speech*, 23.

Creed, Robert P. (1966). "A New Approach to the Rhythm of *Beowulf*," PMLA 81.

Crystal, David. (1969). *Prosodic Systems and Intonation in English*. Cambridge University Press.

Crystal, David. (1975). *The English Tone of Voice*. London: Edward Arnold.

Crystal, David and Randolph Quirk. (1964). *Systems of Prosodic and Paralinguistic Features in English*. Mouton & Co.

Daneš, F. (1960). "Sentence Intonation from a Functional Point of View," *Word*, 16.

Daneš, F. (1967). "Order of Elements and Sentence Intonation," in *To Honor Roman Jakobson*, I. Mouton & Co.

Drew, Elizabeth. (1959). *Poetry: A Modern Guide to Its Understanding and Enjoyment*. New York: Dell Publishing Co.

Firbas, Jan. (1961). "On the Communicative Value of the Modern English Finite Verb," *Brno Studies in English*, Volume Three.

Firbas, Jan. (1969). "On the Prosodic Features of the Modern English Finite Verb-Object Combination as Means of Functional Sentence Perspective," *Brno Studies in English*, Volume Eight.

Freeman, Donald C. (1968). "On the Primes of Metrical Style," *Language and Style*, 1.

Freeman, Donald C. (1969). "Metrical Position Constituency and Generative Metrics," *Language and Style*, 2.

Fries, Charles C. (1945). *Teaching and Learning English as a Foreign Language*. University of Michigan Press.

Fries, Charles C. (1952). *The Structure of English*. Harcourt, Brace and Co.

Fries, Charles C. (1955). "Meaning and Linguistic Analysis, "*Language*, 30.

Fries, Charles C. (1964). "On the Intonation of 'Yes-No' Questions in English," in Abercrombie, David et al. eds., *In Honour of Daniel Jones*, Longmans.

Frye, Northrop. (1957). *Anatomy of Criticism: Four Essays*. Princeton University Press.

Gardiner, A.H. (1951²). *The Theory of Speech and Language*. Second Edition. Oxford University Press.

Gimson, A.C. (1962). *An Inronduction to the Pronunciation of English*. London: Edward Anrold.

Göes, A.N. (1974). *The Stress System of English*. Stockholm: Almqvist & Wiksell.

Gordon, David and George Lakoff. (1971). "Conversational Postulates," CLS, 7.

Green, Georgia M. (1973). "How to Get People to Do Things with Words," in Roger W. Shuy, ed., *New Directions in Linguistics*, Georgetown University Press.

Grice, H.P. (1967). *Logic and Conversation*.

Gross, Harvey, ed. (1966). *The Structure of Verse: Modern Essays on Prosody*. New York: Fawcett World Library.

Gross, Harvey. (1964). *Sound and Form in Modern Poetry*. Ann Arbor.

Gunter, Richard. (1963). "Elliptical Sentences in American English," *Lingua*, 12.

Gunter, Richard. (1966). "On the Placement of Accent in Dialogue: A Feature of Context Grammar," *Journal of Linguistics*, 2.

Halle, Morris. (1961). "On the Role of Simplicity in Linguistic Descriptions," in R. Jakobson, ed., *Sturcture of Language and Its Mathematical Aspects*. American Mathematical Society.

Halle, Morris. (1962). "Phonology in Generative Grammar," *Word*, 18.

Halle, Morris. (1964). "On the Bases of Phonology," in Fodor, J.A. and J.J. Katz, eds., *The Structure of Lanugage*, Prentice-Hall.

Halle, Morris. (1970a). "On Meter and Prosody," in Manfred Bierwisch and Karl E. Heidolph, eds., *Progress in Linguistics*, Mouton & Co.

Halle, Morris. (1970b). "What is Meter in Poetry?" 『言語の科学』 2.

Halle, Morris. (1970c). "A Survey of Modern English Accentuation," 『言語の科学』 2.

Halle, Morris. (1973). "Prolegomena to a Theory of Word Formation,," *Linguistic Inquiry*, 4.

Halle, Morris and Kenneth N. Stevens. (1964). "Speech Recognition: A Model and a Program for Research," in J.A. Fodor and J.J. Katz, eds., *The Structure of Language*, Prentice-Hall.

Halle, Morris and Samuel J. Keyser. (1966). "Chaucer and the Study of Prosody," *College English*, 28.

Halle, Morris and Samuel J. Keyser. (1971a). "Illustration and Defense of a Thoery of the Iambic Pentameter," *College English*, 33.

Halle, Morris and Samuel J. Keyser. (1971b). *English Stress: Its Form, Its Growth, and Its Role in Verse*. Harper & Row.

Halliday, M.A.K. (1966). "Intonation Systems in English," in A. MacIntosh and M.A.K. Halliday, eds., *Patterns of Language*, Longmans.

Halliday, M.A.K. (1967). *Intonation and Grammar in British English*. Mouton & Co.

Halliday, M.A.K. (1970). *A Course in Spoken English: Intonation*. Oxford University Press.

Halliday, M.A.K. and Ruqaiya Hasan. (1976). *Cohesion in English*. Longman Group Ltd.

Harrison, G.B., ed. (1948). *Shakespeare: Major Plays and the Sonnets*. Harcourt, Brace and Company.

Hascall, Dudley L. (1969). "Some Contributions to the Halle-Keyser Theory of Prosody," *College English*, 30.

Hetzron, Robert. (1972). "Phonology in Syntax," *Journal of Linguistics*, 8.

Hill, Archibald A. (1958). *Introduction to Linguistic Structures*. Harcourt, Brace & Co.

Hill, Archibald A. (1964). "Grammaticality," *Word*, 17.

Hockett, Charles F. (1942). "A System of Descriptive Phonology," *Language*, 18.

Hockett, Charles F. (1954). "Two Models of Grammatical Description," *Word*, 10.

Hockett, Charles F. (1955). *A Manual of Phonology*, Baltimore: Waverly Press.

Hockett, Charles F. (1958a). *A Course in Modern Linguistics*. Macmillan.

Hockett, Charles F. (1958b). "English Stress and Juncture," *Language Learning*, Special Issue.

Householder, Fred W. Jr. (1957). "Accent, Juncture, Intonation, and my Grandfather's Reader," *Word*, 13.

Hultzen, L.S. (1957). "Communication in Intonation: General American," 『音声の研究』 8.

Jackendoff, Ray S. (1972). *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. M.I.T. Press.

Jakobson, Roman. (1960). "Closing Statement: Linguistics and Poetics," in T.C. Sebeok, ed., *Style in Language*, M.I.T. Press.

Jakobson, Roman. (1966). "Henry Sweet's Paths Toward Phonemics," in C.E. Bazell et al., eds., *In Memory of J.R. Firth*, Longmans.

Jakobson, Roman. (1968). *Child Language, Aphasia and Phonological Universals*. Mouton & Co.

Jakobson, Roman, C.G.M. Fant, and Morris Halle. (1952). *Preliminaries to Speech Analysis*. M.I.T. Press.

James, Max H. (1957). "A Tentative Study of the Intonation of Japanese," *Language Learning*, 7.

Jespersen, Otto. (1909). *A Modern English Grammar*. Part I: Sounds and Spellings. London: George Allen & Unwin.

Jespersen, Otto. (1924). *The Philosophy of Grammar*. London: George Allen & Unwin.

Jespersen, Otto. (1933a). *Essentials of English Grammar*. London: George Allen & Unwin.

Jespersen, Otto. (1933b). "Notes on Meter," in *Selected Writings of Otto Jespersen*. Tokyo: Senjo.

Jespersen, Otto. (1938). *Growth and Structure of the English Language*. New York: Doubleday & Co.

Jones, Daniel. (1932^3). *An Outline of English Phonetics*. Third Edition. Leipzig: B.G. Teubner.

Jones, Daniel. (1960^9). *An Outline of English Phonetics*. Ninth Edition. Cambridge: W. Heffer & Sons.

Jones, Daniel. (1963^{12}). *English Pronouncing Dictionary*. London: J.M. Dent & Sons.

Joos, Martin. (1962). "The Definition of Juncture and Terminals," Second Texas Conference on Problems of Linguistic Analysis in English, The University of Texas.

Katz, Jerrold J. and Paul M. Postal. (1964). *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions*. M.I.T. Press.

Kenyon, John S. (1930⁴). *American Pronunciation.* Fourth Edition. Ann Arbor, Mich.: George Wahr.
Kenyon, John S. (1950¹⁰). *American Pronunciation.* Tenth Edition. Ann Arbon, Mich.: George Wahr.
Kenyon, John S. and Thomas A. Knott. (1949). *A Pronouncing Dictionary of American English.* G. & C. Merriam Co.
Keyser, S. Jay. (1969). "The Linguistic Basis of English Prosody," in David A. Reibel and Sanford A. Schane, eds., *Modern Studies in English,* Prentice-Hall.
King, Harold V. (1970). "On Blocking the Rules for Contraction in English," *Linguistic Inquiry,* 1.
Kingdon, R. (1958a). *The Groundwork of English Stress.* Longmans.
Kingdon, R. (1958b). *The Groundwork of English Intonation.* Longmans.
Kiparsky, Paul. (1972). "Metrics and Morphophonemics in the Rigveda," in M.K. Brame, ed., *Contributions to Generative Phonology,* University of Texas Press.
Kiparsky, Paul. (1975). "Stress, Syntax, and Meter," *Language,* 51.
Kisseberth, C. (1970). "On the Functional Unity of Phonological Rules," *Linguistic Inquiry,* 1.
Kruisinga, E. (1914). *An Introduction to the Study of English Sounds.* Groningen: P. Noordhoff.
Kruisinga, E. (1925⁴). *A Handbook of Present-Day English.* Part I. English Sounds. Groningen: P. Noordhoff.
Kurath, Hans. (1964). *A Phonology and Prosody of Modern English.* Heidelberg: Carl Winter Universitälsverlag.
Lakoff, George. (1972). "The Global Nature of the Nuclear Stress Rule," *Language,* 48.
Langacker, Ronald W. (1970). "English Question Intonation," in J.M. Sadock and A.L. Vanek, eds., *Studies Presented to Robert B. Lees by His Students,* Linguistic Research, Inc.
Lee, W.R. (1956). "English Intonation: A New Approach," *Lingua,* 5.
Leech, Geoffrey N. (1969). *A Linguistic Guide to English Poetry.* Longmans.
Lehnert, Martin. (1971). *Reverse Dictionary of Present-Day English.* Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.
Lenneberg, Eric H. (1967). *Biological Foundations of Language.* New York: Wiley.
Levin, Samuel R. (1976). "Concerning What Kind of Speech Act a Poem Is," in Teun A. van Dijk, ed., *Pragmatics of Language and Literature,* North-Holland Publishing Co.
Liberman, Mark and Ivan Sag. (1974). "Prosodic Form and Discourse Function," CLS , 10.
Lieberman, Philip. (1965). "On the Acoustic Basis of the Perception of Intonation by Linguists," *Word,* 21.
Lieberman, Philip. (1967). *Intonation, Perception, and Language.* M.I.T. Press.
Magnuson, Karl and Frank G. Ryder. (1970). "The Study of English Prosody: An Alternative Proposal," *College English,* 31.
Magnuson, Karl and Frank Ryder. (1971). "Second Thoughts on English Prosody," *College English,* 33.
Malone, Joseph L. (1967). "A Transformational Re-Examination of English Questions," *Language,* 43.
Marckwardt, Albert H. (1962). "On Accent and Juncture in English—A Critique," Second Texas Conference on Problems of Linguistic Analysis in English, University of Texas.
Martin, Samuel E. (1956). *Essential Japanese.* Charles E. Tuttle Co.
Newman, Stanley S. (1946). "On the Stress System of English," *Word,* 2.
Nishihara, T. and K. Nasu. (1975). *An Experimental Study of Intonation in Human Speech.* (material) Tokyo: Shohakusha.
Palmer, Harold E. (1933). *A New Classification of English Tones.* Tokyo: Kaitakusha.
Palmer, Harold E. (1939²). *A Grammar of Spoken English.* Second Edition. Cambridge. W. Heffer & Sons.
Palmer, Harold E. (1968). *The Scientific Study and Teaching of Languages.* Oxford University Press.
Pike, Kenneth L. (1945). *The Intonation of American English.* University of Michigan Press.
Pike, Kenneth L. (1947a). *Phonemics.* University of Michigan Press.
Pike, Kenneth L. (1947b). "Grammatical Prerequisites to Phonemic Analysis," *Word,* 3.
Pike, Kenneth L. (1948). *Tone Languages.* University of Michigan Press.
Pike, Kenneth L. (1952). "More on Grammatical Prerequistes," *Word,* 8.
Pike, Kenneth L. (1962). "Practical Phonetics of Rhythm Waves," *Phonetica,* 8.

Pike, Kenneth L. (1965). "On the Grammar of Intonation," Proceedings of the Fifth International Congress of Phonetic Sciences, Munster 1964. Basel: S. Karger.

Pike, Kenneth L. (1967). "Suprasegmentals in Reference to Phonemes of Item, of Process, and of Relation," *To Honor Roman Jakobson*, II. Mouton & Co.

Pope, Emily. (1971). "Answers to Yes-No Questions," *Linguistic Inquiry*, 2.

Quirk, Randolph et al. (1964). "Studies in the Correspondence of Prosodic to Grammatical Features in English," Proceedings of the Ninth International Congress of Linguists, Boston, 1962. Mouton & Co.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. (1972). *A Grammar of Contemporary English*. Longman Group Ltd.

Ross, John R. (1970). "On Declarative Sentences," in R.A. Jacobs and P.S. Rosenbaum, eds., *Readings in English Transformational Grammar*, Ginn and Company.

Ross, John R. (1972). "A Reanalysis of English Word Stress (Part I)," in M.K. Brame, ed., *Contributions to Generative Phonology*, University of Texas Press.

Ross, John R. (1973). "Leftward, Ho!" in S.R. Anderson and P. Kiparsky, eds., *A Festschrift for Morris Halle*, Holt, Rinehart and Winston.

Sadock, Jerrold M. (1970). "Whimperatives," in J.M. Sadock and A.L. Vanek, eds., *Studies Presented to Robert B. Lees By His Students*, Linguistic Research, Inc.

Sadock, Jerrold M. (1971). "Queclaratives," CLS, 7.

Sadock, Jerrold M. (1974). *Toward a Linguistic Theory of Speech Acts*. New York: Academic Press.

Schmerling, Susan F. (1971). "Presupposition and the Notion of Normal Stress," CLS, 7.

Schmerling, Susan F. (1974). "A Re-Examination of 'Normal Stress'," *Language*, 50.

Schmerling, Susan F. (1976). *Aspects of English Sentence Stress*. University of Texas Press.

Scholes, Robert J. (1971). *Acoustic Cues for Constituent Structure*. Mouton & Co.

Schubiger, Maria. (1958). *English Intonation: Its Form and Function*. Tubingen: Max Niemeyer Verlag.

Schubiger, Maria. (1964). "The Inter-play and Co-operation of Word-Order and Intonation in English," in D. Abercrombie et al., eds., *In Honour of Daniel Jones*, Longmans.

Searle, John R. (1969). *Speech Acts*. Cambridge University Press.

Sgall, Petr. (1972). "Fillmore's Mysteries and Topic vs. Comment," *Journal of Linguistics*, 8.

Sgall, Petr. (1975). "Conditions of the Use of Sentences and a Semantic Representation of Topic and Focus," in E.L. Keenan, ed., *Formal Semantics of Natural Language*, Cambridge University Press.

Shen, Yao. (1956). "The English Question: Rising or Falling Intonation," *Language Learning*, 6.

Smith, Henry L. Jr. (1956). *Linguistic Science and the Teaching of English*. Harvard University Press.

Stockwell, Robert P. (1960). "The Place of Intonation in a Generative Grammar of English," *Language*, 36.

Stockwell, Robert P. (1962). "On the Analysis of English Intonation," Second Texas Conference on Problems of Linguistic Analysis in English, University of Texas.

Sweet, Henry. (1891). *A New English Grammar*. Part I. Oxford: Clarendon Press.

Sweet, Henry. (1898). *A New English Grammar*. Part II. Oxford: Clarendon Press.

Sweet, Henry. (1964). *The Practical Study of Languages*. Oxford University Press.

Tatsuma, Minoru. (1966). "Rhythm Patterns in English Poetry: Its Variety and Classification," 『音声の研究』 12.

Tauber, Abraham, ed. (1965). *George Bernard Shaw on Language*. London: Peter Owen.

Trager, George L. (1964). "The Intonation System of American English," in D. Abercrombie et al. eds., *In Honour of Daniel Jones*, Longmans.

Trager, George L. and Henry L. Smith, Jr. (1951). *An Outline of English Structure*. Norman, Oklahoma: Battenburg Press.

Uldall, Elizabeth. (1964). "Dimensions of Meaning in Intonation," in D. Abercrombie et al, eds., *In Honour of Daniel Jones*, Longmans.

Vennemann, Theo. (1975). "Topics, Sentence Accent, Ellipsis: A Proposal for Their Formal Treatment," in E.L. Keenan, ed., *Formal Semantics of Natural Language*, Cambridge University Press.

Wellek, Rene and Austin Warren. (1949). *Theory of Literature*. New York: Harcourt, Brace and

Company.
Wells, R.S. (1945). "The Pitch Phonemes of English," *Language*, 21.
Wimsatt, W.K., Jr. (1970). "The Rule and the Norm: Halle and Keyser on Chaucer's Meter," *College English*, 31.
Wimsatt, W.K., Jr. and Monroe C. Beardsley. (1959). "The Concept of Meter: An Exercise in Abstraction," PMLA, 74.
Worth, Dean S. (1964). "Suprasyntactics," in Proceedings of the Ninth International Congress of Linguistis, Mouton & Co.
Yorio, Carlos Alfredo. (1973). "The Generative Process of Intonation," *Linguistics*, 97.
Zwicky, Arnold M. (1970). "Auxiliary Reduction in English," *Linguistic Inquiry*, 1.

II

安倍　勇. (1958a). 『英語スピーチ・メロディ教本』篠崎書林.
安倍　勇. (1958b). 『英語イントネーションの研究』研究社.
安倍　勇. (1965). 「英語の抑揚」『英語の発音』(現代英語教育講座 4) 研究社.
安倍　勇. (1970). 「疑問文のイントネーション」『英語青年』1970年9月号.
安倍　勇. (1971). 「疑問文のイントネーションについて」『音声の研究』15.
安倍　勇. (1972). 『日英イントネーション法』学書房出版.
青木常雄. (1933). 『英文朗読法大意』研究社.
有坂秀世. (1959). 『音韻論』増補版. 三省堂.
別宮貞徳. (1977). 『日本語のリズム』講談社.
藤田竜生. (1976). 『リズム』風濤社.
福村虎治郎. (1965). 「文法的要素としての超分節要素」『中島文雄教授還暦記念論文集』研究社.
橋本進吉. (1959). 『国文法体系論』岩波書店.
服部四郎. (1933). 『アクセントと方言』明治書院.
服部四郎. (1951). 『音韻論と正書法』研究社.
服部四郎. (1954). 『音声学』岩波書店.
服部四郎. (1960). 『言語学の方法』岩波書店.
市河三喜. (1912). 『英文法研究』研究社.
石井正之助. (1965). 「英語の韻律法」『英語の発音』(現代英語教育講座 4) 研究社.
岩崎民平訳. (1957). 『音調と強調』研究社.
笠原五郎. (1956). 『英語イントネーションの構造』開拓社.
川上　蓁. (1961). 「言葉の切れ目と音調」『国学院雑誌』1961年5月.
金田一春彦. (1951). 「ことばの旋律」『国語学』第5輯.
金田一春彦. (1957). 『日本語』岩波書店.
黒沢浩太郎. (1957). 『英語朗読法の研究』篠崎書林.
日下部重太郎. (1914). 『国文朗読法』丁未出版社.
桝矢好弘. (1970). 「音声言語の知覚」『英語学』第4号.
桝矢好弘. (1975). 『英語音声学』こびあん書房.
Mcalpine, Helen. 石井正之助. (1959). 「英文朗読法」『語学指導の基礎』(中) 研究社.
三浦つとむ. (1967). 『認識と言語の理論』第1部. 勁草書房.
宮地　裕. (1971). 『文論』明治書院.
毛利可信訳述. (1958). 『Speech と Language』研究社.
西尾　実. (1961). 『言語生活の探究』岩波書店.

小川和夫.（1971）.「Full-grown Lamb」『英語青年』1971年10月号.
小川和夫.（1972a）.「同音の語群凝集力について」『英語文学世界』1972年2月号.
小川和夫.（1972b）.「メトリカル・フットについて」『英語文学世界』1972年4月号.
御輿員三.（1971）.「詩の解釈」『英語文学世界』1971年12月号.
御輿員三.（1972）.「アイアンビック管見」『英語文学世界』1972年3月号.
大石初太郎.（1969）.「日本語の音声表現について」『日本語の発見』未来社.
大石初太郎.（1971）.「疑問文のイントネーション」『話しことば論』秀英出版.
奥田夏子.（1975）.『英語のイントネーション』英和出版.
大塚高信.（1974）.『英文法論考—批判と実践』研究社.
佐伯功介.（1950）.「服部博士の音韻論について」『コトバ』第九巻第一号.
斎藤　勇.（1958）.『英詩概論』研究社.
杉浦　実訳.（1971）.『リズムの本質』みすず書房.
谷口次郎.（1973）.「構文の多義性とイントネーション」『英語青年』1973年5, 6, 7月号.
谷崎潤一郎.（1960）.『文章読本』中央公論社.
立間　実.（1971）.『英詩の律動』松柏社.
時枝誠記.（1941）.『国語学原論』岩波書店.